

# 博多 87

—博多遺跡群第124次調査の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第758集



2004

福岡市教育委員会

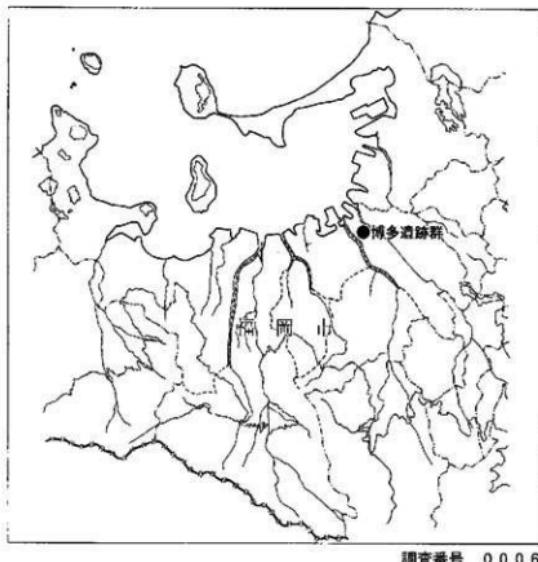


はか

た

# 博 多 87

－博多遺跡群第124次調査の報告－  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第758集



2004

福岡市教育委員会



## 序

古くから大陸文化を受け入れる窓口として栄えてきた福岡市には、数多くの文化財が存在しています。福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録による保存に努めているところです。

本書で報告いたします博多遺跡群は中世の国際貿易都市として知られています。今回の調査でもそれを裏付けるような多量の貿易陶磁をはじめ、数多くの文化財が発掘されました。特に陶磁器を埋納した土坑や道路跡など注目すべき発見がありました。

本書が市民の皆様の埋蔵文化財に対するご理解を深める一助となりますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただきました鹿島建設株式会社九州支店をはじめ関係各位の皆様には、心より感謝申し上げます。

平成16年3月31日

福岡市教育委員会  
教育長 生田征生

## 例　言

1. 本書は、福岡市博多区店屋町169番の社屋建設に伴い、福岡市教育委員会が2000（平成12）年4月3日から2001（平成13）年3月10日にかけて発掘調査を実施した博多（はかた）遺跡群第124次調査の報告書である。
2. 遺構の呼称は記号化し、杭列→S A、建物→S B、溝→S D、井戸→S E、道路→S F、土坑→S K、ピット→S P、その他→S X、とした。遺構番号は種類に関係なく連番とした。
3. 本書に使用した遺構実測図は大演菜緒、上方高弘、藤野雅基、近藤幸子、原口美奈子、田上勇一郎が作成した。遺物実測図は田中克子、田上が作成した。また、製図には、山崎純男、井上蘭子、田中、上塘貴代子、萩尾朱美、田上があたった。
4. 本書に使用した写真は、表紙を力武卓治、Ph.6を大庭康時、Ph.39を井上、空中写真を株式会社ダイワ、その他を田上が撮影した。
5. 本書に使用した標高は海拔高である。
6. 本書に使用した方位は磁北である。本地域では真北に対し  $6^{\circ} 20'$  西偏する。
7. 出土した陶磁器の分類は、中世前期は「博多出土貿易陶磁分類表」（福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告 IV - 博多 - 福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集別冊 福岡市教育委員会 1984）による。中世後期は、白磁については、森田勉「14~16世紀の白磁の型式分類と編年」「貿易陶磁研究No.2」、青磁については「14~16世紀の青磁碗の分類」「同」、青花については、小野正敏「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」「同」（ただし、染付を青花に読み替え）による。
8. 本書の編集・執筆は田上が行った。
9. 本調査にかかるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・公開される予定である。



Ph.1 調査地点遠景（東から）

# 目 次

Iはじめに	1
1. 調査にいたる経緯	1
2. 調査の組織	1
3. 調査地点の立地と環境	2
II調査の記録	4
1. 調査の方法と経過	4
2. 第1面の調査	5
3. 第2面の調査	6
SK119	8
SK123	9
SK137	11
SK162	11
SX167	13
SX168	14
S3170	15
SK236	16
SK281	19
SE482	50
SD488・SF489・SD545	52
SK512	59
SE520	61
4. 第3面の調査	62
SD17・SA234・SA235・埋立	61
SK182	68
SK188	69
SK189	70
SK190	71
SK197	72
SB321	73
SD324	74
SE343	75
SE345	76
S3373	77
SK410	79
SE424	81
SK432・SK439	82
SP557・SP562	84
SK668	84
SX691・SX751	85
SD741	87
SD742	92
3面下の遺物	97
5. その他の出土遺物	98
(1) 嵌入土器	98
(2) 龍泉窯系青磁	98
(3) 京德焼系青磁・その他の中国産青磁	102
(4) 中匂窯白磁	105
(5) 貴惣窯系青花	105
(6) 潭州窯系青花	108
(7) 青白磁・青花・緑釉	108
(8) 明暦上朝陶磁	108
(9) 天目・茶入れ	112
(10) タイ・ベトナム陶磁	112
(11) 磁青土器	112
(12) 上製品	112
(13) 木製品	112
(14) 石製品	126
(15) 鋳造鋳造遺物	126
(16) 金銀製品・ガラス製品	126
IIIまとめ	128

## 挿図目次

Fig.1	諸多立派群と潜在地帯の比較 (1/25,000) .....	1
Fig.2	調査地帯の位置と周辺の調査 (1/20,000) .....	3
Fig.3	調査区域 (1/500) .....	4
Fig.4	CIM北原1号墳 (1/50) .....	4
Fig.5	SK1 1 9 2 番地図 (1/40) .....	8
Fig.5	SK1 1 9 1 号土器物実測図 (1/3) .....	9
Fig.7	SK1 2 3 番地図 (1/40) .....	9
Fig.8	SK1 2 3 1 号土器物実測図 (1/3) .....	10
Fig.9	SK1 3 7 番地図 (1/40) .....	11
Fig.10	SK1 3 7 1 号土器物実測図 (1/3) .....	11
Fig.11	SK1 6 2 番地図 (1/40) .....	12
Fig.12	SK1 6 2 1 号土器物実測図 (1/3) .....	13
Fig.13	SK1 6 7 番地図 (1/40) .....	13
Fig.14	SK1 6 7 1 号土器物実測図 (25 : 1/4, 倍 : 1/3) .....	13
Fig.5	SK1 6 8 番地図 (1/40) .....	14
Fig.16	SK1 6 8 1 号土器物実測図 (25 : 27 : 1/3, 28 : 1/8, 29 : 1/4) .....	14
Fig.17	SE1 7 0 番地図 (1/40) .....	15
Fig.18	SE1 7 0 1 号土器物実測図 (25 : 1/4, 倍 : 1/3) .....	15
Fig.19	SK2 3 6 番地図 (1/40) .....	17
Fig.20	SK2 3 6 1 号土器物実測図 (1/3) .....	21
Fig.21	SK2 3 6 2 1 号土器物実測図 (2 : 1/3) .....	22
Fig.22	SK2 3 6 3 1 号土器物実測図 (3 : 1/3) .....	23
Fig.23	SK2 3 6 4 1 号土器物実測図 (3 : 1/3) .....	24
Fig.24	SK2 3 6 5 1 号土器物実測図 (5 : 1/3) .....	25
Fig.25	SK2 3 6 6 1 号土器物実測図 (6 : 1/3) .....	26
Fig.26	SK2 3 6 7 1 号土器物実測図 (7 : 1/3) .....	27
Fig.27	SK2 3 6 8 1 号土器物実測図 (1/10) .....	27
Fig.28	SK2 5 1 番地図 (1/40) .....	28
Fig.29	SK2 8 1 号土器物実測図 (1/3) .....	43
Fig.30	SE1 6 2 番地図 (1/40) .....	50
Fig.31	SE4 8 2 1 号土器物実測図 (195 : 1/4, 倍 : 1/3) .....	51
Fig.32	D4 8 8 - SF4 8 9 - SD5 4 5 実測図 (1/50) .....	54
Fig.33	D4 8 8 - SF4 8 9 - SD5 4 5 1 番地図 (1/20) .....	54
Fig.34	D4 8 8 1 号土器物実測図 (1/3) .....	55
Fig.35	SF4 8 9 1 号土器物実測図 (1 : 1/3) .....	56
Fig.36	SF4 8 9 2 1 号土器物実測図 (2 : 1/3) .....	57
Fig.37	SE4 8 9 3 1 号土器物実測図 (3 : 1/3) .....	58
Fig.38	SK5 1 2 番地図 (1/40) .....	59
Fig.39	SK5 1 2 1 号土器物実測図 (1/3) .....	60
Fig.40	SE5 2 0 番地図 (1/60) .....	61
Fig.41	SE5 2 0 1 号土器物実測図 (362 : 363 : 1/4, 倍 : 1/3) .....	61
Fig.42	SD1 0 1 7 - SA2 3 4 - SA2 3 5 - 南丘天井塚・土塁図 (1/50) .....	65
Fig.43	SD1 7 1 号土器物実測図 (377 : 1/4, 倍 : 1/3) .....	66
Fig.44	SE3 3 沟土器物実測図 (395 : 1/8, 倍 : 1/3) .....	68
Fig.45	SK1 8 2 番地図 (1/40) .....	68
Fig.46	SK1 8 2 1 号土器物実測図 (1/3) .....	69
Fig.47	SK1 8 5 番地図 (1/40) .....	69
Fig.48	SK1 8 5 1 号土器物実測図 (1/3) .....	69
Fig.49	SK1 8 9 番地図 (1/40) .....	70
Fig.50	SK1 8 9 1 号土器物実測図 (1/3) .....	70
Fig.51	SK1 9 0 番地図 (1/40) .....	71
Fig.52	SK1 9 0 1 号土器物実測図 (449 : 1/4, 倍 : 1/3) .....	71
Fig.53	SK1 9 7 番地図 (1/40) .....	72
Fig.54	SK1 9 7 1 号土器物実測図 (1/3) .....	72
Fig.55	SE3 2 1 2 実測図 (1/40) .....	73
Fig.56	SL3 2 2 1 1 号土器物実測図 (1/3) .....	74
Fig.57	SD3 2 4 1 番地図 (1/40) .....	74
Fig.58	SD3 2 4 1 1 号土器物実測図 (1/3) .....	74
Fig.59	SE3 4 4 3 大廻図 (1/40) .....	75
Fig.60	SE3 4 4 3 1 号土器物実測図 (474 : 1/8, 倍 : 1/3) .....	75
Fig.61	SE3 5 5 番地図 (1/40) .....	76
Fig.62	SE3 4 5 出土土器物実測図 (1/3) .....	77
Fig.63	SE3 7 3 番地図 (1/40) .....	77
Fig.64	SE3 7 3 1 号土器物実測図 (488 : 1/4, 489~491 : 1/8, 倍 : 1/3) .....	78
Fig.65	SK4 1 0 番地図 (1/40) .....	79
Fig.66	SK4 1 0 1 号土器物実測図 (1/3) .....	80
Fig.67	SE4 2 4 2 実測図 (1/40) .....	81
Fig.68	SE4 2 4 2 山上1号土器物実測図 (1/3) .....	81
Fig.69	SK4 3 2 - SK4 3 9 番地図 (1/40) .....	82
Fig.70	SK4 3 2 出土土器物実測図 (1/3) .....	83
Fig.71	SP5 5 7 - SP5 6 2 番地図 (1/40) .....	84
Fig.72	SK6 6 8 実測図 (1/40) .....	84
Fig.73	SK6 6 8 1 号土器物実測図 (568 : 1/4, 倍 : 1/3) .....	85
Fig.74	SA6 6 9 1 号土器物実測図 (1/40) .....	85
Fig.75	SE6 6 9 1 1 号土器物実測図 (1/3) .....	86
Fig.76	SE7 5 1 1 号土器物実測図 (1/3) .....	87
Fig.77	SD7 4 1 実測図 (1/40) .....	88
Fig.78	SD7 4 1 1 号土器物実測図 (1/3) .....	89
Fig.79	SD7 4 1 2 1 号土器物実測図 (2 : 1/3) .....	90
Fig.80	SD7 4 2 1 番地図 (1/40) .....	93
Fig.81	SD7 4 2 出土土器物実測図 (1 : 1/3) .....	94
Fig.82	SD7 4 2 1 号土器物実測図 (2 : 1/3) .....	95

Fig.83	江戸の染物測量図 (90): 1/4, 面: 1/3	97
Fig.84	横濱市入出港測量図 (1/3)	98
Fig.85	横濱市港内大測量 (1/3)	99
Fig.86	父兄株式会社、その他の中近海貿易測量図 (1/3)	101
Fig.87	中川産白佐屋大測量 (1/3)	102
Fig.88	元長屋正五郎米糀園 1 (1/3)	104
Fig.89	元長屋正五郎米糀園 2 (1/3)	105
Fig.90	東京築港古谷大測量 (1/3)	107
Fig.91	若林・新井大測量 (1/3)	108
Fig.92	明治上野御料牧場圖 1 (1/3)	109
Fig.93	明治上野御料牧場圖 2 (1/3)	110
Fig.94	元町・新入江大測量 (1/3)	111
Fig.95	タイ・ベトナム大測量図 (1/3)	112
Fig.96	横古七葉茶園 (1/3)	113
Fig.97	上野原大測量 (1/3)	114
Fig.98	木綿品大測量 (1/3)	115
Fig.99	木綿品大測量 2 (99), 992-1004: 1/4, 面: 1/3	116
Fig.100	木綿品美術館 3 (1/3)	117
Fig.101	木綿品美術館 4 (1/3)	118
Fig.102	木綿品美術館 5 (1/4)	119
Fig.103	木綿品美術館 6 (1/4)	120
Fig.104	木綿品大測量 7 (1/6)	121
Fig.105	木綿品大測量 8 (1/6)	122
Fig.106	石野島古測量 1 (1/20)	123
Fig.107	石野島古測量 2 (1/2)	124
Fig.108	石野島古測量 3 (1/6)	125
Fig.109	豊島向島諸島大測量 (1/3)	126
Fig.110	全國製品美術館 (1/2)	127

图4-1 第1面金体图 (×100)

附加2 第2面全体図 (1/100)

付錄3 第3圖全體圖 (1/100)

写真目次

Fh-1	糞堆地の選択 (東から)	
Fh-2	C区北壁上端 1 (南側から)	
Fh-3	C区北壁上端 2 (南側から)	
Fh-4	C区北壁上端 3 (南側から)	
Fh-5	A区西壁廊下 (上部北側)	
Fh-6	A区第1層会堂 (西から)	
Fh-7	A区2階廊下 (上部北側)	
Fh-8	A区中央会堂 (南側から)	
Fh-9	A区南北壁会堂 (南側から)	
Fh-10	B区2階廊下 (上部北側)	
Fh-11	C区2階廊下 (上部南側)	
Fh-12	SK1 1~9施設状況 (山西から)	
Fh-13	SK1 1~9施設出力状況 (山西から)	
Fh-14	SK1 1~9上邊り (約1/2)	
Fh-15	SK1 2~3施設状況 (山西から)	
Fh-16	SK1 2~3 (山西から)	
Fh-17	SK1 2~3地上走査 (約1/3)	
Fa-1	SK1 3~7山上走査 (約1/3)	
Fa-2	SK1 1~2 (北側から)	
Fa-30	SK1 6~2植物山下地況 (北側から)	
Fa-22	SK1 6~2地上走査 (約1/4)	
Fh-22	SX1 6~7 (当から)	
Fh-23	SX1 6~7山上走査 (約1/3)	
Fh-24	SX1 10~8 (北から)	
Fh-25	SX1 6~8山上走査 (約1/4)	
Fh-26	SX1 7~0 (北側から)	
Fh-27	SX1 7~0 (北門から)	
Fh-28	SX1 7~0山上走査 (約1/3)	
Fh-29	SK2 2~5 7~0状況 1 (東から)	
Fh-30	SK2 2~5 7~0植物山下地況 3 (北から)	
Fh-31	SK2 2~5 7~0植物山下地況 3 (南側から)	
Fh-32	SK2 2~5 7~0植物山下地況 3 (山西から)	
Fh-33	SK2 2~5 7~0植物山下地況 3 (東側から)	
Fh-34	SK2 2~5 7~0植物山下地況 5 (東側から)	
Fh-35	SK2 2~5 7~0植物山下地況 7 (山西から)	
Fh-36	SK2 2~5 7~0植物山下地況 8 (南側から)	
Fh-37	SK2 2~5 7~0植物山下地況 9 (南側から)	
Fh-38	SK2 2~5 7~0植物山下地況 10 (東側から)	
Fh-39	SK2 2~5 7~0植物山下地況 11 (南側から)	
Fh-40	SK2 2~6山上走査 1	
Fh-41	SK2 2~6山上走査 2 (約1/3)	
Fh-42	SK2 2~6山上走査 3 (約1/3)	
Fh-43	SK2 2~6山上走査 4 (約1/3)	
Fh-44	SK2 2~6山上走査 5 (約1/3)	
Fh-45	SK2 2~6山上走査 6 (約1/3)	
Fh-46	SK2 2~6山上走査 7 (約1/3)	
Fh-47	SK2 2~6山上走査 8 (約1/3)	
Fh-48	SK2 2~6山上走査 9 (約1/3)	
Fh-49	SK2 2~6山上走査 10 (約1/3)	
Fh-50	SK2 2~6山上走査 11 (約1/3)	

Ph30	SK 2 3 5 山土器物	12 (約1/3)	49
Ph31	SK 2 3 6 山土器物	13 (約1/3)	51
Ph32	SK 2 3 6 山土器物	14 (約1/3)	51
Ph33	SK 2 3 6 山土器物	15 (約1/3)	51
Ph34	SK 2 3 6 山土器物	16 (約1/3)	51
Ph35	SK 2 3 6 山土器物	17 (約1/3)	51
Ph36	SK 2 3 6 山土器物	18 (約1/3)	51
Ph37	SK 2 3 6 山土器物	19 (約1/3)	51
Ph38	SK 2 3 6 山土器物	20 (約1/3)	51
Ph39	SK 2 8 1 山土器物 (前東から)	21 (約1/3)	51
Ph40	SK 2 8 1 山土器物 (約1/3)	22 (約1/3)	51
Ph41	SE 4 8 2 (西面から) ....	23 (約1/3)	51
Ph42	SE 4 8 2 袋 (七面から) ....	24 (約1/3)	51
Ph43	SE 4 8 2 山土器物 (約1/3)	25 (約1/3)	51
Ph44	SD 4 8 8 (東面から) ....	26 (約1/3)	51
Ph45	SD 4 8 8 - SF 4 9 (北西から) ....	27 (約1/3)	51
Ph46	SF 4 8 9 土器 1 (北西から) ....	28 (約1/3)	51
Ph47	SF 4 8 9 土器 2 (北西から) ....	29 (約1/3)	51
Ph48	SF 4 8 9 土器 3 (北西から) ....	30 (約1/3)	51
Ph49	SF 4 8 9 土器 4 (北西から) ....	31 (約1/3)	51
Ph50	SF 4 8 9 土器 5 (北西から) ....	32 (約1/3)	51
Ph51	SD 4 8 8 山土器物 (約1/3)	33 (約1/3)	51
Ph52	SE 4 8 9 山土器物 (約1/3)	34 (約1/3)	51
Ph53	SD 4 8 8 山土器物 (約1/3)	35 (約1/3)	51
Ph54	SD 4 8 8 (東面から) ....	36 (約1/3)	51
Ph55	SD 4 8 8 - SF 4 9 (北西から) ....	37 (約1/3)	51
Ph56	SF 4 8 9 土器 1 (北西から) ....	38 (約1/3)	51
Ph57	SF 4 8 9 土器 2 (北西から) ....	39 (約1/3)	51
Ph58	SF 4 8 9 土器 3 (北西から) ....	40 (約1/3)	51
Ph59	SF 4 8 9 土器 4 (北西から) ....	41 (約1/3)	51
Ph60	SF 4 8 9 土器 5 (北西から) ....	42 (約1/3)	51
Ph61	SE 4 8 2 (西面から) ....	43 (約1/3)	51
Ph62	SE 4 8 2 袋 (七面から) ....	44 (約1/3)	51
Ph63	SE 4 8 2 山土器物 (約1/3)	45 (約1/3)	51
Ph64	SD 4 8 8 (東面から) ....	46 (約1/3)	51
Ph65	SD 4 8 8 - SF 4 9 (北西から) ....	47 (約1/3)	51
Ph66	SF 4 8 9 土器 1 (北西から) ....	48 (約1/3)	51
Ph67	SF 4 8 9 土器 2 (北西から) ....	49 (約1/3)	51
Ph68	SF 4 8 9 土器 3 (北西から) ....	50 (約1/3)	51
Ph69	SF 4 8 9 土器 4 (北西から) ....	51 (約1/3)	51
Ph70	SF 4 8 9 土器 5 (北西から) ....	52 (約1/3)	51
Ph71	SD 4 8 8 山土器物 (約1/3)	53 (約1/3)	51
Ph72	SE 4 8 9 山土器物 (約1/3)	54 (約1/3)	51
Ph73	SK 5 1 2 山土器物 (3件: 約1/2、他: 約1/3)	55 (約1/3)	51
Ph74	SK 5 2 0 (東から) ....	56 (約1/3)	51
Ph75	A区 3面土器 (上が北面) ....	57 (約1/3)	51
Ph76	A区 4面土器 (西面から) ....	58 (約1/3)	51
Ph77	B区 3面土器 (上が北面) ....	59 (約1/3)	51
Ph78	C区 3面土器 (上が北面) ....	60 (約1/3)	51
Ph79	SA 2 3 3 (西面から) ....	61 (約1/3)	51
Ph80	SA 2 3 5 (北面から) ....	62 (約1/3)	51
Ph81	SD 1 7 1 山土器物 (約1/3)	63 (約1/3)	51
Ph82	厚ら七出山土器物 (約1/3)	64 (約1/3)	51
Ph83	SK 1 8 8 (底面から) ....	65 (約1/3)	51
Ph84	SK 1 8 9 (北面から) ....	66 (約1/3)	51
Ph85	SK 1 9 0 (南面から) ....	67 (約1/3)	51
Ph86	SK 1 9 7 山土器物上灰况 1 (西面から) ....	68 (約1/3)	51
Ph87	SK 1 9 7 山土器物出土灰况 2 (北西から) ....	69 (約1/3)	51
Ph88	SR 3 2 1 山土器 (南から) ....	70 (約1/3)	51
Ph89	SE 3 2 1 (北面から) ....	71 (約1/3)	51
Ph90	SE 3 2 1 袋 (北京から) ....	72 (約1/3)	51
Ph91	SD 3 2 4 電気炉上灰况 (北面から) ....	73 (約1/3)	51
Ph92	SK 3 4 3 (底面から) ....	74 (約1/3)	51
Ph93	SE 3 4 3 (底面から) ....	75 (約1/3)	51
Ph94	SE 3 4 3 山土器 (北面から) ....	76 (約1/3)	51
Ph95	SD 4 5 7 山土器 (西から) ....	77 (約1/3)	51
Ph96	SE 3 7 3 (北面から) ....	78 (約1/3)	51
Ph97	SE 3 7 3 月輪 (西から) ....	79 (約1/3)	51
Ph98	SK 4 1 0 山土器物 (約1/3)	80 (約1/3)	51
Ph99	SE 4 2 4 (北面から) ....	81 (約1/3)	51
Ph100	SK 4 3 2 - SK 4 3 3 山土器物出土灰况 (北から) ....	82 (約1/3)	51
Ph101	SK 4 3 2 山土器物出土灰况 (東から) ....	83 (約1/3)	51
Ph102	SD 4 5 5 7 (北面から) ....	84 (約1/3)	51
Ph103	SP 5 6 2 (北面から) ....	85 (約1/3)	51
Ph104	SX 6 9 1 山土器物灰况 1 (北から) ....	86 (約1/3)	51
Ph105	SX 6 9 1 山土器物灰况 2 (南面から) ....	87 (約1/3)	51
Ph106	SD 7 4 1 山土器物 (約1/3)	88 (約1/3)	51
Ph107	SD 7 4 2 (南東から) ....	89 (約1/3)	51
Ph108	SD 7 4 2 北 (西から) ....	90 (約1/3)	51
Ph109	SD 7 4 2 北東灰况 (西から) ....	91 (約1/3)	51
Ph110	SD 7 4 2 北 (南面) (南面) ....	92 (約1/3)	51
Ph111	SD 7 4 2 山土器物 (約1/3)	93 (約1/3)	51
Ph112	深鉢形尖底盆 (約1/3)	94 (約1/3)	51
Ph113	兼用深底盆・その他の中腹直縁器 (約1/3)	95 (約1/3)	51
Ph114	中腹直縁器 (約1/3)	96 (約1/3)	51
Ph115	紫地模染高脚器 (約1/3)	97 (約1/3)	51
Ph116	丹州模染高脚器 (約1/3)	98 (約1/3)	51
Ph117	青白釉・青白釉・紺緑釉 (約1/3)	99 (約1/3)	51
Ph118	削口上唇周縁 (90°・93°・約1/4、他: 約1/3)	100 (約1/3)	51
Ph119	木製品 1 (約1/3)	101 (約1/3)	51
Ph120	木製品 2 (約1/3)	102 (約1/3)	51
Ph121	会式漆器・ガラス器皿 (1188: 約1/2、他: 約1/1)	103 (約1/3)	51

## 表目次

Tab 1	袖 1 面高基一覧	5
Tab 2	袖 2 面北指 定	7
Tab 3	SK 2 3 6 山土器物	48
Tab 4	第3面造り一覧	63
Tab 5	山土器2	127
Tab 6	陶器器・施釉焼粘土の山土器物の新成北版	129
Tab 7	16世紀代の陶研器・粘土山土器とその比較	129

# I はじめに

## 1. 調査にいたる経緯

1999（平成11）年8月5日付けで、鹿島建設株式会社九州支店常務取締役支店長平田光宏氏から福岡市博多区店屋町169番における社屋ビル建設に伴う埋蔵文化財の事前審査権が福岡市教育委員会埋蔵文化財課に提出された。埋蔵文化財課では、申請者が博多遺跡群の範囲内であることから、試掘調査が必要と判断した。試掘調査は10月14日に実施し、対象地市側に整地層、北側では湿地を確認し、輸入陶磁器の出土をみた。そこで、試掘調査の結果をふまえ、申請者と遺跡の取り扱いについて協議を重ね、建築工事によって破壊される部分を対象に本調査を実施することで合意に達した。本調査は鹿島建設株式会社九州支店の受託調査として2000（平成12）年4月3日より2001（平成13）年3月10日まで実施した。調査は当初大庭があたったが、異動により現場を離れたため4月17日より山上が引き継いだ。また、整理作業と報告書の刊行は2001（平成13）年度から2003（平成15）年度にかけて行った。

## 2. 調査の組織

発掘の調査・整理にあたっての組織は以下の通りである。

調査委託	鹿島建設株式会社九州支店 常務取締役支店長 平田光宏
調査主体	福岡市教育委員会 教育長 生田征生
調査總括	埋蔵文化財課 課長 山崎純男
	審査第2係長 力武卓治（～平成13年度）
	田中壽夫（平成14年度～）
調査担当	文化財整備課 本曰（谷口）真由美（～平成12年度）
	御手洗清（平成12年度～）
調査担当	埋蔵文化財課事前審査係 杉山富雄、宮井善朗（試掘調査）
	調査第2係 大庭康時、田上勇一郎（本調査）
調査補助	大演葉緒 上方高弘 藤野雅英
調査作業	石川君子 井口正愛 江越初代 大久保學 大庭智子 間部静江 金尾伸之介 川崎良古賀理志 小嶋佑紀 小峰稔貴 近藤幸子 笹井武 貞方桃子 鶴田憲祐 清水明 関加代子 岩根崎昭子 都野浩之 水隈和代 長田嘉造 中村裕也 潤田昌信 能丸勢津子 野口ミヨ 早川浩 原口美奈子 降矢哲男 松永シゲ子 宮崎タマ子 村崎祐子 森垣隆視 山内恵 吉出清
整理補助	田中克子
整理作業	丸井節子 山本良子 尾崎君枝 加集和子 荒谷美和 小野涼子 上塘貴代子 萩原朱美
調査協力	山崎純男 力武卓治 井上蘗子（埋蔵文化財課） 三木隆行（文化財整備課） 比佐陽一郎 片多雅樹（埋蔵文化財センター） 森本朝子 有島美江 片上涼子

発掘調査に至るまでの条件整備や調査中の調整などに関して、鹿島建設株式会社九州支店には多くご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し、無事終了することができた。記して感謝する。

### 3. 調査地点の立地と環境

博多遺跡群は玄界灘を面する博多湾岸の砂丘上に位置する遺跡である。玄界灘を渡ると朝鮮半島、さらにその向こうには中国大陆があり、日本の中でもっとも大陸に近い地域にある。その立地から、古くから大陸の影響を受けてきた。特に古代から中世にかけては国際貿易都市として発展し、出土する遺物も国際色豊かなものである。大量の中国からの輸入陶磁器は国内に類を見ない。また、朝鮮、タイ、ペトナムなどからもたらされた陶磁器類も目を引くところである。

博多遺跡群が立地する砂丘は、現地表の微地形やボーリング調査、文化財発掘調査等により、海岸線に沿って3列並んでいることがわかつた。一番海寄りは「息の浜」と呼ばれる。陸地化するのは比較的遅かったようで、おもに13世紀以降都市化が進んだ。陸地側2列は「博多浜」と名付けられている。息の浜と博多浜の砂丘は11世紀後半頃半島中央部でつながり、両側は海が湾人していた。この西側の湾入部は中世後期には楊ヶ池と呼ばれる湿地となっていた。この湿地の南、博多浜側が今回の調査地点である。

これまで行われた周辺の調査の概要を記す。

29次調査地点は121次調査地点の北側100mに位置する。太閤町割後の2度にわたる埋め立ての状況が発掘されている。

40次調査地点は北東200mに位置する。12世紀後半以降に湿地を埋め立て、生活域にしていることが判明した。また、14世紀の初め頃作られた道路が発見されている。この道路は16世紀末まで継続して使用されていた。またこの調査で発見された4号土坑は貿易陶磁器91点、備前焼2点、銅製品2点を一括埋納したもので1580年代に位置づけられている。

49次調査は南西20mに位置する。14世紀代の銅の溶解炉が検出されており、鋳型や錫の羽口、坩埚、

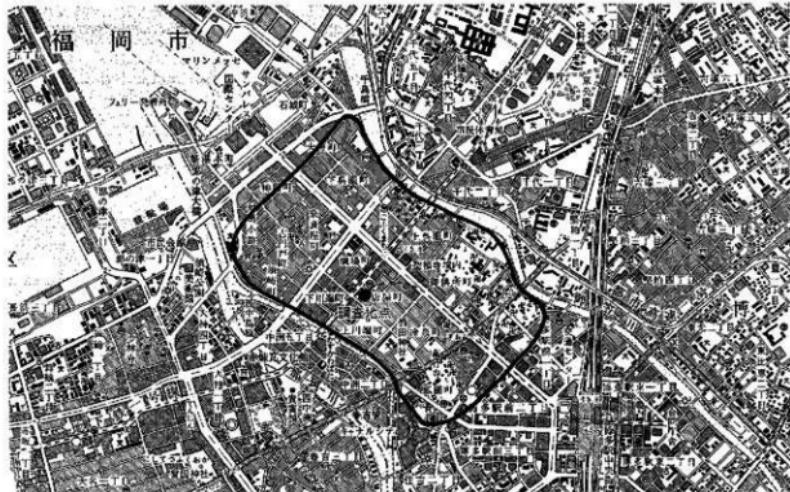


Fig. 1 博多遺跡群と調査地点の位置 (1/25,000)

銅製品、銅洋などの鋳造関連遺物が多数発見されている。

72次調査地点は西50mに位置する。15世紀後半以降の溝、井戸、土坑などが発見されている。ここでも鋳型や櫓の基壇などの鋳造関連遺物が出土している。

87次調査地点は南60mにある。基壇の砂丘面はない。13世紀代に堆積、埋立が進み、14世紀以降の遺構が存在する。16世紀代の道路が検出されている。

95次調査地点は北東150mに位置し、40次調査で発見された道路の延長部が見つかっている。また、13世紀末～14世紀初めの埋立が調査された。

北西150mでは工事の立会時に、土坑から16世紀代の白磁皿13枚が重なった状態で発見されている。また、息の浜市内町の砂丘の落ち際が発見されている。

今回の報告の中心となる中世後期の博多は大友氏や大内氏による争奪の対象となりたびび戦火に見舞われている。16世紀の火災として永禄2（1559）年筑紫惟門の焼き討ち、永禄6（1563）年博多津銘乱、天正8（1580）年船造守氏の焼き討ち、天正14（1586）年島津氏の焼き討ちなどが文献から見いだせる（佐伯1994）。島津氏の焼き討ちで壊滅的な被害を受けた博多は豊臣秀吉による「太閤町割」で街路・街区を新たにし、近世都市として再興された。

#### 参考文献

佐伯弘次 1994 「中世博多の火災と焼土層」 『法哈鏡』第3号 博多研究会  
調査の内容は各福岡市埋蔵文化財調査報告書を参照した。

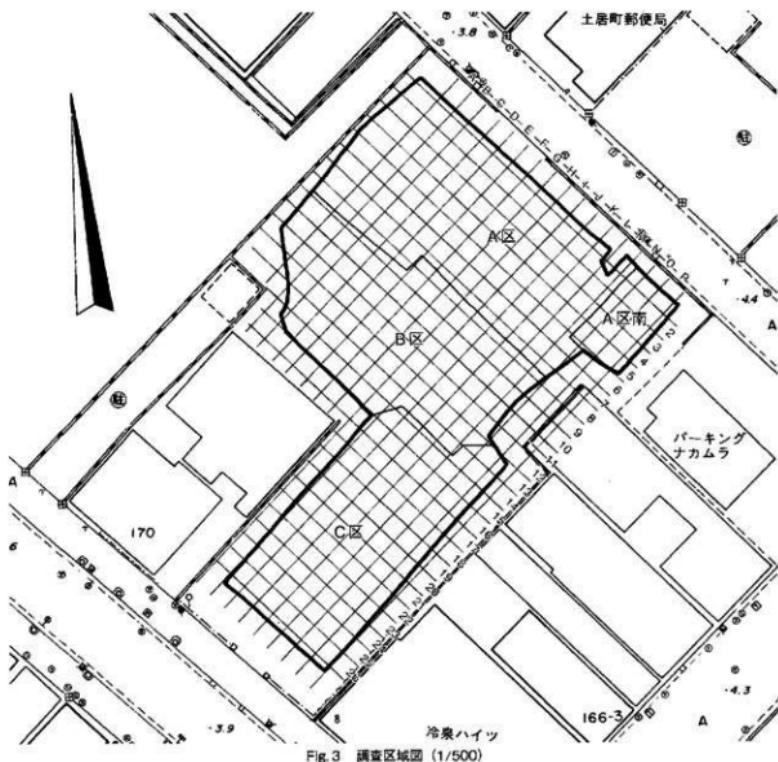


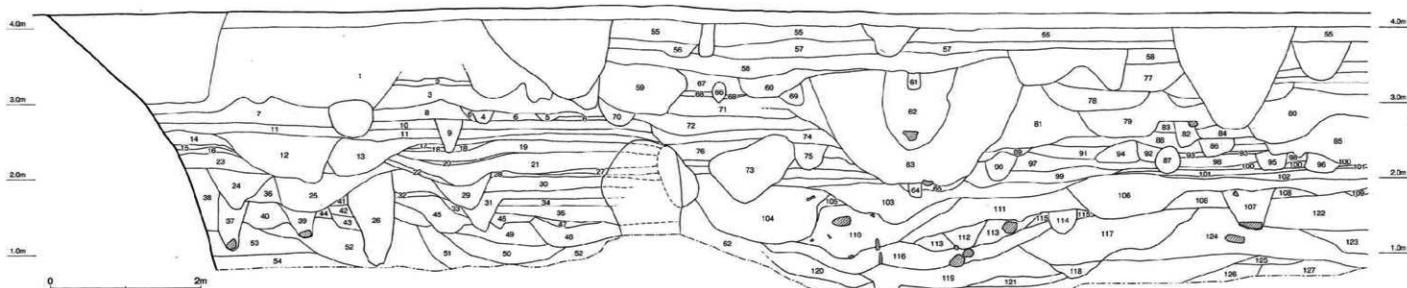
## II 調査の記録

### 1. 調査の方法と経過

調査は排土置き場の確保のため3区画に分けて行い、北からA区・B区・C区と名付けた。グリッドは敷地にあわせて2m四方に設定し、アルファベットと数字で位置を示した（Fig.3参照）。

発掘調査は2000（平成12）年4月3日より開始した。しかし建物解体が行われていたため、A区の南側（A区南）と北側（A区北）の一部から調査を開始した。A区南はコンクリートの建物基礎があり他の部分とやや隔離されていたため、先行して4面の調査を行った。建物解体終了後、A区全体を広げ、3面の調査を行った。その後、順にB区、C区と実査を進めたが、A区の第1面が近世の遺構面であったため、B区とC区は第2面と第3面の2面の調査とした。調査は2001（平成13）年3月10日終了した。





1: 黄褐色土。他土・炭化物を多く含む。しまりがない。  
2: 黄褐色砂質土。  
3: 黄褐色砂質土。  
4: 黄褐色砂質土。  
5: 黄褐色砂質土。灰質粘土ブロック含む。  
6: 黄褐色砂質土。かたくしまる。  
7: 黄褐色砂質土。  
8: 黄褐色砂質土。やや粘質。  
9: 黄褐色砂質土。  
10: 黄褐色砂質土。黄褐色砂質土の互層。  
11: 灰褐色粘土。泥土・高粘性物質。  
12: 灰褐色砂質土。灰褐色粘土ブロック・他土・炭化物含む。  
13: 灰褐色砂質土。灰褐色粘土ブロック・他土・炭化物含む。  
14: 灰褐色砂質土。灰褐色粘土ブロック・他土・炭化物含む。  
15: 土・炭化物質。かたくしまる。  
16: 黑褐色粘土質土。  
17: 黑褐色砂質土。  
18: 黑褐色粘土。  
19: 黑褐色粘土。  
20: 黑褐色粘土。灰褐色砂質土の混合。  
21: 黑褐色粘土。炭化物含む。  
22: 黑褐色粘土。黑褐色砂質土の互層。  
23: 黑褐色粘土。他土・炭化物含む。  
24: 黑褐色粘土。他土・炭化物含む。しまりなし。  
25: 黑褐色粘土。炭化物質と他土の混合。他土・炭化物含む。  
26: 黑褐色粘土。  
27: 黑褐色粘土。他土・炭化物含む。しまりなし。  
28: 黑褐色砂質土。灰褐色砂質土の互層。かたくしまる。  
29: 黑褐色砂質土。灰褐色砂質土の互層。しまりなし。  
30: 黑褐色砂質土。灰褐色砂質土の互層。かたくしまる。  
31: 黄褐色砂質土。  
32: 黄褐色砂質土。

33: 黄褐色砂質土。  
34: 黄褐色砂質土。かたくしまる。  
35: 黄褐色砂質土と黄褐色の互層。かたくしまる。  
36: 黄褐色砂質土。炭化物含む。  
37: 黄褐色砂質土。灰褐色砂質土。  
38: 黄褐色砂質土。やや粘質。  
39: 黄褐色砂質土。  
40: 黄褐色砂質土。  
41: 黄褐色砂質土。  
42: 黄褐色砂質土。  
43: 黄褐色砂質土。  
44: 黄褐色砂質土。  
45: 黄褐色砂質土。灰褐色砂質土の互層。  
46: 黑褐色砂質土。灰褐色砂質土の互層。  
47: 黄褐色砂質土と灰褐色の互層。  
48: 黑褐色砂質土。  
49: 黑褐色砂質土。  
50: 黄褐色砂質土。灰褐色砂質土の互層。  
51: 黄褐色砂質土と灰褐色砂質土の混合。  
52: 黄褐色砂質土。  
53: 黄褐色砂質土。  
54: 黄褐色砂質土。  
55: 黄褐色砂質土。他土・炭化物含む。しまりなし。  
56: 黄褐色砂質土。他土・炭化物含む。混合物含む。しまりなし。  
57: 黄褐色砂質土。他土・炭化物含む。しまりなし。  
58: 黑褐色砂質土。灰褐色砂質土の互層。かたくしまる。  
59: 黑褐色砂質土。互層。他土・炭化物含む。  
60: 黄褐色砂質土。  
61: 黄褐色砂質土。  
62: 黄褐色砂質土。  
63: 黄褐色砂質土。灰褐色砂質土。灰褐色砂質土ブロック・他土・炭化物含む。  
64: 黄褐色砂質土。砂質含む。

65: 灰褐色砂質土。  
66: 灰褐色砂質土。  
67: 灰褐色砂質土。炭化物含む。  
68: 灰褐色砂質土。  
69: 黄褐色砂質土。灰褐色砂質土の互層。  
70: 黄褐色砂質土。  
71: 黄褐色砂質土。  
72: 灰褐色砂質土と系留植物と黄褐色砂質土の互層。  
73: 灰褐色砂質土。他土・炭化物含む。  
74: 灰褐色砂質土。灰褐色粘土ブロック・他土・炭化物含む。  
75: 灰褐色砂質土。灰褐色砂質土・他土・炭化物少含む。  
76: 黄褐色砂質土。  
77: 黄褐色砂質土。  
78: 灰褐色砂質土。炭化物含む。  
79: 黄褐色砂質土。炭化物多含む。  
80: 灰褐色砂質土。灰褐色粘土ブロック・他土・炭化物含む。  
81: 黄褐色砂質土。灰褐色砂質土の互層。他土・炭化物含む。  
82: 黄褐色砂質土。他土・炭化物含む。  
83: 黄褐色砂質土と黄褐色砂質土の互層。  
84: 黄褐色砂質土。灰褐色粘土・他土・炭化物多含む。  
85: 黄褐色砂質土。灰褐色砂質土の互層。他土・炭化物含む。  
86: 黄褐色砂質土。他土・炭化物含む。  
87: 黄褐色砂質土。他土多含む。  
88: 黄褐色砂質土。他土・炭化物多含む。  
89: 黄褐色砂質土。他土・炭化物含む。しまりなし。  
90: 黄褐色砂質土。他土多含む。

91: 黄褐色砂質土。他土多含む。  
92: 黄褐色砂質土。他土多含む。  
93: 黄褐色砂質土。他土多含む。  
94: 黄褐色砂質土。他土多含む。  
95: 黄褐色砂質土。他土・炭化物多含む。  
96: 黄褐色砂質土。他土・炭化物含む。  
97: 黄褐色砂質土と灰褐色砂質土の互層。やわらぎ。  
98: 黄褐色砂質土。かたくしまる。  
99: 黄褐色砂質土と黄褐色砂質土の互層。かたくしまる。  
100: 土・炭化物質。かたくしまる。  
101: 黄褐色砂質土。他土・炭化物質。かたくしまる。  
102: 黄褐色砂質土。かたくしまる。  
103: 黄褐色砂質土と黄褐色砂質土の互層。  
104: 灰褐色砂質土。  
105: 黄褐色砂質土。  
106: 黄褐色砂質土。わさび葉・黒北食味。  
107: 黄褐色砂質土。他土・炭化物含む。  
108: 黄褐色砂質土。  
109: 黄褐色砂質土。  
110: 黄褐色砂質土。灰褐色砂質土。黄褐色砂質土の互層。  
111: 黄褐色砂質土。灰褐色砂質土の互層。他土・炭化物含む。  
112: 黄褐色砂質土。灰褐色砂質土の互層。  
113: 黄褐色砂質土。  
114: 黄褐色砂質土。  
115: 黄褐色砂質土と黄褐色砂質土の混合。  
116: 黄褐色砂質土。黄褐色砂質土の互層。  
117: 黄褐色砂質土。黄褐色砂質土の互層。他土・炭化物含む。  
118: 黄褐色砂質土。灰褐色砂質土の互層。  
119: 灰褐色砂質土。  
120: 黄褐色砂質土と黄褐色砂質土の混合。  
121: 黄褐色砂質土。他土・炭化物含む。  
122: 灰褐色砂質土。かたくしまる。  
123: 灰褐色砂質土。  
124: 黄褐色砂質土。灰褐色砂質土。灰褐色砂質土の互層。他土・炭化物含む。  
125: 黄褐色砂質土。  
126: 灰褐色砂質土。  
127: 黄褐色砂質土と黄褐色砂質土の混合。

Fig. 4 C区北壁土層図 (1/50)



Ph. 2 C区北壁土層 1 (南東から)



Ph. 3 C区北壁土層 2 (南東から)



Ph. 4 C区北壁土層 3 (南東から)

## 2. 第1面の調査

第1面はA区のみの調査である。遺構面の標高は1.7~2.8mであり、南側が高い。

溝6条と土坑38基、掘立柱建物1棟、建物基礎などを調査した(付図1・Tab.1)。18世紀以降の遺構を中心とする。溝の方向や土坑の主軸は現在の町割りの軸と一致するものが多い。

S D O 3は直角に折れる溝で、溝の内部に多数の礫が充填されていた。建物の基礎と考えられる。S D O 9は発掘区の北端に位置する幅2m、深さ50cmの溝で、直角に曲がっている。大量の国産の陶磁器、瓦のほか中国産青磁(811)、墨書き陶磁器(919)や漆塗、曲物、下駄、建築部材などの木製品(961・1004・1055・1067・1073・1084・1085・1094・1097)が出土している。S K 2 4はD~F-2~4に位置する不定形土坑で、土師器や国産陶磁器、瓦、中国産白磁皿(827・842)、土製の面型(954)、漆碗(958)、刷毛(1027)、墨書きのある木札(1021・1022)、その他木製部材(1029・1042・1049・1054・1056・1072・1074・1075・1077)、下駄(1101・1102)等が出土している。S K 3 9・4 4・4 6・4 7・4 9・5 0・5 4・9 4・1 1 3などの土坑は大量の国産陶磁器が廃棄されていた。S B 1 1 1は1×2間の掘立柱建物で、非常に貧弱な柱が残っていた。

Tab.1 第1面遺構一覧

記号	番号	種類	地区	位 置	備考	記号	番号	種類	地区	位 置	備考
S K	01	橢円形土坑	A区	P-1~2	近世	S K	66	円形土坑	A区	I-J-3	19世紀
S D	02	南北溝	A区	N-P-3	19世紀	S K	57	橢円形土坑	A区	I-J-5~6	近世
S D	03	右前基礎	A区	N-4~5, O-1~4	近世	S K	75	円形土坑	A区	G-5~6	17世紀
S X	04	右前基礎内部	A区	N-O-2~3	近世	S K	77	不定形土坑	A区	A-B-5~6, C-5	近世
S D	05	東西溝	A区	P-1~5	近世	S K	78	円形土坑	A区	D-0	近世
S D	09	溝	A区	A-B-2~4	18~19世紀	S K	80	方形土坑	A区	F-G-B	18世紀
S K	24	不定形土坑	A区	D-F-2~4	18~19世紀	S K	81	方形土坑	A区	J-6~7	近世
S K	39	不定形土坑	A区	A-B-6~9, C-B-9	19世紀	S K	92	方形土坑	A区	I-J-6~7	18~19世紀
S K	40	橢円形土坑	A区	C-D-7~8	18~19世紀	S K	93	方形土坑	A区	H-1~5~6	18世紀 壁面駆土貼り
S K	41	不定形土坑	A区	D-5, E-4~6, F-5	18世紀 壁貼?	S K	64	不定形土坑	A区	F-G-7	近世
S K	42	埋甕	A区	D-B-9	近世	S D	65	東西溝	A区	I-J-4	近世
S K	43	橢円形土坑	A区	D-E-6	近世	S K	66	橢円形土坑	A区	I-3~4	近世
S K	44	橢円形土坑	A区	E-7~6	18~19世紀	S K	88	円形土坑	A区	J-2~3	17世紀
S K	45	方形土坑	A区	F-6~7	18~19世紀	S D	89	東西溝	A区	H-J-2~3	近世
S K	46	方形土坑	A区	G-H-6~7	18~19世紀	S K	90	橢円形土坑	A区	K-3~4	近世
S K	47	円形土坑	A区	F-G-6~6	18~19世紀	S K	91	不定形土坑	A区	J-K-3	近世
S K	48	橢円形土坑	A区	F-G-2~3	18世紀	S K	92	方形土坑	A区	J-2~K-L-2~3	17世紀
S K	49	楕丸形土坑	A区	F-G-3~5	18~19世紀	S K	94	橢円形土坑	A区	E-F-B-9	18~19世紀
S K	50	橢円形土坑	A区	G-H-3~4	18~19世紀	S B	111	壁飾	A区	B-D-5~7	18世紀 1間×2間
S K	51	楕丸形土坑	A区	G-H-3	18~19世紀	S K	112	円形土坑	A区	F-7	近世
S K	52	橢円形土坑	A区	G-H-3	近世	S K	113	橢円形土坑	A区	B-C-A~6	17世紀前半
S K	53	橢円形土坑	A区	G-4~5	近世	S K	114	土坑	A区	B-C-3, B-4	17世紀前半
S K	54	橢円形土坑	A区	G-I-4~5	18世紀	S K	115	土坑	A区	I-J-5~6	18~19世紀



Ph.5 A区1面空撮 (上が北東)



Ph.6 A区南1面全景 (西から)

### 3. 第2面の調査

標高1.7m～2.3mで調査面を設定した。B・C区は最初の調査面となるため、近世の遺構も多数ある。A区南は4面調査したうちの第2面と第3面がこの面にあたる。16～17世紀代の造構が中心である。溝18条、井戸3基、土坑147基、道路、遺物集中部7ヶ所とピット多数を調査した（付図2・Tab.2）。

調査区北側は湿地状である。調査区西側には幅4～5mの道路が存在し、湿地と道路に画された範囲が屋敷となっていたと考えられる。この推定屋敷地内には道路寄りにピットが多く、道筋に面して建物があったと考えられ、その奥には井戸や石積土坑、板壁の土坑などが存在する。その境目あたりから陶磁器を一括埋納した土坑が検出された。埋納された陶磁器から、かなりの財力を持つ博多商人の屋敷地であったと考えられる。



Ph.8 A区南2面全景（南西から）



Ph.7 A区2面空撮（上が北東）



Ph.9 A区南3面全景（南西から）



Ph.10 B区2面空撮（上が北東）



Ph.11 C区2面空撮（上が南東）

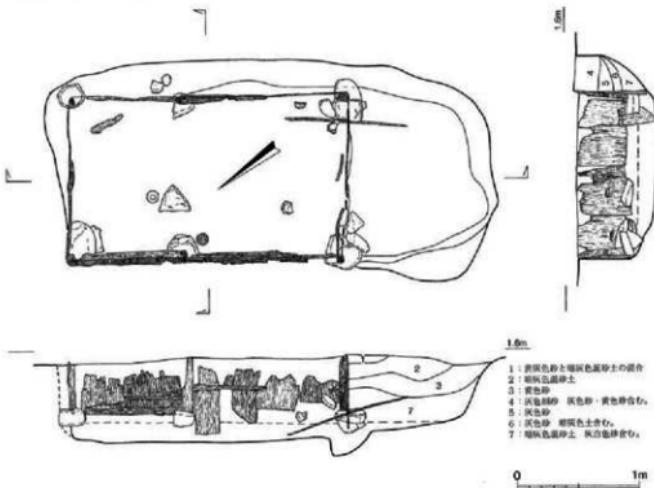
Tab.2 第2章構造一覧

**SK119 (Fig.5・6、Ph.12~14)**

F・G-3～5に位置する長方形の土坑で、堀方の長辺が3.6m、短辺が1.7m、確認面から底までの深さが70cmである。四隅と長辺の間に柱を立て、その間を横木と立板で壁を作る。板の間は長辺2.3m、短辺1.3mとなる。6本の柱の下には礫石を据える。南側の二辺は壁より外に堀方が認められ、特に南西壁は広く掘削されている。床面はやや掘りすぎてしまったが、図面の点線部分で、薄い木質が確認されたので、このあたりが使用時の床面であろう。

出土遺物をFig. 6に示す。1が白磁碗C群。見込みに印花文を施す。2は白磁菊皿E-4。SK146の破片と接合する。3は青花模花鉢である。体部は爪削になっており、外面の縦割した部分に白堆線を施す。4は土人形の犬である。背中に貫通しない穿孔がある。この他、土師器の杯・皿、龍泉窯系青磁、備前焼、豆金(1169)などが出土している。

出土遺物から16世紀後半の遺構と考えられる。



Ph.12 SK119確認状況 (北西から)



Ph.13 SK119遺物出土状況 (北西から)

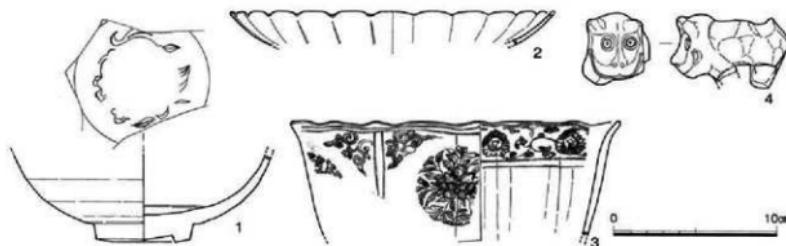


Fig. 6 SK119出土遺物実測図 (1/3)



Ph.14 SK119出土遺物 (約1/3)

**SK123 (Fig. 7・8、Ph.15~17)**

K・L - 5~7に位置する石積土坑である。石積の内法は長辺1.5m、短辺1.0m、確認面からの深さは60~80cmである。南西側の床面がやや高くなっている。

白磁碗・皿、龍泉窯系青磁碗、景德鎮窯系青磁皿、青花碗・皿C群・稜花皿、朝鮮王朝の褐釉陶器、瓦質の火鉢・擂鉢・備前焼擂鉢・唐津焼・肥前の染付・土鍋・瓦などが出土している。5は龍泉窯系青磁碗B類。釉は高台内側途中までかかる。6は青磁輪花皿である。高台内は透明釉で「裏白」とする。景德鎮窯系。7は白磁菊皿E-4。墨付の釉を掻き取る。8は縁折の青花稜花皿。9は刷毛目粉青沙器の壺である。

出土遺物から17世紀の遺構と考えられる。

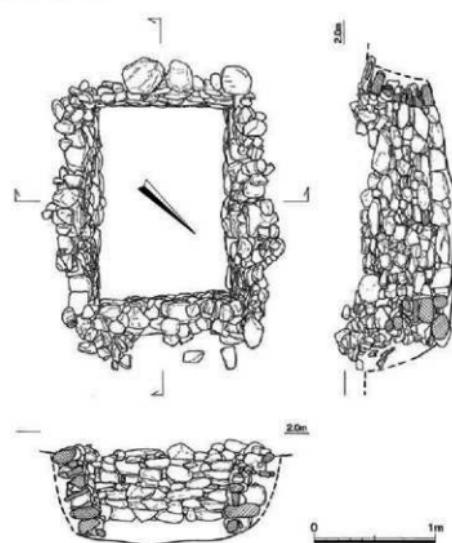


Fig. 7 SK123実測図 (1/40)



Ph.15 SK123発掘状況（南西から）



Ph.16 SK123（南西から）

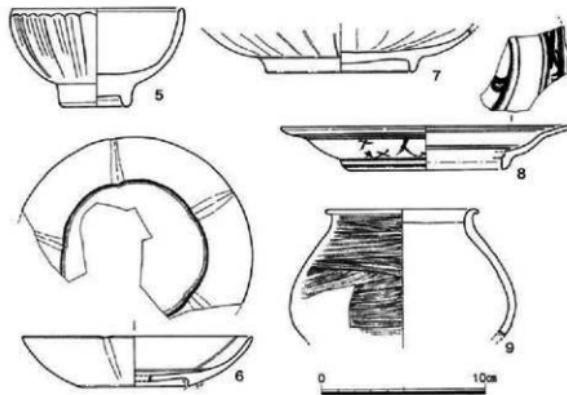


Fig. 8 SK123出土遺物実測図 (1/3)



Ph.17 SK123出土遺物 (約1/3)

### S K 137 (Fig.9・10、Ph.18)

H - 5・6で確認された径0.9~1m、深さ40cmの略円形小土坑である。

土師器の小皿・壺、白磁E群の皿、青花、朝鮮王朝の灰青陶器碗、備前焼壺、土鍋、瓦等が出土した。10は土師器の小皿。口縁部に油煙が付く。11~13は土師器の壺である。13は体部下半手づくね成形で京都系の土師器。14は白磁の小杯。見込みの釉は輪状に描き取る。豊付の釉を描き取る。15は青花碗。絵付けのほかに外面に波瀾文が線刻される。16は粉青沙器の刷毛目碗。内面に目跡が4ヶ所みられる。

出土遺物から16世紀後半の遺構と考えられる。

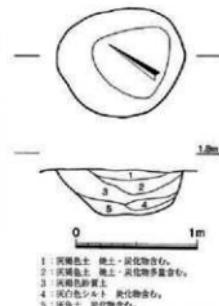


Fig.9 SK 137実測図 (1/40)

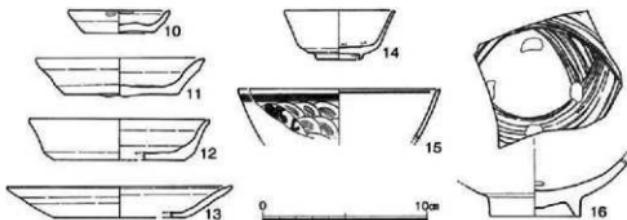


Fig.10 SK 137出土遺物実測図 (1/3)



Ph.18 SK 137出土遺物 (約1/3)

### S K 162 (Fig.11・12、Ph.19~21)

C - 6・7に位置する長方形の土坑で、SK 161に切られる。長辺1.7m、短辺0.8m、深さ30cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。南東隅から完形の備前焼壺と無釉陶器の鉢が出土した。壺に鉢で蓋をしていたのが、ずれたような出土状況である。

Fig.12に実測図を示す。17は備前焼壺。体部下半はあまりしまらずに底部へつながる。間壁編年V期か。18は無釉陶器の鉢。体部は底部から斜め上方に直線的に立ち上がり、口縁下でややしまる。口唇部は内側につまみだす。備前焼か。このほか土師器の壺、皿、朝鮮王朝と思われる綠褐釉陶器瓶、土鍋、瓦等が出土している。

出土遺物から16世紀後半の遺構と考えられる。



Ph.19 SK 162 (北西から)

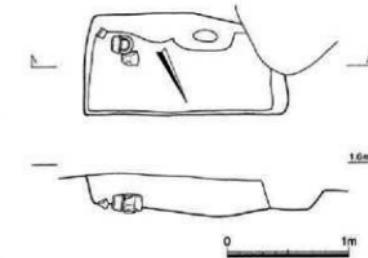
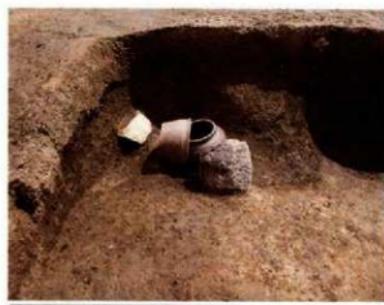


Fig.11 SK 162実測図 (1/40)



Ph.20 SK 162遺物出土状況 (北東から)

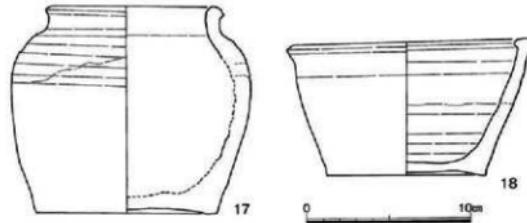


Fig.12 SK 162出土遺物実測図 (1/3)



17



18

Ph.21 SK 162出土遺物 (約1/4)

S X 167 (Fig.13・14, Ph.22・23)

B・C-6・7に位置する径1.5m程度の窯と遺物の集中部である。

土師器の壺・皿、白磁皿、龍泉窯系青磁碗、青花碗・皿、瓦質土器、土鍋、備前焼甕、瓦等が出土している。19は土師器の小皿、20・21は土師器の壺である。22は完形の龍泉窯系青磁碗A類である。南宋末～元代初の製品か。外面にやや細身の簾襷弁を施すが、彫りはあまり深くない。釉の色はやや白みがかって明るいグリーンを呈する。疊付の釉を搔き取る。23は瓦質の浅鉢。24は土師質の焰塔。25は軒平瓦である。

22はやや古いが、その他の出土遺物から16世紀後半の遺構と考えられる。



Ph.23 S X167出土遺物 (約1/3)



Fig.13 S X167実測図 (1/40)

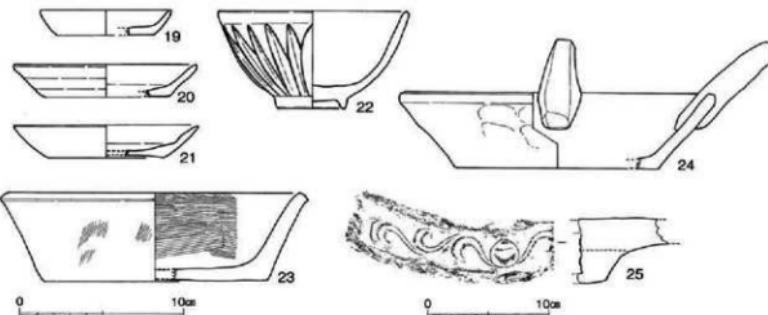


Fig.14 S X167出土遺物実測図 (25:1/4, 他:1/3)

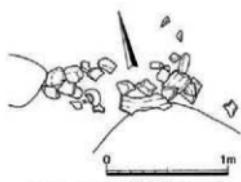


Fig.15 SX168実測図 (1/40)



Ph.24 SX168 (北から)

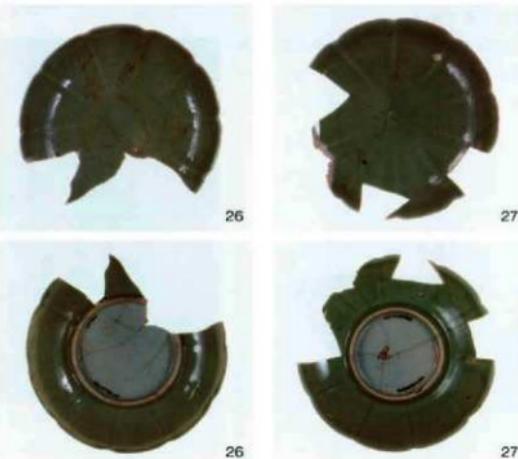
S X 1 6 8 (Fig.15・16、  
Ph.24・25)

D・E-4・5に位置する  
砾と遺物の集中部である。

土師器の壺・皿、景德鎮窯  
系青磁皿、朝鮮王朝の緑褐釉  
陶器瓶、瓦質土器の鉢、備前  
焼の壺などが出土している。

26・27は青磁の輪花皿。口  
径はほぼ同じだが、高台は  
27が小さい。疊付を釉剥ぎす  
る。高台内は透明色釉がかかり  
り「裏白」とする。景德鎮窯  
系。28は備前焼の壺。外面肩  
部2ヶ所にヘラ記号がある。  
29は瓦質土器である。火鉢か。

出土遺物から16世紀後半の  
造構と考えられる。



Ph.25 SX168出土遺物 (約1/4)

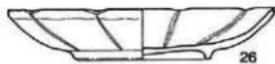


Fig.16 SX168出土遺物実測図 (26・27:1/3, 28:1/8, 29:1/4)

**S E 170 (Fig.17・18, Ph.26~28)**

N-4・5で確認された円形石組井戸である。第2面調査の段階で礫の集中部と認識していたが、第3面の深さまで下げるから調査を開始した。石組井戸とわかったのは石をはばはずし終わった頃であった。

出土遺物をFig. 18に示す。30・31は土師器の小皿である。32は龍泉窯系青磁の稜花皿である。内外面に片切形の割花文がある。33は白磁菊皿E-

4。高台内に「大明年造」の銘がある。34は白磁皿E-2。35は軒平瓦である。このほか白磁D群の皿、瓦質の擂鉢・火鉢・備前焼壺・擂鉢、瓦等が出土している。

出土遺物から  
16世紀後半の遺構と考えられる。

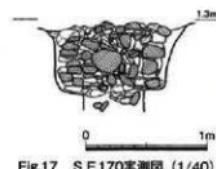
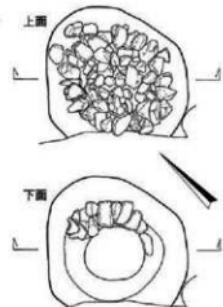


Fig.17 S E 170実測図 (1/40)



Ph.26 S E 170確認状況 (北東から)



Ph.27 S E 170 (北西から)



Ph.28 S E 170出土状況 (約1/3)

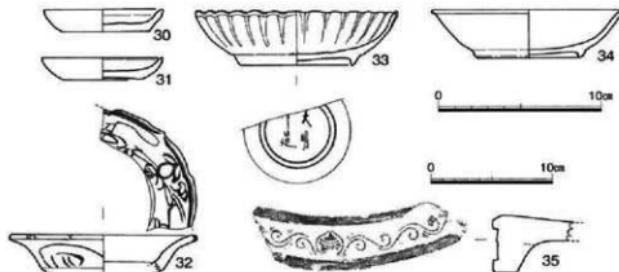


Fig.18 S E 170出土遺物実測図 (35: 1/4, 他: 1/3)

### S K 2 3 6 (Fig.19~27, Ph.29~58, Tab.3)

K・L-13で発見された陶磁器埋納土坑である。径90cm、深さ20cmの円形の土坑に陶磁器、金属製品が整然と並べられていた。重機による掘り下げ時に青花皿が引っかかったので、取ろうすると、更に数枚重なった状態で埋まっているのがわかったため、重機での掘り下げを中止した。廻回を掘り進めるに次々に陶磁器が現れ、重ねられて埋められている状況が明らかになった。

遺物は陶磁器136点、鉄錠1点、錫製品5点である。陶磁器は同じ種類で重ねられており、Fig.27に示すとおり、群毎に記号をつけて取り上げた。各個別の計測値はTab.3にまとめた。

A~Hは銅鍋を伏せた中に納められている。

A群は上2枚が白磁の小皿である(36・37)。36は見込みの釉を輪状に搔き取る。

A群の3枚目以降とB群は盤打ちの青釉陶器の小皿である。A群に11点(38~48)、B群に10点(49~58)の、計21点ある。中に同じ型の製品がみられる。露胎の外底部には「青」「練」「正」「福」といった文字が陽刻で打ち出されている。52~55には「二」と墨書きされている。

C群は盤打ちの綠釉陶器の小皿である(59~70)。12点ある。一番上の1点(59)は破片であったため先に取り上げており、実測図や写真に記録されていない。青釉陶器小皿と同様、同じ型のものがみられる。花卉の数はすべて16弁で、露胎の外底部には「福」の字が陽刻で打ち出される。

D群は青磁の小皿である(71~76)。6点ある。菱形の棱花皿である。明るい緑や深い緑や黄色味がかった緑など釉の色に違いがみられる。

E群・F群は青花の小杯である。E群4点(77~80)、F群10点(81~90)の計14点ある。ほかのものがすべて伏せて置かれていた中で、F群のみ横に寝かせて重ねられている。高い輪高台を持ち、II線は外反する。疊付の釉を搔き取る。外面は蓮花が描かれる。内面は寿山福海が描かれるものと果実が描かれるものがある。II線内部は二重条線のものと四方棒のものと唐草文がある。高台内は「大明年造」(79・81~84・88~90)、「大明年造」(77・78・85~87)と書かれるが、1点(80)のみ「宣德年造」の銘がある。

Gは青花碗である(91)。側面四方に円形の花文を描く。高台は小ぶりで高台内に「大明宣德年製」の銘がある。

Hは青花碗E群(92)。口縁部の内外面と見込みに一重圓線が施される。高台内には「大明年造」の銘。

Iは備前焼捕鉢(93)。開墾編年のV期にあたる。口円部はくの字にまがり、II線帯の外面は沈線が二重に巡る。掘り口は9条を一単位に放射状に施す。よく使用されており、かなりすり減っている。

Jは青磁の三足香炉である(94)。外面は青い緑、内面は白色を呈する。

K群は口縁外反の白磁皿E-2で、8点ある(95~102)。うち、3点(98・100・102)の高台内に「方」の銘がある。

L群の一一番上は朝鮮王朝の灰青陶器碗である(104)。体部は直線的に聞く。見込み、高台に5カ所の目跡が見られる。見込みの目跡の間2カ所に釉着した跡がある。

灰青陶器碗の下には青花皿C群が9点重ねられている(105~113)。厚手のつくりで、葵筋底には砂が付着するものがある。109は見込みに「正」の字が、外面には波濤文と文字?が3ヶ所描かれる。そのほかは見込みに菊花、外面に波濤文と芭蕉葉文を描く。漳州窯系。

Mは朝鮮王朝の褐釉陶器瓶である(103)。口縁部を欠く。

N群は青花皿B1群で9点ある(114~122)。見込みに樹石蘭杆図、外面に牡丹萱草を描く。

O群とP群は青花皿C群(123~142)。10点ずつ重ねられている。P群は錫製のひさげの中に重ねられていた(133~142)。このうち2点は最初に重機で引っかけて、原位置から動いている。20点と

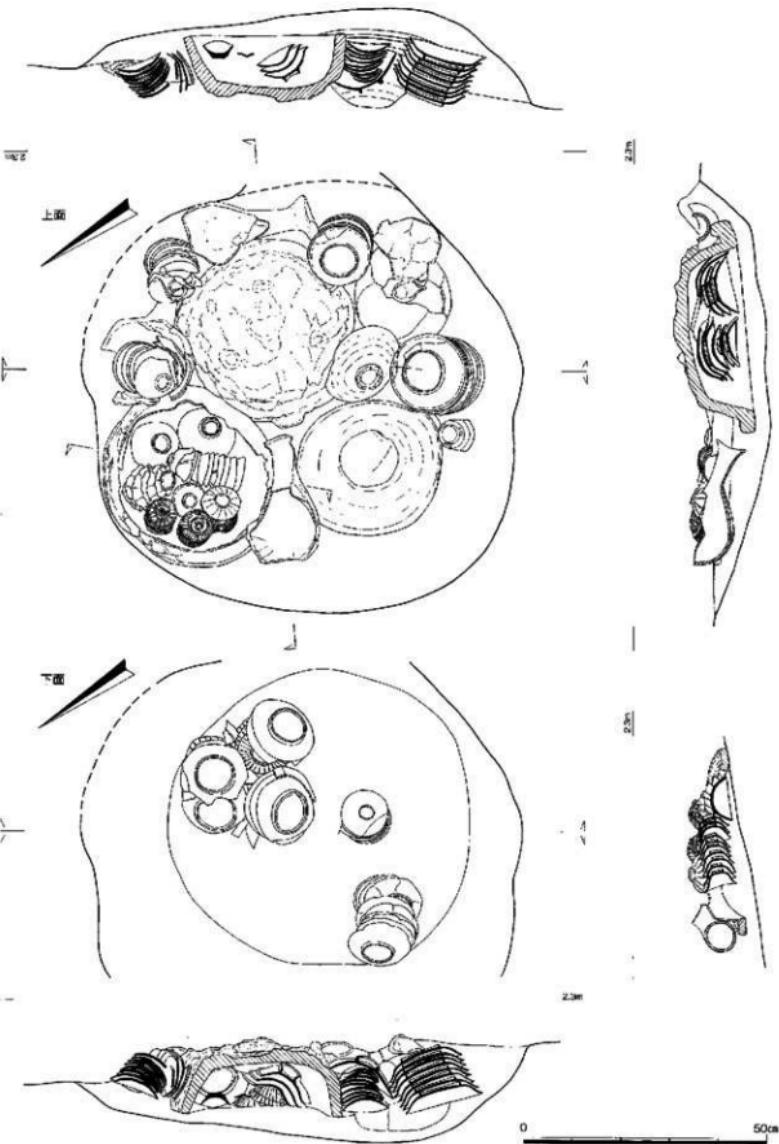
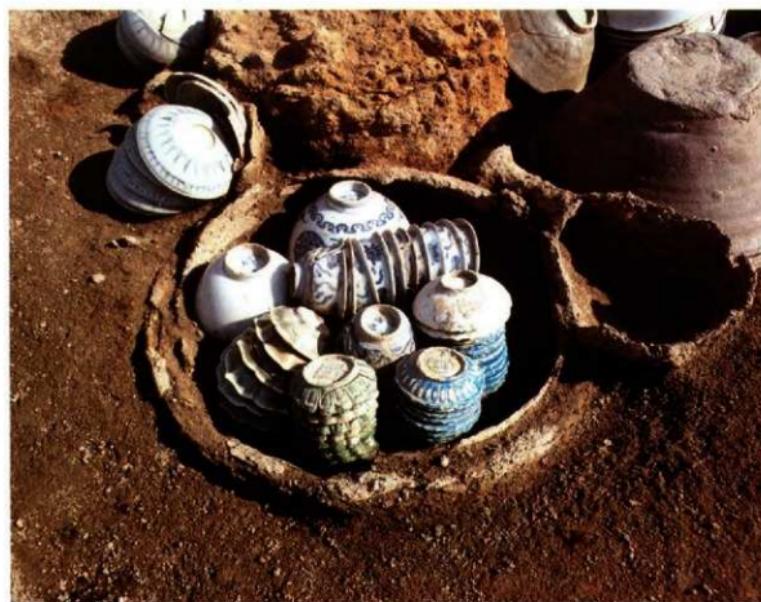


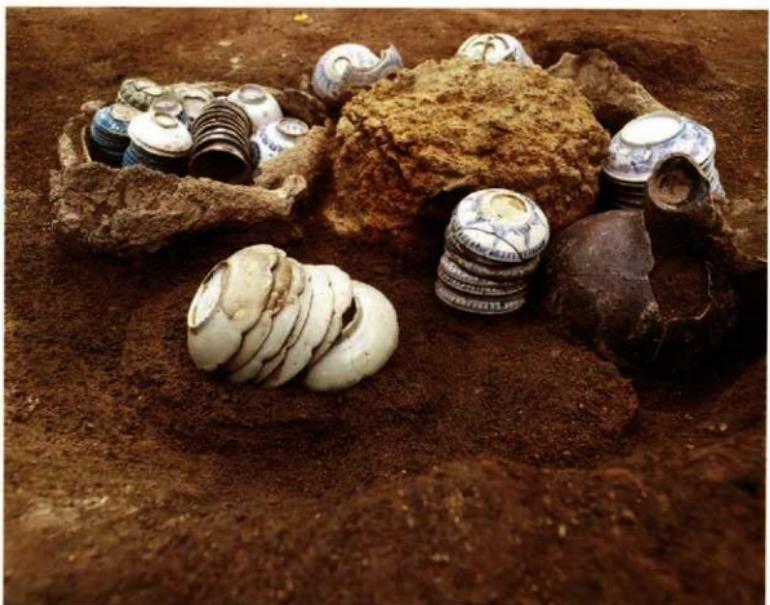
Fig.19 SK236実測図 (1/10)



Ph.29 SK236遺物出土状況1（東から）



Ph.30 SK236遺物出土状況2（北から）



Ph.31 S K236遺物出土状況3（南西から）



Ph.32 S K236遺物出土状況4（南西から）



Ph.33 SK 236遺物出土状況5（東から）



Ph.34 SK 236遺物出土状況6（北東から）



Ph.35 SK 236遺物出土状況7（南西から）



Ph.36 SK 236遺物出土状況8（西から）



Ph.37 SK 236遺物出土状況9（南西から）



Ph.38 SK 236遺物出土状況10（東から）

も内面見込みは花鳥文、外面に波濤文と芭蕉葉文を描く。

Q～Vは金属製品である。Qは錫製の鍋。口縁部は逆L字状に折れ曲がる。口径は35cm、器高は10cm程度に復元できる。RとTは錫製の徳利である。胴径15cm、器高25cm程度に復元できる。Sは器形不明の錫製品。Uは錫製ひさげ。南側に注口を向け、伏せて置かれている。Vは三足の鉄鍋。2つの横耳の把手がつく。口径約35cm、器高約15cmである。

W群は青磁輪花皿10点（143～152）。備前焼擂鉢の中に納められていた。6弁の輪花である。高台内の釉は透明で「裏白」である。景徳鎮窯系。

X・Y・Z群は鉄鍋の中に納められていた。他が同一種類を重ねているのに対し、青白磁菊皿、青磁菊皿、龍泉窯系青磁皿の3種類の皿を3つに分けて重ね、上に青花皿B1群を重ねている。

153～156は青白磁菊皿である。X群の下3枚とZ群の一一番下の一枚である。内外面にヘラ彫りで菊皿にしている。高台脇まで釉がかかり高台内は露胎。153には見込みに文字が書かれる。「五」か。

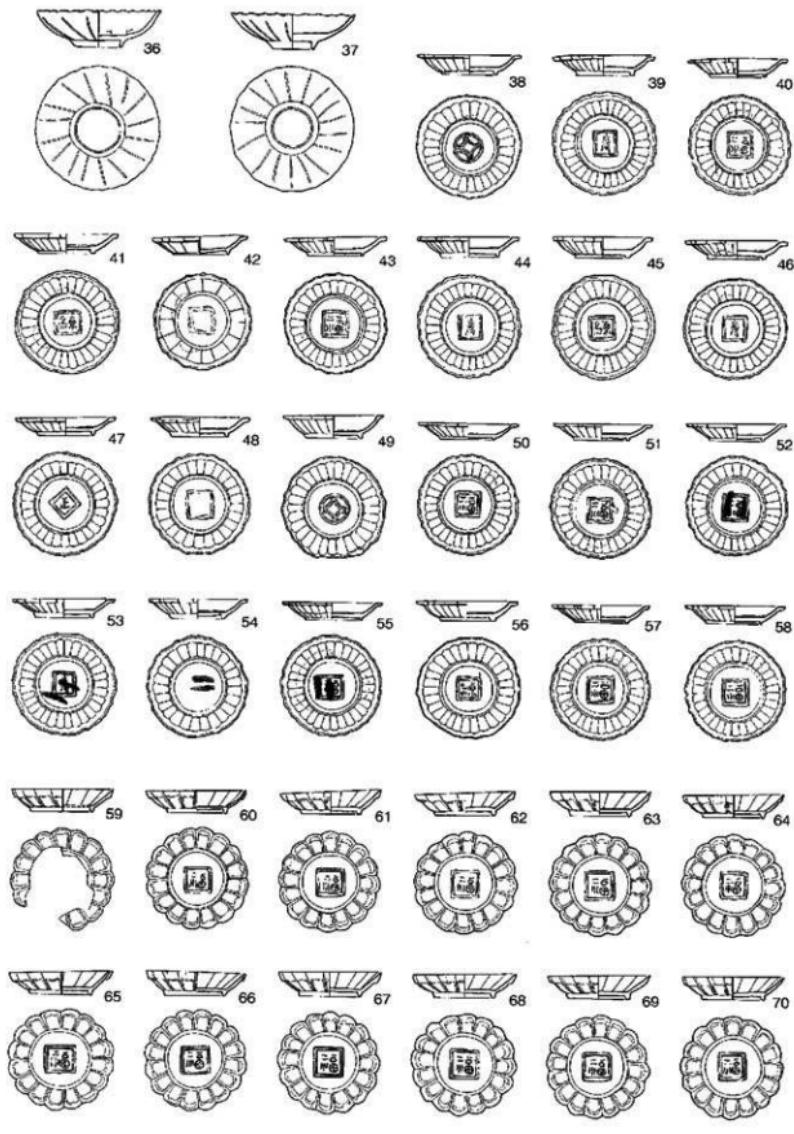
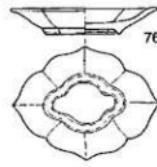
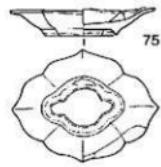
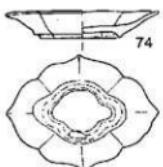
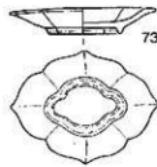
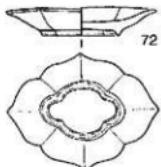
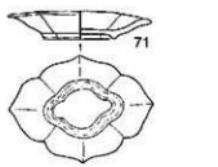


Fig.20 SK236出土遺物實測圖1 (1/3)



77  
晋大  
吉明



78  
晋大  
吉明



79  
晋大  
吉明



80  
晋大  
吉明



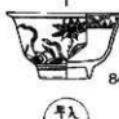
81  
晋大  
吉明



82  
晋大  
吉明



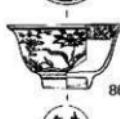
83  
晋大  
吉明



84  
晋大  
吉明



85  
晋大  
吉明



86  
晋大  
吉明



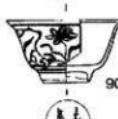
87  
晋大  
吉明



88  
晋大  
吉明



89  
晋大  
吉明



90  
晋大  
吉明

Fig.21 SK236出土遺物美術圖2 (1/3)

0 10cm

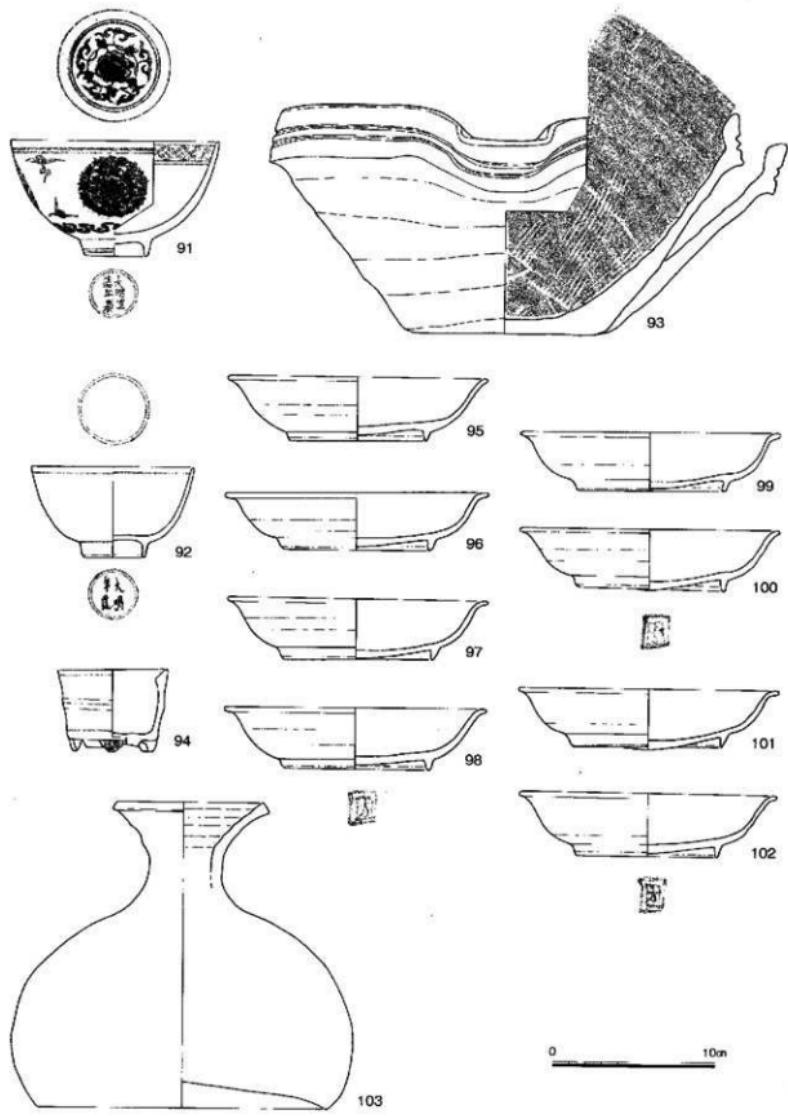


Fig.22 SK236出土遺物実測図3 (1/3)

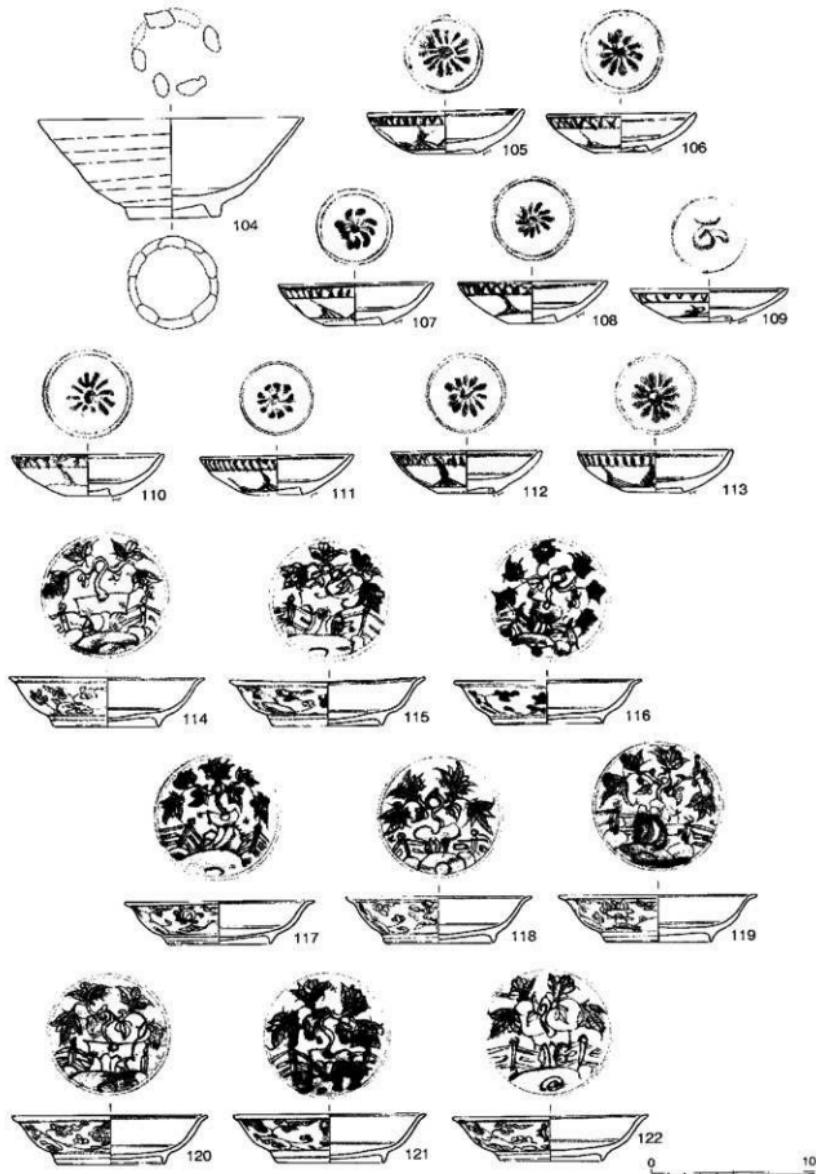


Fig.23 SK236出土遺物実測図4 (1/3)

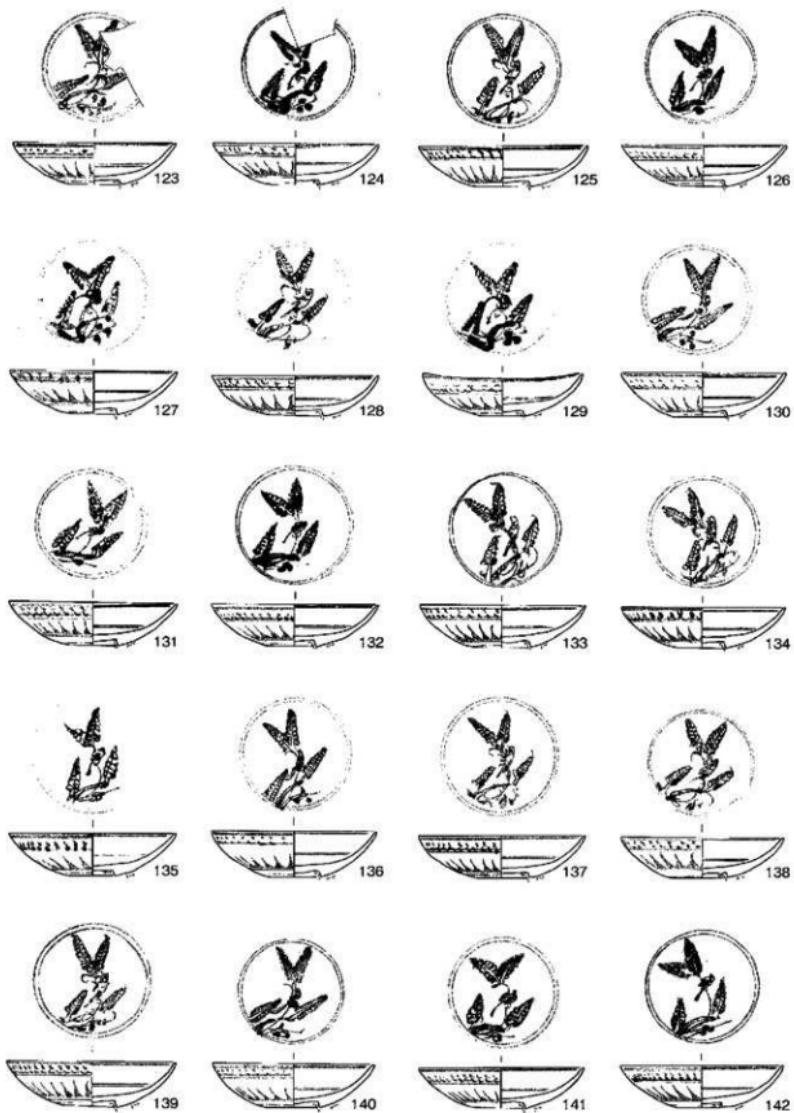


Fig.24 SK236出土遺物実測図5 (1/3)

0 10cm

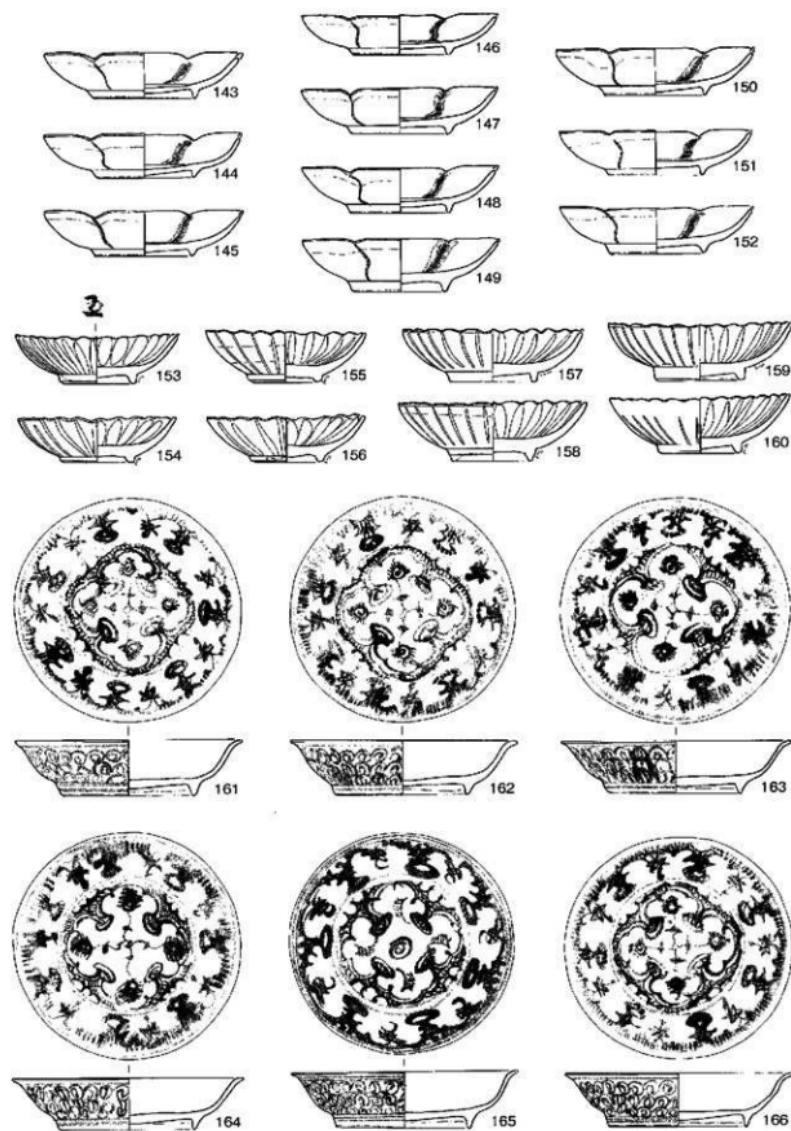


Fig.25 SK236出土遺物実測図6 (1/3)

0 10cm

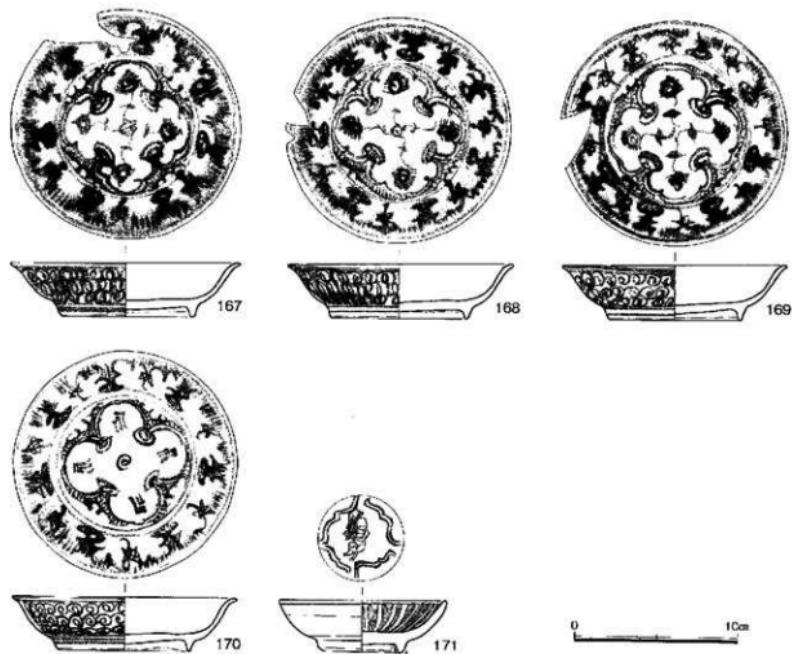


Fig.26 SK236出土遺物実測図7 (1/3)

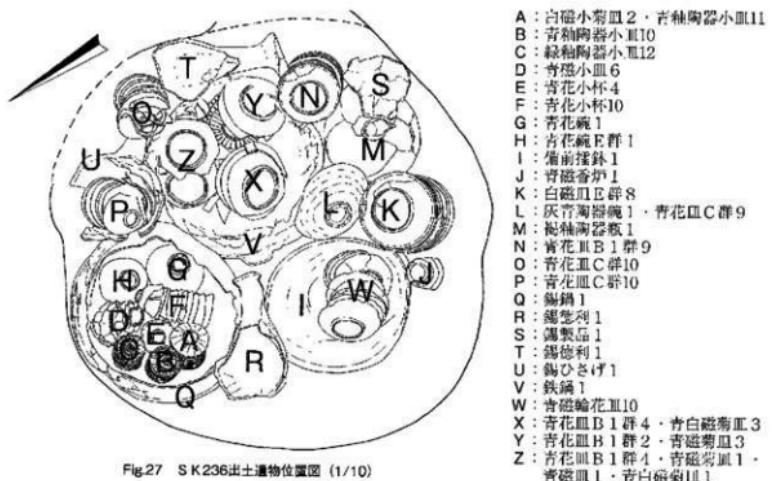


Fig.27 SK236出土遺物位置図 (1/10)



Ph.39 S K236出土遺物 1



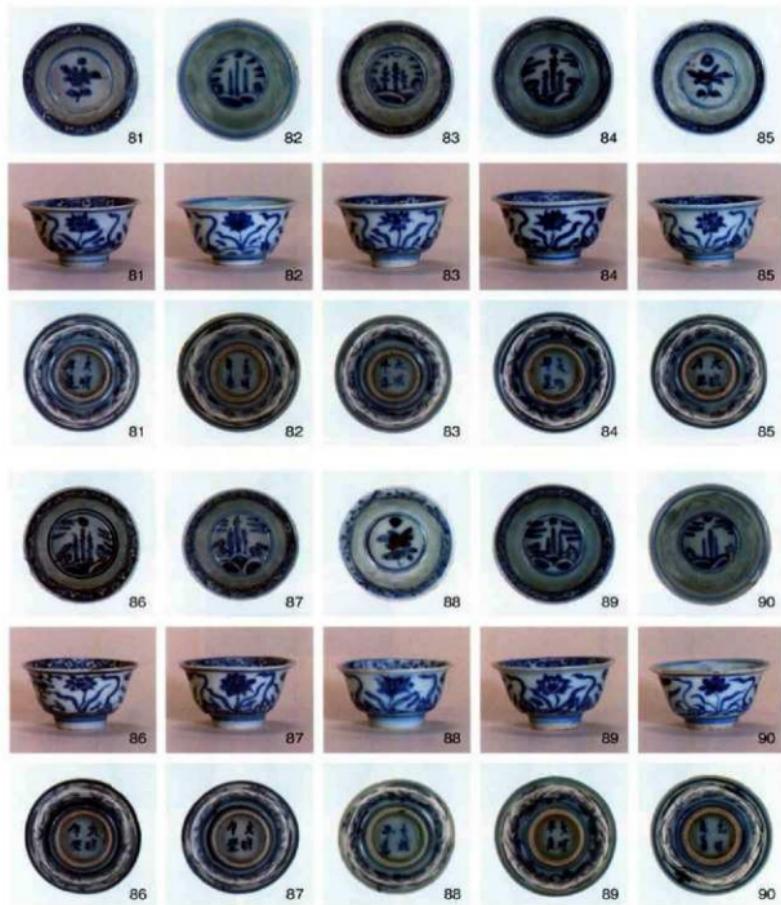
Ph.40 S K236出土遺物2 (約1/3)



Ph.41 SK236出土遺物3(約1/3)



Ph.42 S K236出土遺物4 (約1/3)



Ph.43 S K236出土遺物 5 (約1/3)



91



91



92



91



91



92



91



91



92



94



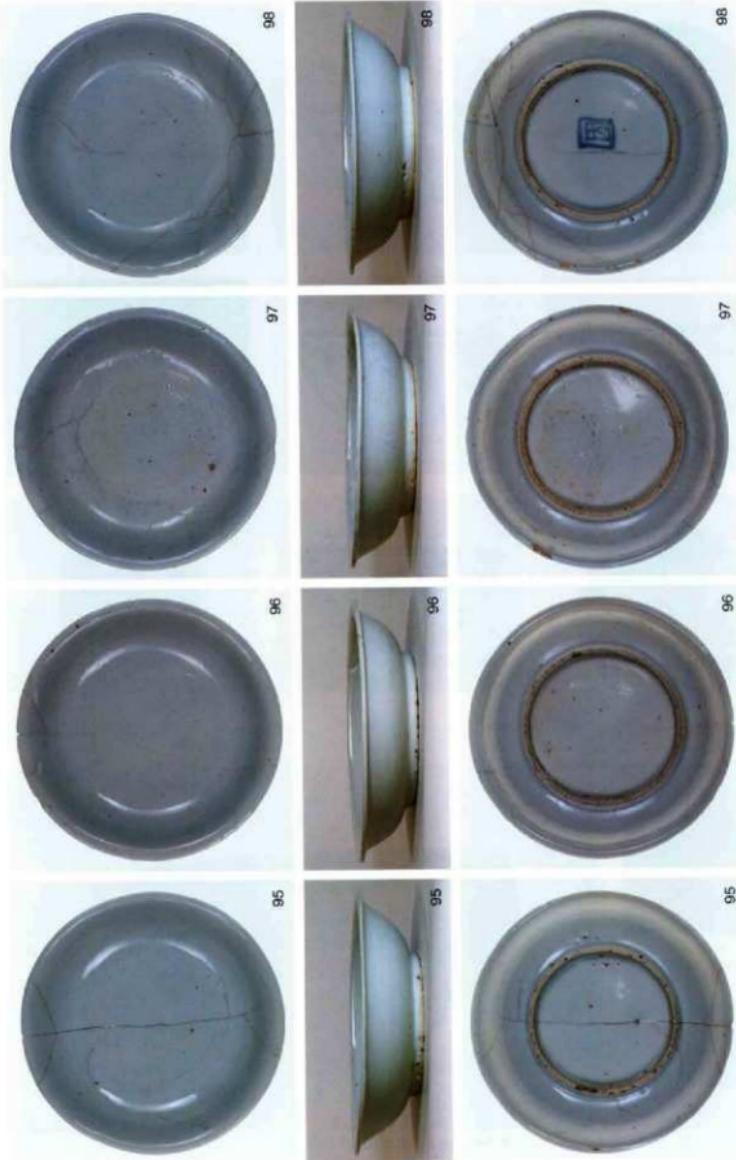
93

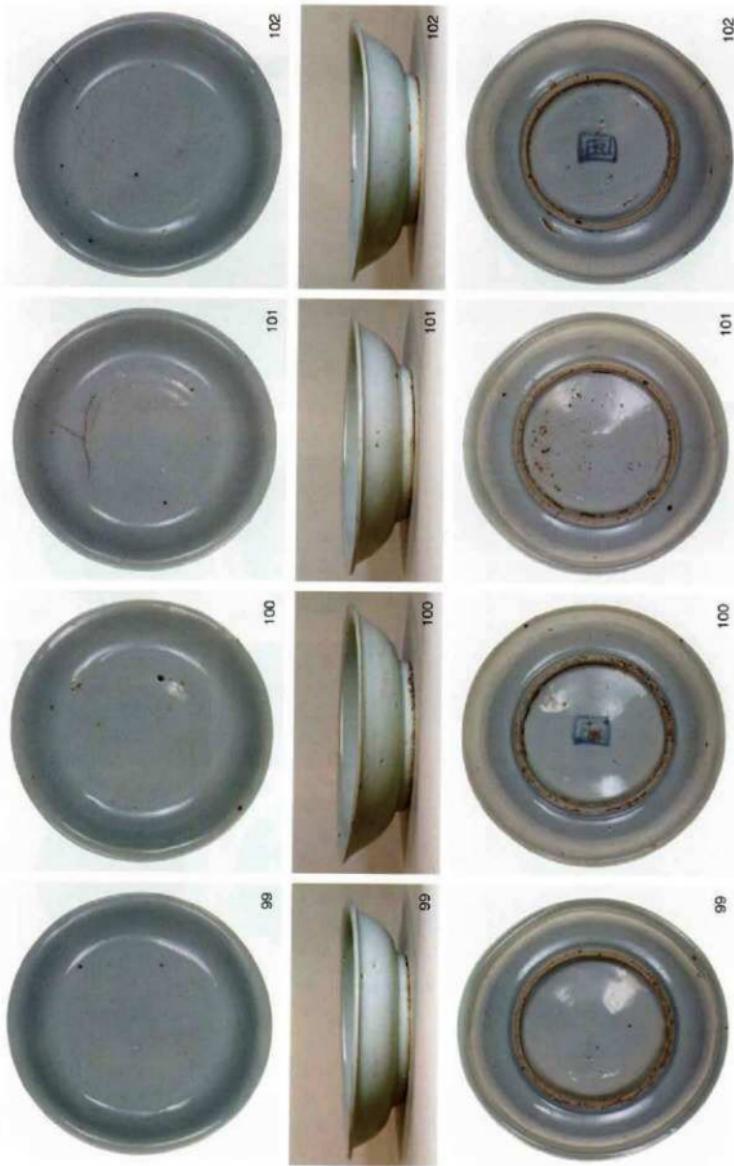
Ph.44 S K236出土遺物6 (約1/3)



94

Ph.45 SK236出土遺物7 (No1/3)







104



103



104



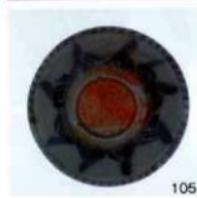
105



106



104



105



106

Ph.47 S K236出土遺物9 (約1/3)



Ph.48 S K236出土遺物10 (約1/3)

Ph.49 S K236出土遺物11 (61/3)

118



118

117



117

116



116

115



115

114



114

118



117



116

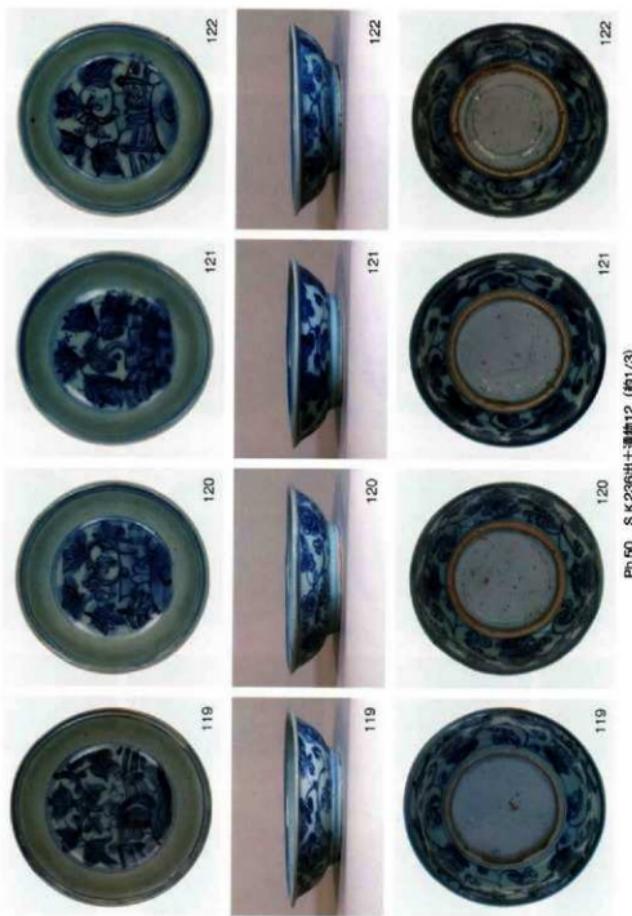


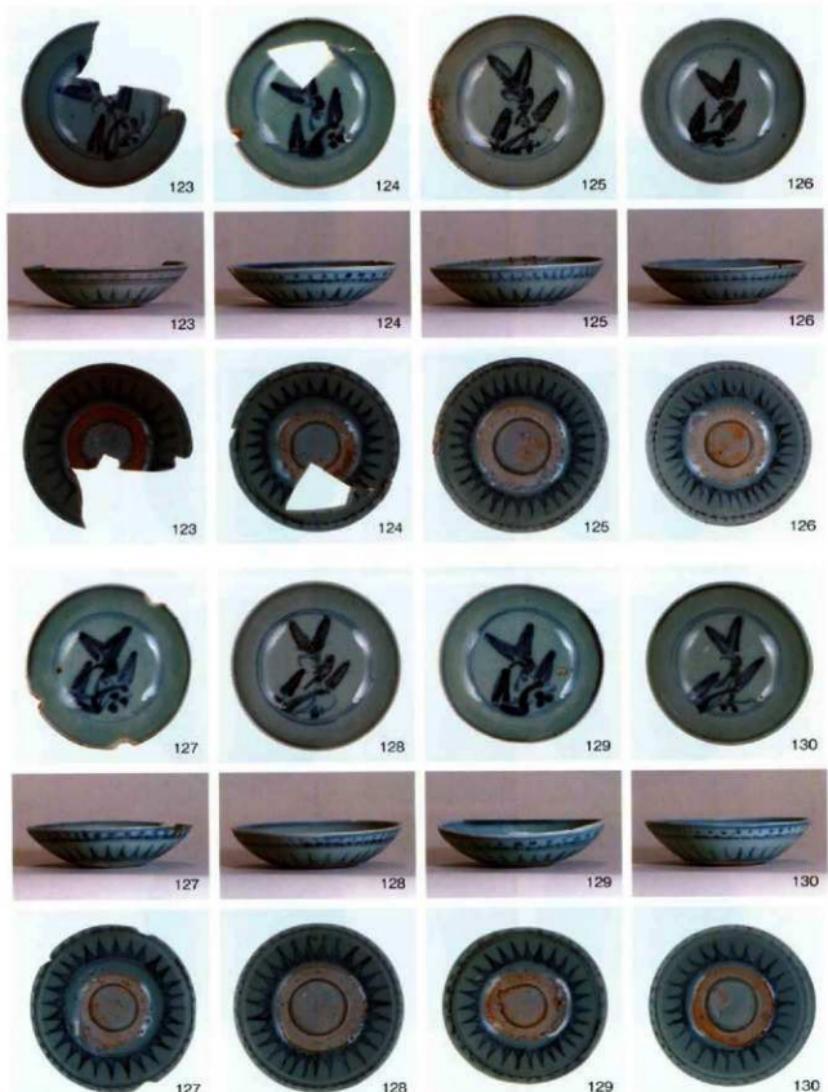
115



114







Ph.51 S K236出土遺物13 (約1/3)



Ph.52 S K 236出土遺物14 (約1/3)



139



140



143



144



139



140



143



144



139



140



143



144



141



142



145



146



141



142



145



146



141



142

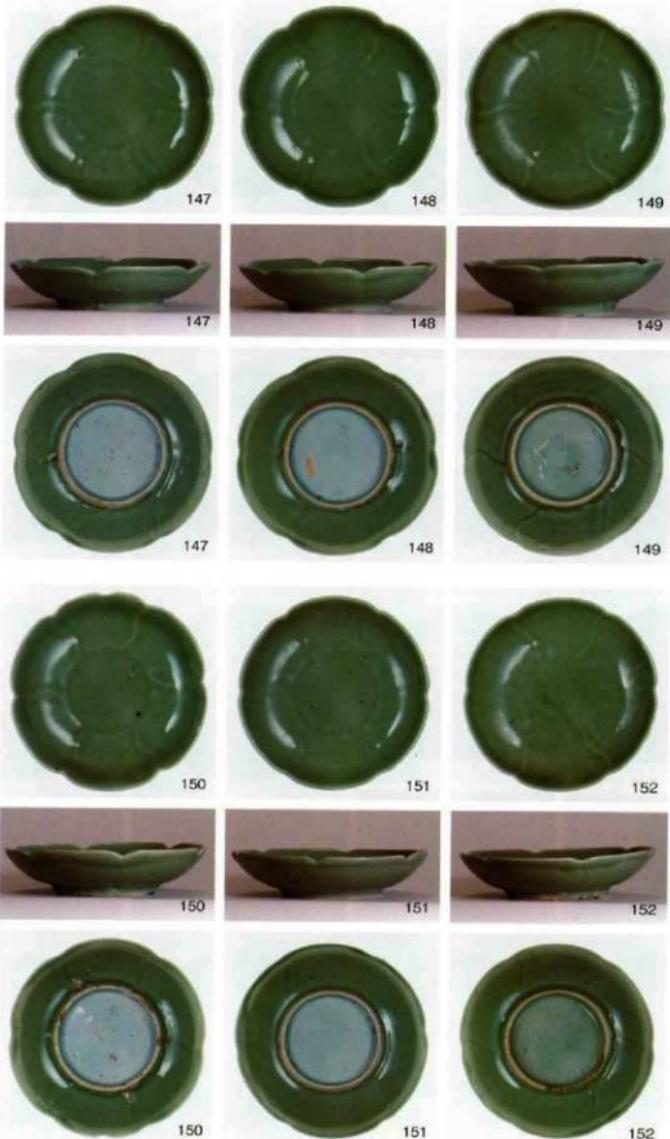


145

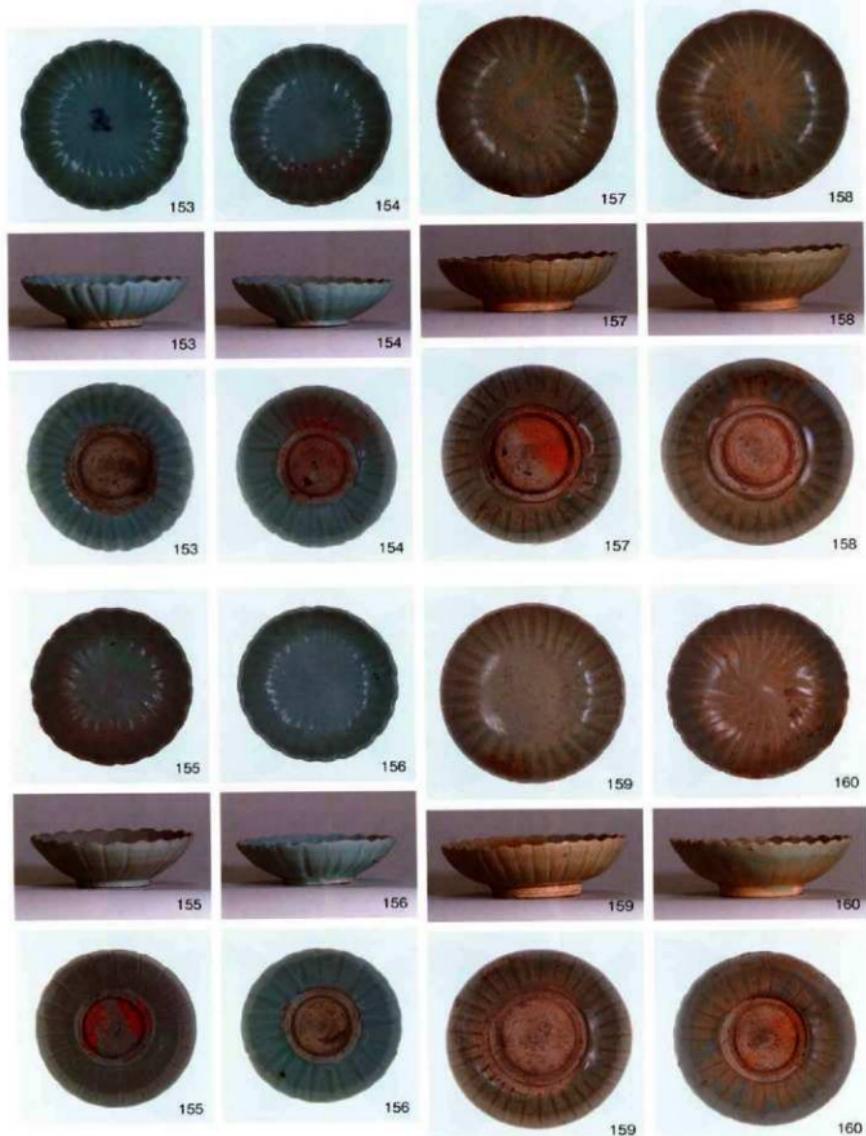


146

Ph.53 S K236出土遺物15 (約1/3)



Ph.54 S K236出土遺物16 (約1/3)



Ph.55 S K 236出土遺物17 (約1/3)



164



164



164



163



163



163



162



162



162



161



161



161

Ph.57 SK226出土遺物19 (#1/3)



167

165

165



167

166

165





155は他にくらべ、焼きが悪く、雑なつくりである。

157～160は青磁菊皿である。Y群の下3枚とZ群の下から3枚目に並べられていた。高台脇まで釉がかかり、高台内は露胎。内外面をヘラ彫りで菊瓣にする。

161～170は青花皿B 1群である。X群の上4枚、Y群の上2枚、Z群の上4枚に重ねられていた。X群の一一番上の161は鉄錫に付着しており、実測図、写真に示されていない。外面は渦巻文化した唐草文、内面はアラベスクを描く。内面に梵字を4つと中央に二重丸文を描くもの(165・170)と4つの草花文を中央でつなぐものの2種類ある。

171は龍泉窯系青磁の直口皿である。見込みは印花で稚児?を描き、周溝を片切彫りで囲む。体部内面は浅いヘラ彫りで菊花とする。

Z群の重なりから、青山磁菊皿→龍泉窯系青磁III→青磁菊皿→青花皿B 1群の順に並べられているようである。

出土遺物から16世紀の中頃の遺構と考えられる。

Tab.3 SK236出土陶器一覧

No.	仕様	器種	口径	底径	高さ	底盤有無	備考
38	A-1	白磁小鉢	7.6	2.5	2.9	—	
37	A-2	白磁小鉢	7.5	2.5	2.9	—	
39	A-3	白磁小鉢	6.4	1.5	2.5	(底盤)	20枚
20	A-4	白磁小鉢	6.4	1.2	3.5	8枚	32枚+44枚露胎
42	A-5	白磁小鉢	6.3	1.2	3.4	8枚	30枚+63枚露胎
41	A-6	白磁小鉢	6.3	1.2	3.5	8枚	30枚
42	A-7	白磁小鉢	6.0	1.1	3.4	8枚	30枚
43	A-8	白磁小鉢	6.0	1.1	3.1	8枚	30枚+42枚露胎
44	A-9	白磁小鉢	6.3	1.2	3.5	8枚	30枚+35枚露胎
45	A-10	白磁小鉢	6.2	1.2	3.4	8枚	30枚
46	A-11	白磁小鉢	6.4	1.2	3.5	8枚	32枚
47	A-12	白磁小鉢	6.3	1.2	3.5	8枚	29枚
48	A-13	白磁小鉢	6.3	1.2	3.5	8枚	30枚
49	B-1	青磁小鉢	6.4	1.4	3.5	8枚	30枚
50	B-2	青磁小鉢	6.2	1.0	2.4	8枚	30枚
51	B-3	青磁小鉢	6.2	1.1	3.4	8枚	30枚
52	B-4	青磁小鉢	6.2	1.1	3.4	8枚	30枚
53	B-5	青磁小鉢	6.3	1.2	3.5	8枚	30枚
54	B-6	青磁小鉢	6.2	1.1	3.4	8枚	30枚
55	B-7	青磁小鉢	6.2	1.2	3.5	8枚	30枚
56	B-8	青磁小鉢	6.3	1.3	3.4	8枚	30枚
57	B-9	青磁小鉢	6.1	1.1	3.4	8枚	30枚
58	B-10	青磁小鉢	6.2	1.1	3.4	8枚	30枚
59	C-0	青磁小鉢	6.2	1.4	3.8	8枚	30枚(露胎なし)
60	C-1	青磁小鉢	6.2	1.4	3.8	8枚	30枚
61	C-2	青磁小鉢	6.2	1.4	3.8	8枚	30枚
62	C-3	青磁小鉢	6.1	1.4	3.8	8枚	30枚
63	C-4	青磁小鉢	6.1	1.4	3.8	8枚	30枚
64	C-5	青磁小鉢	6.3	1.4	3.8	8枚	30枚
65	C-6	青磁小鉢	6.1	1.4	3.8	8枚	30枚
66	C-7	青磁小鉢	6.3	1.4	3.8	8枚	30枚
67	C-8	青磁小鉢	6.5	1.5	3.8	8枚	30枚
68	C-9	青磁小鉢	6.4	1.5	3.8	8枚	30枚
69	C-10	青磁小鉢	6.4	1.5	3.8	8枚	30枚
70	C-11	青磁小鉢	6.5	1.5	3.8	8枚	30枚
71	D-1	青磁小鉢	6.9	1.5	4.5	8枚	30枚
72	D-2	青磁小鉢	7.2	1.5	4.7	3/2	
73	D-3	青磁小鉢	7.0	1.5	4.8	3/2	
74	D-4	青磁小鉢	7.4	1.7	5.0	3/2	
75	D-5	青磁小鉢	7.0	1.5	4.3	3/2	
76	D-6	青磁小鉢	7.0	1.5	4.5	3/2	
77	E-1	青磁小鉢	7.1	1.5	4.5	3/2	
78	E-2	青磁小鉢	7.1	1.5	4.5	3/2	
79	F-3	青磁小鉢	7.1	3.9	2.8	大鉢形	
80	G-4	青磁小鉢	7.1	3.7	3.1	宣德年造	
81	H-1	青磁小鉢	7.2	3.9	2.8	大鉢形	
82	H-2	青磁小鉢	7.2	3.9	2.8	大鉢形	
83	F-5	青磁小鉢	7.1	4.0	2.8	大鉢形	
84	F-6	青磁小鉢	7.2	4.1	3.1	大鉢形	
85	G-3	青磁小鉢	7.1	3.9	2.8	大鉢形	
86	I-6	青磁小鉢	7.1	3.9	2.8	大鉢形	
87	J-7	青磁小鉢	7.0	3.9	3.0	大鉢形	
88	K-8	青磁小鉢	7.2	3.9	2.8	大鉢形	
89	L-9	青磁小鉢	7.3	4.0	2.8	大鉢形	
90	M-10	青磁小鉢	7.3	4.0	2.8	大鉢形	
91	G-1	青磁小鉢	12.9	7.1	3.9	人形模造手足	
92	H-1	青磁小鉢	10.1	5.4	3.8	大鉢形	
93	I-1	青磁小鉢	20.8	13.1	3.8	人形模造手足	
94	J-1	青磁小鉢	6.7	5.0	2.9	—	
95	K-1	青磁小鉢	16.0	3.9	3.4	—	
96	K-2	青磁小鉢	16.1	3.5	3.0	—	
97	K-3	青磁小鉢	16.0	3.6	9.1	—	
98	K-4	青磁小鉢	16.0	3.5	6.0	60枚	
99	K-5	青磁小鉢	16.0	3.5	6.0	60枚	
100	K-6	青磁小鉢	16.0	3.6	8.7	方	
101	K-7	青磁小鉢	16.0	3.8	9.0	—	
102	K-8	青磁小鉢	16.0	3.5	8.7	方	
103	L-1	青磁小鉢	16.3	6.2	5.5	—	
104	-2	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
105	-3	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
106	-4	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
107	-5	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
108	-6	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
109	-7	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
110	-8	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
111	-9	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
112	-10	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
113	-11	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
114	-12	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
115	-13	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
116	-14	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
117	-15	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
118	-16	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
119	-17	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
120	-18	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
121	-19	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
122	-20	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
123	-21	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
124	-22	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
125	-23	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
126	-24	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
127	-25	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
128	-26	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
129	-27	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
130	-28	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
131	-29	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
132	-30	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
133	-31	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
134	-32	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
135	-33	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
136	-34	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
137	-35	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
138	-36	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
139	-37	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
140	-38	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
141	-39	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
142	-40	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
143	-41	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
144	-42	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
145	-43	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
146	-44	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
147	-45	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
148	-46	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
149	-47	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
150	-48	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
151	-49	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
152	-50	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
153	-51	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
154	-52	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
155	-53	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
156	-54	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
157	-55	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
158	-56	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
159	-57	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
160	-58	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
161	-59	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
162	-60	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
163	-61	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
164	-62	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
165	-63	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
166	-64	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
167	-65	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
168	-66	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
169	-67	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
170	-68	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	
171	-69	青磁小鉢(高台形)	—	—	—	—	

**S K 281 (Fig28・29, Ph.59・60)**

K-11・12, L-12で確認された椭円形の土坑。長軸2.0m、短軸1.4m、確認面から底までの深さは70cmである。

土師器の壺・皿、白磁皿、青磁、青花、朝鮮王朝の白磁碗・綠褐釉陶器瓶、瓦質土器の火鉢・擂鉢、備前焼擂鉢、瀬戸・美濃窑の天目碗、肥前の染付などが出土している。172～174は土師器の小皿である。173には油煙が付着する。175は土師器の壺である。176は朝鮮王朝の白磁碗。口縁はやや外反する。内面に砂目が6ヶ所付く。わずかに水色がかった乳白色半透明釉が高台脚までかかる。

出土遺物から17世紀前半の造構と考えられる。

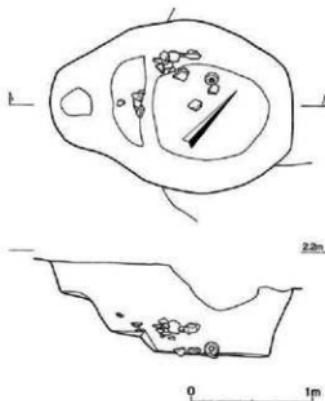


Fig.28 SK281実測図 (1/40)



Ph.59 SK281遺物出土状況 (南東から)



Ph.60 SK281出土遺物 (約1/3)

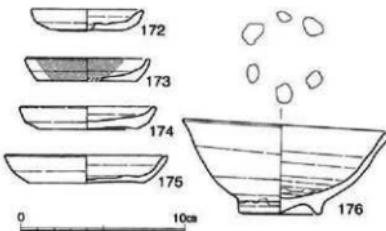


Fig.29 SK281出土遺物実測図 (1/3)

**S E 482** (Fig.30・31, Ph.61~63)

K-20、L・M-19~21で検出した石組井戸である。井側に木桶を3段据える。桶は下1段が高く、上2段は低い。堀方は径4.5mの略円形である。

Fig.31に出土遺物を示す。177は土師器小皿、178・179は土師器の壊である。180は龍泉窯系青磁碗B群。181は青磁の三足香炉である。182は漳州窯系青花碗か。釉は高台脇までかかり、高台内は露胎。見込みの釉は輪状に搔き取る。183・184は青花皿C群である。鉄分の多い土で魚の形を貼り付け、周間に水草を描く。魚文は施釉後貼付されている。外面は無文。185は青花皿B2群。見込みには鳳凰を描く。体部外面には波濤文が線刻される。高台内には「宣德年造」の銘がある。186は青花皿B群である。見込みには花文、外面には唐草文を描く。187は青花皿。188~190は肥前の染付碗。191は肥前の染付皿。192は緑褐釉がかかる陶器の瓶である。193・194は管状土錐である。195は軒丸瓦。黒田家の家紋である橋の瓦当である。この他白磁D群・E群の皿・小杯・壺、天目碗、備前焼擂鉢・壺などが出土している。

出土遺物から18世紀に廃絶された井戸と考えられる。

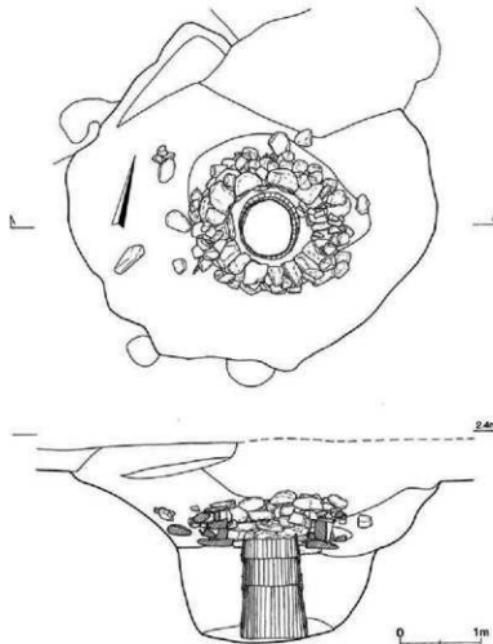


Fig.30 S E 482実測図 (1/60)



Ph.61 S E 482 (南西から)



Ph.62 S E 482井筒 (北西から)

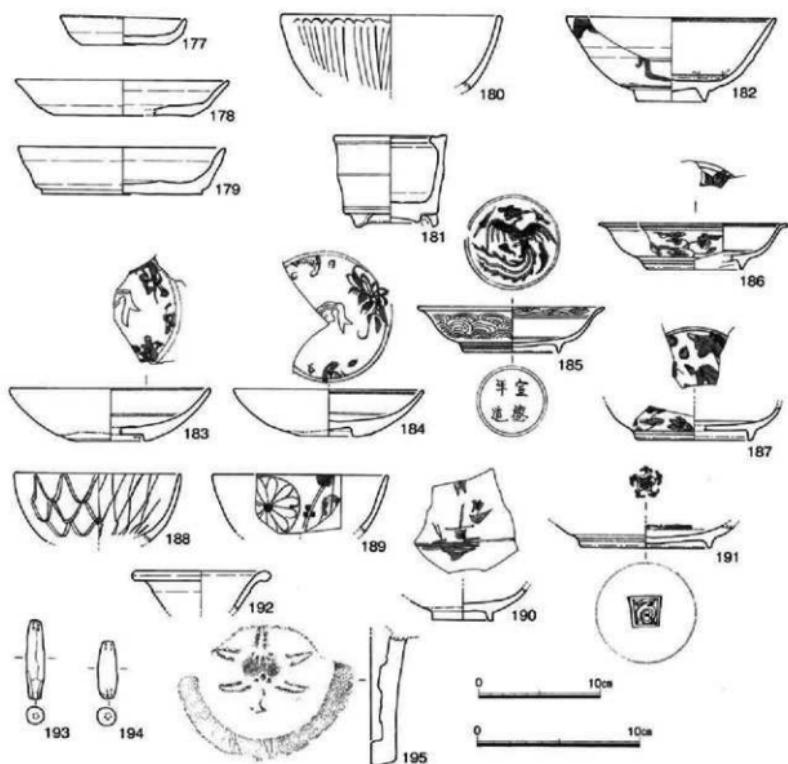


Fig.31 S E 482出土遺物実測図 (195:1/4, 他:1/3)



Ph.63 S E 482出土遺物 (約1/3)

#### SD488・SF489・SD545 (Fig.32~37, Ph.64~72)

C区の遺構面への掘り下げを遺構面を探りながら南西側から始めていると、非常にかたい整地面が見つかった。この面を第2面として掘り広げるとグリッドの22列付近から北東側は整地面が途切れていた。この途切れた境から溝SD488が検出され、整地された部分が道路、溝が道路側溝と考えられた。SD485・486・537・538なども道路側溝の可能性がある。道路幅は4~5m、方向はSD488を基準にするとN-52°Wである。道路SF489に直交にトレンチを入れた断面図がFig.33である。厚さ80cmにわたり非常に細かい整地がみられ、かたくしまっている。また、側溝とみられる溝の断面もいくつもみられる。その一つがSD545である。SD488とは平行していない。

SD488は道路側溝と考えられる。溝の両端とも調査区外にのびる。幅50~60cm、深さ40cm。断面は開いたU字形であるが、土層をみると、機能時はコの字であったと考えられる。壁の一部に木の痕跡が認められ、板で土留めをしていたことがわかる。覆土には疊を多数含んでいた。

SD488の出土遺物をFig.34に示す。196~203は土師器の小皿、204~206は土師器の壺である。207は土師器の小壺。大内系か。208も土師器の小壺か。内外に指頭痕が認められる。京都系か。209は青磁の菊皿。高台内の釉は透明釉で「裏白」になる。景德鎮窯系。210は白磁の小杯。高台内に「大明年造」とみられる銘がある。211・212は朝鮮王朝産白磁の碗。211には見込みに4ヶ所の砂目があり、212には4ヶ所の胎土目がある。213・214は白磁皿E-2。215は青花碗D群。216は漳州窯系青花碗。217は青花碗C群。見込みに法螺貝を描く。218は見込みが凹むが、高台内に「長命富貴」の銘があり、文様の特徴から青花碗E群にあたると思われる。219は青花碗E群。高台内に「萬福攸同」の銘。220は青花皿C群。漳州窯系。221は緑釉陶器の型打ち小皿である。高台内に「福」が陽刻される。222は青釉の皿。高台内は透明釉で「裏白」である。疊付の釉を掻き取る。景德鎮窯系。223は黒釉の小壺である。内面と底部露胎。224は土鍾状の土製品。このほかタイ産の陶器甕、備前焼甕・擂鉢、瓦などが出土している。

出土遺物より16世紀代後半の遺構と考えられる。

Fig.35~37にはSF489の出土遺物を示す。断面観察でみられた溝の遺物も含んでいる。225~265は土師器の小皿、240・256・257・261・264には油煙が付着する。227は大内系の土師器。266~283は土師器の壺である。268は在地のものと思われるが大内系のつくりである。272はきわめてつくりがよく大内系の土師器の胎土と似ている。283の外面はヘラ状工具で削られ、2ヶ所に穿孔されている。大内系の土師器である。284と285は土師器の小壺である。大内系か。286~288は大内系の土師器壺である。289は土師器の高台付の鉢である。290~294は龍泉窯系青磁碗である。290は



Ph.64 SD488 (北西から)



Ph.65 SD488・SF489（北西から）



Ph.66 SF489土層1（北から）

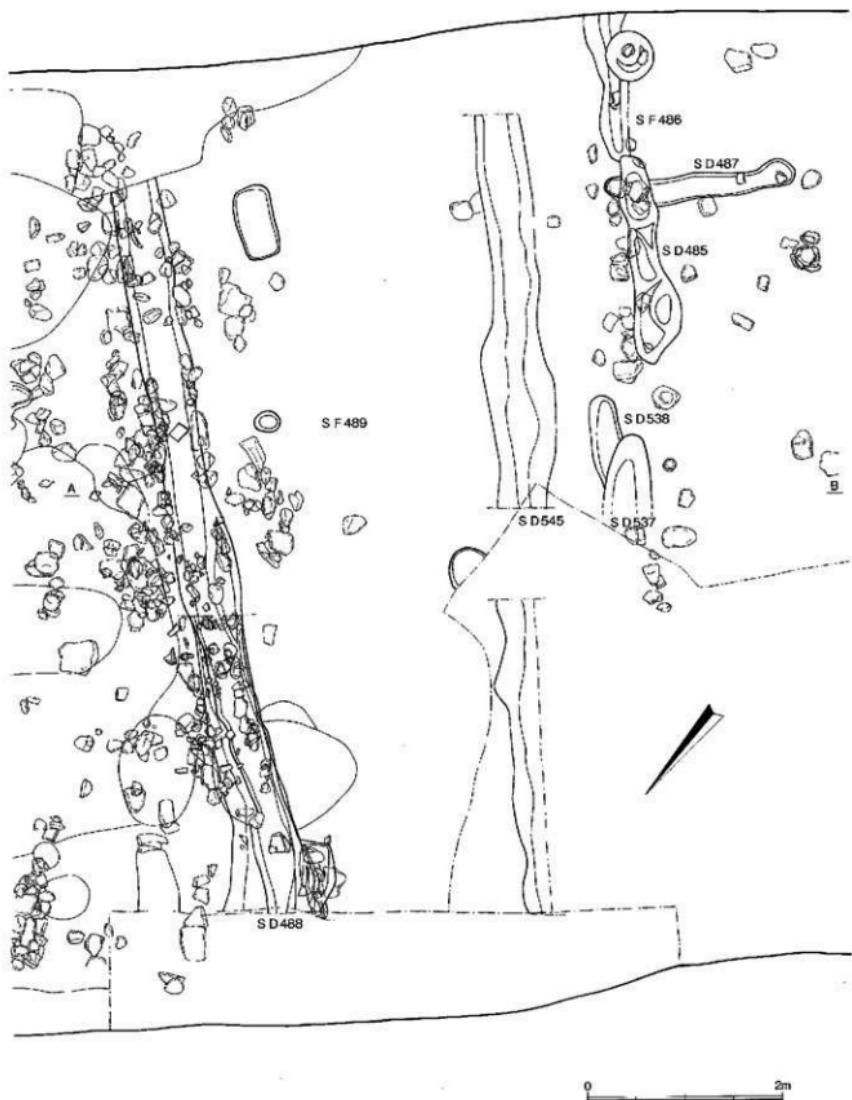
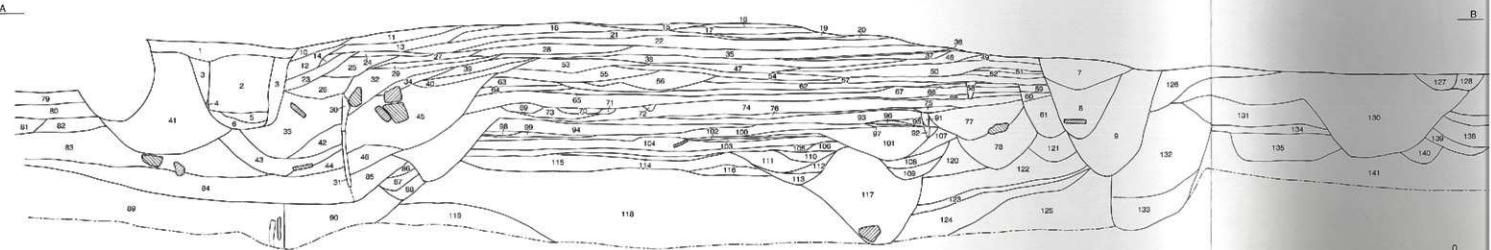


Fig.32 S D488・S F489・S D545実測区 (1/50)



1. 実色地質	25. 黄褐色地質
2. 実色地序	26. 黄色地序
3. 実色序	27. 黄褐色地序
4. 実化物	28. 黄色地序
5. 黄褐色地相	29. 黄色地序
6. 実色地相	30. 実化物
7. 硫化物地質 実色地上ノロク。他社、硫化物、鉛鉱含む。	31. 実化物 減化物含む。
8. 実硫化物 地相合意	32. 実化物
9. 実鉛鉱地質	33. 黄褐色地質
10. 実鉛鉱地序	34. 黄褐色地
11. 実水鉻地色	35. 黄褐色地質 減化物含む。
12. 実水鉻地質 実色地上心合。	36. 実化物 減化物含む。
13. 黄白色地	37. 実化物
14. 黄白色地	38. 実化物
15. 黄褐色地相	39. 実化物
16. 硫化物地序	40. 黄褐色地
17. 実硫化物	41. 実化物地質
18. 実水鉻地序	42. 実化物
19. 実白鐵地	43. 実化物
20. 実硫化物 地土帶	44. 黄褐色地
21. 硫化物地序	45. 実化物 減化物含む。
22. 実水鉻地序	46. 実化物 減化物含む。
23. 実化物地	47. 黄褐色地質 (約10mm)
24. 黄白色地相	48. 実化物

- 72: 黄褐色
- 74: 黄褐色 腐化物含。
- 75: 白黄色
- 76: 白黄色 黄褐色土色为栗色。
- 77: 黄褐色土色。炭化物含。
- 78: 黄褐色土色。黄褐色粘土质土块。炭化物含。
- 79: 黄褐色土
- 80: 黄褐色 土化物含。
- 82: 青褐色土
- 83: 青褐色土
- 84: 黄褐色 土化物含。
- 85: 黄褐色 土化物含。
- 86: 黄色土
- 87: 黄褐色土质。炭化物含。
- 88: 黄褐色 土化物含。
- 89: 黄褐色。炭化物。淤积含。
- 90: 黄褐色。烟灰色。淤积含土质。
- 92: 灰土
- 93: 灰土
- 94: 灰土色
- 95: 灰土色
- 96: 灰土质

和	121: 花斑色
赤	122: 红色体
黄	123: 黄色体
绿	124: 绿色体
紫	125: 紫色体
白	126: 白色体
黑	127: 黑色体
茶	128: 茶色体
褐色	129: 褐色体
灰色	130: 灰色体
米色	131: 雪灰色
淡黄色	132: 淡黄色
浅黄色	133: 浅黄色
深黄色	134: 深黄色
黄色	135: 黄色
白色	136: 明黄色
黑色	137: 黑暗色
深黑色	138: 暗黑色
暗黑色	139: 暗深色
暗褐色	140: 暗褐色
暗米色	141: 暗米色
（注）2組目。	
和	142: 和色
赤	143: 赤色
黄	144: 黄色
绿	145: 绿色
紫	146: 紫色
白	147: 白色
黑	148: 黑色
茶	149: 茶色
褐色	150: 褐色
灰色	151: 灰色
米色	152: 米色
淡黄色	153: 淡黄色
浅黄色	154: 浅黄色
深黄色	155: 深黄色
黄色	156: 黄色
白色	157: 明黄色
黑色	158: 暗黑色
深黑色	159: 暗深色
暗黑色	160: 暗褐色
暗褐色	161: 暗米色
暗米色	162: 暗米色
暗褐色	163: 暗褐色
暗米色	164: 暗米色
暗褐色	165: 暗褐色
暗米色	166: 暗米色
暗褐色	167: 暗褐色
暗米色	168: 暗米色
暗褐色	169: 暗褐色
暗米色	170: 暗米色
暗褐色	171: 暗褐色
暗米色	172: 暗米色
暗褐色	173: 暗褐色
暗米色	174: 暗米色
暗褐色	175: 暗褐色
暗米色	176: 暗米色
暗褐色	177: 暗褐色
暗米色	178: 暗米色
暗褐色	179: 暗褐色
暗米色	180: 暗米色
暗褐色	181: 暗褐色
暗米色	182: 暗米色
暗褐色	183: 暗褐色
暗米色	184: 暗米色
暗褐色	185: 暗褐色
暗米色	186: 暗米色
暗褐色	187: 暗褐色
暗米色	188: 暗米色
暗褐色	189: 暗褐色
暗米色	190: 暗米色
暗褐色	191: 暗褐色
暗米色	192: 暗米色
暗褐色	193: 暗褐色
暗米色	194: 暗米色
暗褐色	195: 暗褐色
暗米色	196: 暗米色
暗褐色	197: 暗褐色
暗米色	198: 暗米色
暗褐色	199: 暗褐色
暗米色	200: 暗米色

Fig.33 SD488・SF489・SD545土層図 (1/20)



Ph.67 S F489土層2（北西から）



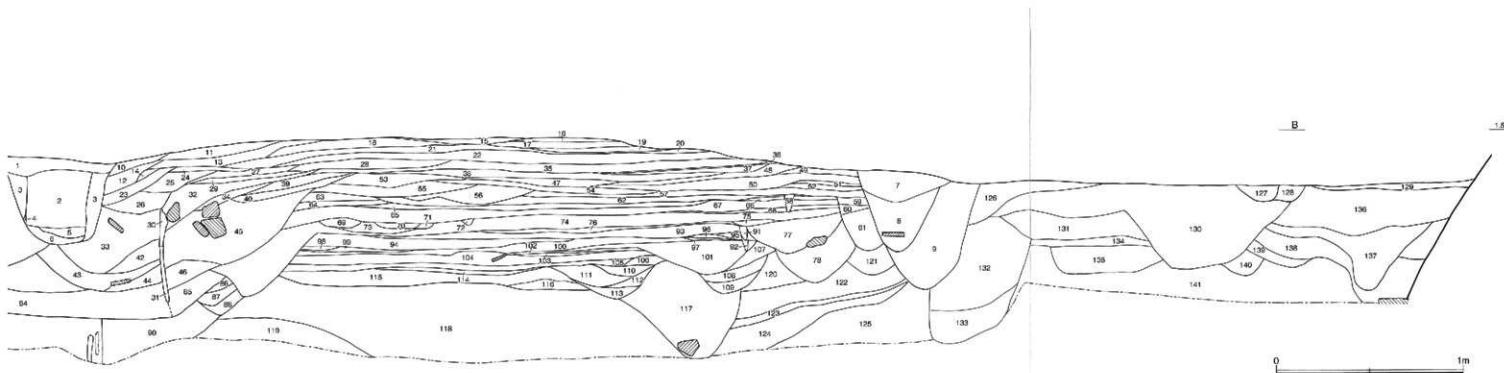
Ph.68 SF 489 土層3 (北西から)



Ph.69 S F 489 土層 4 (北西から)



h.70 SF 48



- 25: 黄色毛脚蝶
- 26: 黄色毛蝶
- 27: 黄色毛蝶
- 28: 黄色毛蝶
- 29: 黄色毛蝶
- 30: 黄色毛蝶
- 31: 黄色毛蝶 次生物荷合。
- 32: 黄色毛蝶
- 33: 黄色毛蝶
- 34: 黄色毛蝶
- 35: 黄色毛蝶 次化合物合。
- 36: 黄色毛蝶 姜黄素
- 37: 黄色毛蝶
- 38: 黄色毛蝶
- 39: 黄色毛蝶
- 40: 黄色毛蝶
- 41: 黄色毛蝶 土生真菌
- 42: 黄色毛蝶
- 43: 黄色毛蝶
- 44: 黄色毛蝶
- 45: 黄色毛蝶 次化物合。
- 46: 黄色毛蝶 次化合物合。
- 47: 黄色毛蝶 *Quercus*のDNA合。
- 48: 黄色毛蝶

19: 実色  
 20: 実白身  
 21: 実灰色  
 22: 白角身  
 33: 黄白身 部分で茶色い変色。  
 34: 砂白身  
 35: 灰色身  
 36: 前部白身 マンガで面部特に変色。  
 37: 白斑身  
 38: 茶斑身 飴子  
 39: 砂白身 流し、黒化物、砂合む。  
 40: 黄白斑身  
 51: 砂白斑身 銀化部分少含む。

73: 灰色毛  
74: 灰斑毛 菊物毛  
75: 灰斑毛  
76: 白斑毛 雪点で灰色も裏毛  
77: 从斑毛 灰色毛  
78: 带斑毛 黄褐色毛生地ナットワックと白毛毛合  
79: 青毛毛  
80: 灰斑毛 棕毛毛合  
81: 灰斑毛  
82: 黄斑毛  
83: 灰斑毛  
84: 灰斑毛 純毛より明るい  
85: 灰斑毛 棕毛毛合  
86: 青毛毛  
87: 灰斑灰土 棕毛毛合  
88: 青毛毛  
89: 灰斑灰土 灰色毛-棕毛毛合  
90: 灰斑灰土 灰色毛-棕毛毛合  
91: 灰斑毛  
92: 灰斑毛  
93: 灰斑毛  
94: 灰斑毛  
95: 灰斑毛  
96: 灰斑毛-灰土

- 97: 白色艸
- 98: 紫灰色彩
- 99: 灰色彩 斑纹
- 100: 灰色彩 彩斑
- 101: 暗褐色 灰斑
- 102: 绿褐色 色斑
- 103: 白色艸
- 104: 灰白色艸
- 105: 灰白色艸
- 106: 灰白色艸
- 107: 灰褐色 色斑
- 108: 灰褐色 灰斑
- 109: 灰色彩
- 110: 暗黑色艸
- 111: 灰色彩
- 112: 白色艸
- 113: 黄褐色 混生
- 114: 暗褐色 艸
- 115: 灰暗色艸
- 116: 灰色彩 下垂
- 117: 灰色彩 斑土
- 118: 灰色彩 黄褐
- 119: 灰白色艸
- 120: 黄暗褐色

Fig.33 SD488・SF489・SD545土属図 (1/20)



A photograph of a geological outcrop showing dark, horizontal sedimentary layers. A red and white scale bar is positioned horizontally across the top of the image.



Ph.69 S.F.489土層4(北西から)



Ph.70 SF489土層5(北西から)

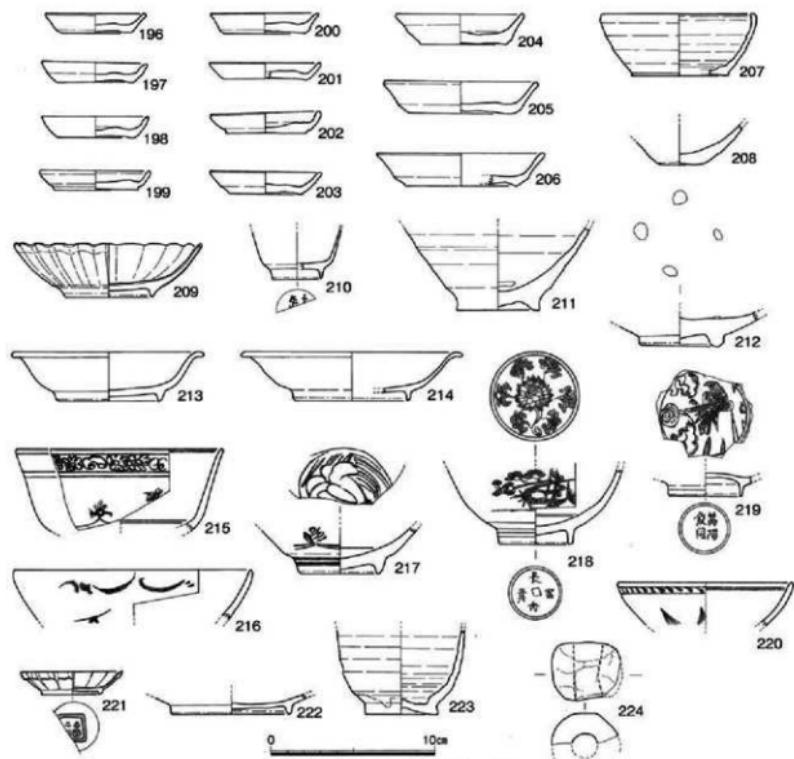


Fig.34 SD 488出土遺物実測図 (1/3)



Ph.71 SD 488出土遺物 (約1/3)

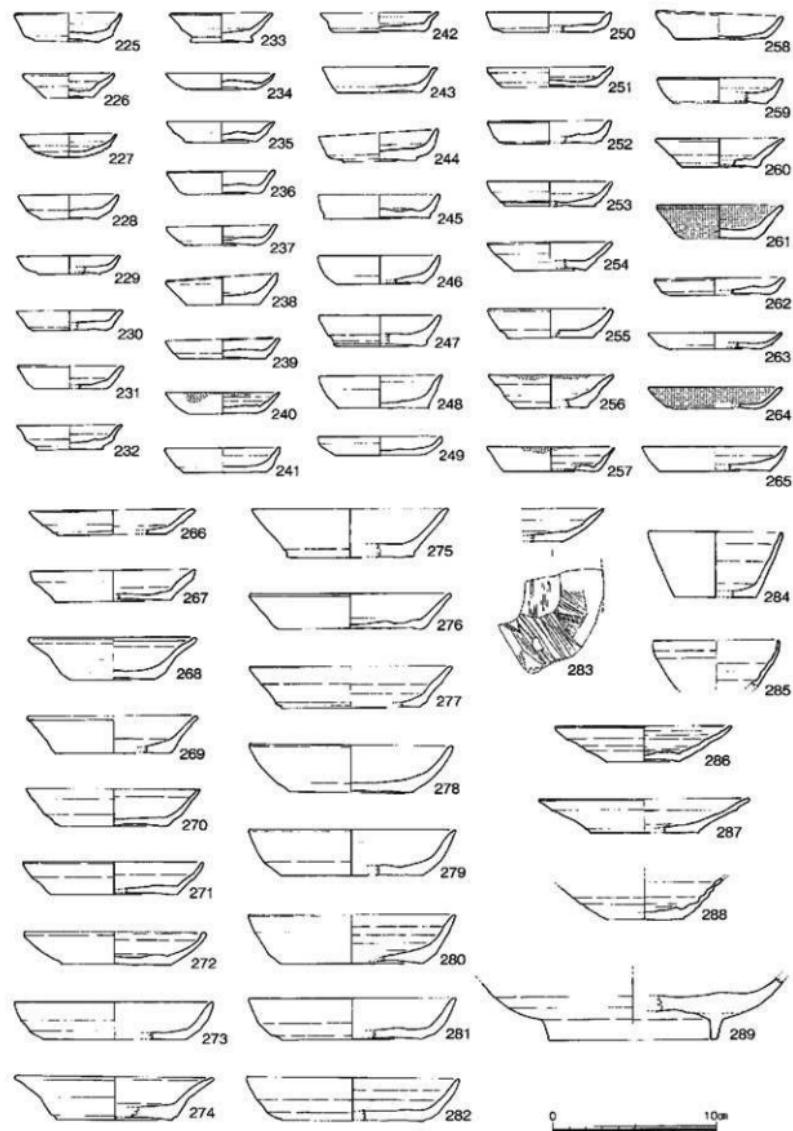


Fig.35 S F 489出土遺物実測図1 (1/3)

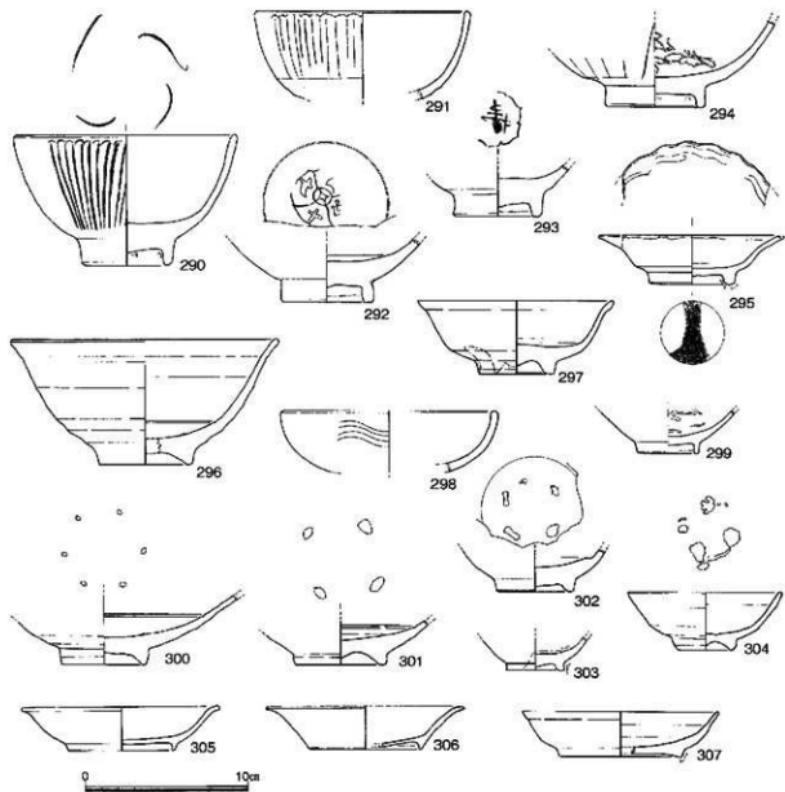


Fig.36 SF 489出土遺物実測図2 (1/3)

B製。高台内の釉を輪状に搔き取る。見込みに劃花文が施される。291もB類、292・293は見込みに印花を施す。293の印花は「寿」か。高台内途中まで釉がかかる。294はB類で内面に陽印刻文を施す。高台内途中の釉を輪状に搔き取る。295は龍泉窯系青磁の殘花皿。見込みは円形に釉剥ぎされるが、一部剥ぎ残され、輪状になる。疊付の釉を搔き取る。高台内に墨痕がある。296・297は朝鮮王朝の白磁碗。口縁部が外反し、高台内はアーチ状になる。298は白磁の皿。外面に4条の波状文が入る。299は白磁の小碗。内面に陽印刻文が施される。疊付の釉を搔き取る。300～302は朝鮮王朝の白磁碗である。300には6ヶ所、301には4ヶ所の胎土目、302には5ヶ所の砂目。303は白磁の小碗。見込みの釉を円形に搔き取る。外面は高台まで施釉する。304は朝鮮王朝の白磁小碗である。305は白磁皿E-2。306は白磁坏E-2。307は白磁皿。底部は露胎である。308は青花の小杯である。309は青花皿C群。見込みに花鳥文を描く。310も青花皿C群。見込みに「宣」の字を描く。瀋州窯系。311は青花皿B1群である。312は朝鮮王朝灰青陶器の皿。見込みに砂目が5ヶ所ある。313は短頸の

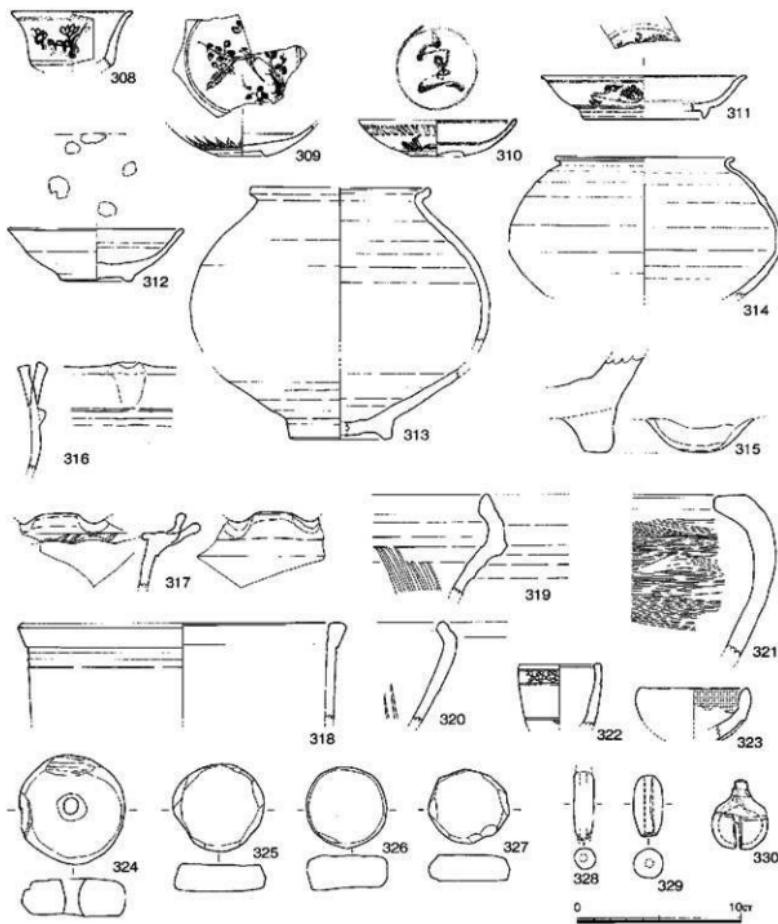


Fig.37 SF 489出土遺物実測図 3 (1/3)

白磁の盃。体部と底部の接点ではなく、全形は不明確。314は褐釉陶器の盃。315は信前焼壺の底部か。316・317は緑褐釉陶器の鉢。朝鮮土朝差か。316は片口、317は波状口縁。318は陶器の深鉢である。319は備前焼擂鉢。附壁縦年V期。320は須恵質の擂鉢である。321は瓦質の火鉢。内面ハケメ、外面は精緻なミガキを施す。322は瓦質の土器。香炉か。口縁下に梅花文のスタンプを施す。323は取糸である。324～327は瓦当。324は中央部に穿孔している。328・329は管状土鉢。330は土鉢である。このほか青花碗C群、瓦などが出土している。

出土遺物より道路は16世紀代のものと考えられる。



Ph.72 SF489出土遺物(約1/3)

**SK512** (Fig.38・39、Ph.73)

M・N-14・15で確認された土坑。東側は発掘区外にのび、SK507～511、SK527に切られるため、形状不明。確認面から底までの深さは30cm。

Fig.39に出土遺物を示す。331～335は土師器の小皿、336は土師器の小杯、337～339は土師器の壊である。338は大内系の土師器。340は白磁の小杯。見込みの袖を輪状に搔き取っている。肥前系か。341は青花碗C群。SK465の破片と接合している。342は青花碗。見込みの袖を輪状に搔き取る。高台は露胎。漳州窯系か。343は腰折の青花皿。344は青花皿C群。破面に漆緋の痕跡がある。345は唐津焼灰釉陶器皿。見込みに胎土目がある。346は元様式の青花の小壺。肩部に唐草文、胴部に花卉文を描く。SK456

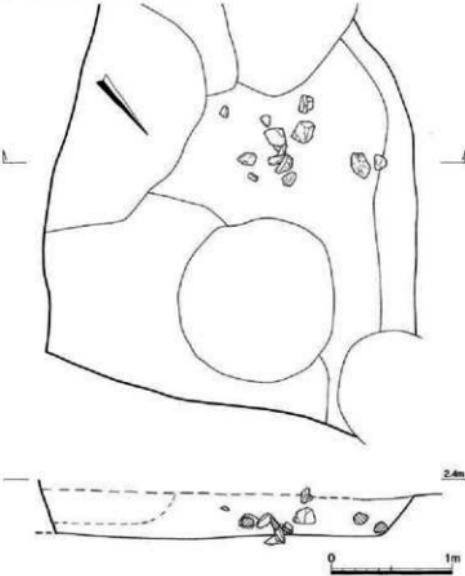


Fig.38 SK512実測図(1/40)

の破片と接合。口唇部は釉剥ぎ、底部は露胎。同様のタイプの小壺はフィリピンなど東南アジアで出土している。国内では沖縄県の今帰仁城から出土している。347は備前焼壺。348は瓦質の火鉢である。脚部を獣面とする。

出土遺物には17世紀のものも含まれるが、混入であろう。

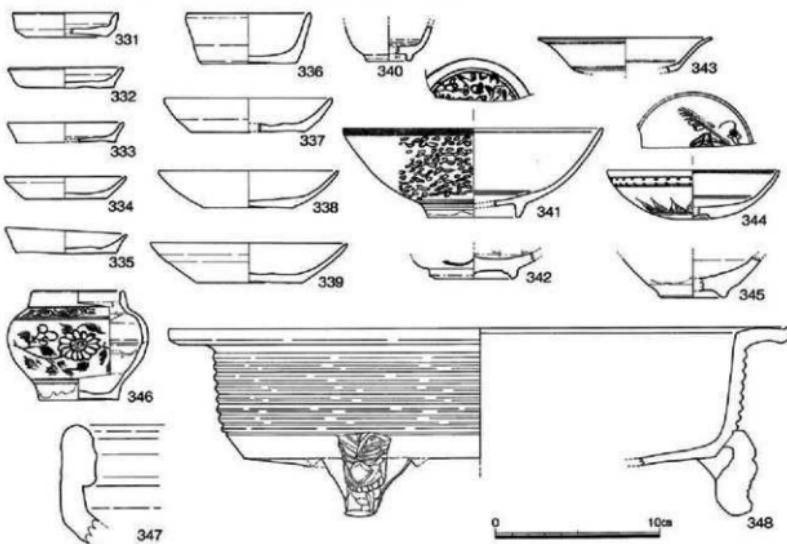


Fig.39 SK 512出土遺物実測図 (1/3)



Ph.73 SK 512出土遺物 (346: 約1/2、他: 約1/3)

S E 520 (Fig.40・41, Ph.74)

K～M-16・17に位置する円形桶組井戸。第2面調査時は井筒の部分のみ小土坑として調査していたが、第3面に下げて、井戸であることがわかった。第3面での堀方は長軸3.1m、短軸2.6mの椭円形を呈する。井筒に径70cm、高さ60cmの木桶を据える。上部にも2段分の桶の痕跡がかすかに確認された。

Fig.41に出土遺物を示す。349～353は土師器の小皿、354は土師器の小壺、355は土師器の壺である。

356は朝鮮王朝の白磁皿。内面に4ヶ所の目跡が残る。

357は青花皿。高台内側に砂粒が付着している。漳州窯系。

358は肥前の染付碗。

359は唐津焼三島手の鉢である。

360は天目碗。黒灰色の胎土に黒褐色不透明釉をかける。

瀬戸・美濃窯産か。361は瓦質の捏鉢である。

362は三巴の軒丸瓦。

363は軒平瓦である。

出土遺物からこの井戸の

廃絶は17世紀

と考えられる。



Fig.74 S E520 (北から)

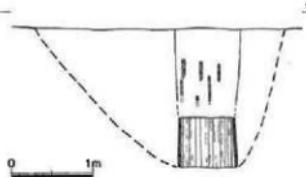


Fig.40 S E520実測図 (1/60)

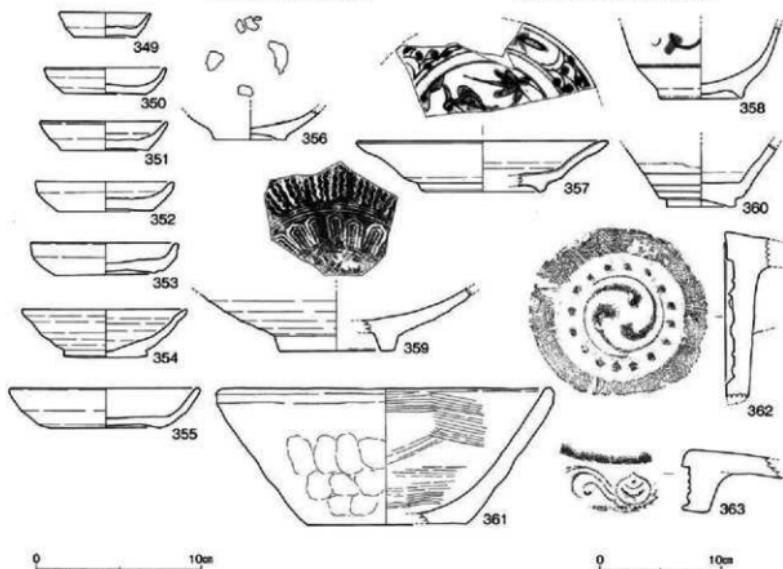


Fig.41 S E520出土遺物実測図 (362・363: 1/4, 他: 1/3)

#### 4. 第3面の調査

標高0.9m～1.4mで設定した最終遺構面である。調査区の北側は黒色の粘土層、南側は河川堆積砂となる。杭列2条、溝19条、井戸5基、土坑141基、遺物集中部5ヶ所、ピット多数を調査した（付図3・Tab.4）。15世紀～16世紀代の遺構群である。

南側には溝がある（SD741・742）。博多浜の低地の排水の役目を果たしたのであろう。東側には護岸を設けている。この溝を挟んで、柱穴が分布しており、屋敷地であったことが窺われる。

ピットに石を据えるものや扁平な石が単独でみられたため、多数の建物の存在が考えられるが、はつきりとした建物として確認できなかった。付図3には建物の一部と考えられる部分を3ヶ所示した。溝と軸を合わせている。

溝の西側の屋敷地は発掘区外になるため、状況はわからないが、第2面から第3面に掘り下げるときに、21列のグリッドから鋳造関連遺物が出土していることや、124次調査の西側の49次・72次調査でも多数の鋳造関連遺物が出土していることから、鋳造工房があったと考えられる。

溝の東の建物分布域から更に東にはいると井戸が集中して分布する。屋敷の庭にあたると考えられる。井戸と柱穴群の間にはかわらけ溜まりがあることもそれを裏付けるものであろう。

北側は湿地に杭を打ち込み、木製品や土器、陶磁器などが投棄されている。埋め立てがなされたばかりの状態で遺構は溝のみである。



Ph.75 A区3面空撮（上が北東）



Ph.76 A区南4面全景（南西から）



Ph.77 B区3面空撮（上が北東）



Ph.78 C区3面空撮（上が南東）

Tab. 4 第3面構造一覧

番号	種類	地名	位 置	標 号	番号	種類	地名	位 置	標 号
S.K. 401	上段	A区	D - F - 2	中世後期	S.K. 353	門田東北山	B区	H - 1 - 9	
S.K. 402	上段	A区	D - F - 2		S.K. 355	高丸東北山	B区	H - 0	
S.K. 403	中世後期	A区	D - F - 2		S.K. 356	門田東北山	B区	I - J - 1	15世紀?
S.K. 404	輪門付土坑	A区	F - P - 2 - 3		S.K. 373	門田北西山	B区	I - J - 1 - 1 - 1	15世紀?
S.K. 405	輪門付土坑	A区	P - O - 2 - 3		S.K. 375	門田北東山	B区	I - J - 1 - 1	15世紀
S.K. 406	輪門付土坑	A区	O - P - 3 - 1 - 4	中世後期	S.K. 376	門田北東山	B区	J - K - 1 - 0	中世後期
S.K. 407	輪門付土坑	A区	P - O - 4	中世後期	S.K. 379	門田北東山	B区	J - K - 1 - 0	中世後期
S.K. 408	輪門付土坑	A区	O - 2		S.K. 405	輪門付土坑	B区	M - 1 - 2	中世後期
S.K. 409	輪門付土坑	A区	O - S - 3 - 4		S.K. 406	輪門付土坑	B区	M - 1 - 2 - 1 - 3	16世紀
S.K. 410	小字段	B区	N - O - 3 - 4		S.K. 410	不安室土坑	B区	K - L - 1 - 1 - 1 - 3	16世紀? 出戻?
S.D. 741	壁面施	A区	N - K - 2 - 4		S.K. 411	輪門付土坑	B区	K - L - 1 - 0	中世
S.D. 771	壁面施	A区	X - A - 3 - 1 - C - E - 4 - 5 - B - E - 4 - 5 - 1	16世紀後半	S.K. 412	輪門付土坑	B区	L - M - 1 - 0 - 1	16世紀
S.K. 124	井筒	A区	C - D - 5 - 6	中世後期	S.K. 413	輪門付土坑	B区	L - M - 1 - 0 - 1	16世紀
S.K. 125	井筒	A区	L - G - 6 - 7	近世?	S.K. 414	輪門付土坑	B区	I - B - 0	中世
S.K. 176	納門付土坑	A区	K - 7	中世後期	S.K. 415	輪門付土坑	B区	I - M - 2 - 9	16世紀
S.D. 177	壁面施	A区	K - 3 - 6	15世紀後半	S.K. 416	輪門付土坑	B区	K - 1 - 8 - 9	中世後半
S.K. 178	井筒	A区	L - B	中世後期	S.K. 417	輪門付土坑	B区	K - 1 - 9	中世
S.K. 180	小字段	A区	L - B		S.K. 418	輪門付土坑	B区	I - 0	中世
S.K. 182	井筒付土坑	A区	J - K - 5	16世紀	S.K. 419	輪門付土坑	B区	I - 0	中世
S.K. 184	井筒	A区	J - B	中世後期	S.K. 420	輪門付土坑	B区	L - 0	中世
S.K. 185	井筒	A区	J - 5		S.K. 421	輪門付土坑	B区	I - 0 - 5	中世
S.D. 187	井筒	A区	J - 5 - 6	中世後期	S.K. 422	輪門付土坑	B区	I - M - 1 - 0 - 1 - 1	16世紀
S.K. 188	小字段付土坑	A区	H - 1 - 6	16世紀後半	S.K. 423	輪門付土坑	B区	I - M - 1 - 0 - 1 - 1	16世紀
S.K. 189	方形土桶付土坑	A区	H - 7 - 8	16世紀後半	S.K. 424	輪門付土坑	B区	I - M - 1 - 0 - 1 - 1	16世紀後半
S.K. 190	方形土桶	A区	G - H - 7 - 8	16世紀後半	S.K. 425	不安室土坑	B区	I - M - 1 - 1 - 1 - 2	中世後半 開拓 地主?
S.K. 191	方形土桶	A区	J - K - 5 - 6	16世紀	S.K. 426	不安室土坑	B区	E - F - 1 - 2 - 1 - 4	中世
S.K. 192	輪門付土坑	A区	J - 4	中世後期	S.K. 427	輪門付土坑	B区	K - 1 - 0 - 1 - 1	中世
S.K. 193	輪門付土坑	A区	J - 3 - 4	中世後期	S.K. 428	不安室土坑	B区	K - 9	形跡不明
S.K. 194	輪門付土坑	A区	J - 4 - 5	16世紀	S.K. 429	輪門付土坑	B区	I - J - 8 - 1 - 0	16世紀 復元
S.K. 195	輪門付土坑	A区	A - H - 4 - 5	16世紀後半	S.K. 430	輪門付土坑	B区	I - J - 8 - 1 - 0	16世紀 復元
S.K. 197	輪門付土坑	A区	I - 4 - 1 - 5 - 4	15世紀	S.K. 431	輪門付土坑	B区	I - 1 - 1	中世後期
S.K. 198	1941年	既	A区	G - 4	S.K. 432	輪門付土坑	B区	F - C - 1 - 1	中世後期
S.D. 201	裏西面	A区	G - 4 - 5	中世	S.K. 433	輪門付土坑	B区	J - 9	中世
S.K. 202	裏西面	A区	G - 5 - 8		S.K. 434	輪門付土坑	B区	G - H - 1 - 2	
S.K. 205	輪門付土坑	A区	H - 5 - 6		S.K. 437	輪門付土坑	B区	I - 1 - 2	
S.K. 207	土壤	A区	I - 7 - 8		S.K. 440	輪門付土坑	B区	M - 1 - 2	中世後期
S.K. 212	不安室土坑	A区	E - F - 0 - 6 - 6	小型電気	S.K. 451	輪門付土坑	B区	N - 2 - 4 - 2 - 6	小古墳期
S.K. 213	方形土桶	A区	D - E - 7	近世?	S.K. 459	輪門付土坑	B区	N - 0 - 2 - 5	小古墳期
S.K. 214	輪門付土坑	A区	D - E - 7	中世後期	S.K. 472	輪門付土坑	C区	I - M - 2 - 5	中世後期
S.K. 215	輪門付土坑	A区	M - 6 - 8	16世紀後半	S.K. 478	輪門付土坑	C区	L - 2 - 5	中世後期
S.K. 216	輪門付土坑	A区	M - 6 - 8	中世後期	S.K. 479	輪門付土坑	C区	L - 2 - 5	中世後期
S.K. 217	輪門付土坑	A区	C - 4 - 5		S.K. 580	輪門付土坑	C区	K - 1 - 2 - 5 - 2 - 6	小古墳期 黒石古跡
S.D. 220	小西面	A区	H - H - 5		S.K. 595	小輪門付土坑	C区	L - 1 - 2 - 4 - 2 - 6	
S.K. 222	輪門付土坑	A区	F - 6 - 7		S.K. 600	輪門付土坑	C区	L - 2 - 3 - 2 - 4	中世後期
S.K. 223	輪門付土坑	A区	F - 8		S.K. 693	輪門付土坑	C区	K - L - 2 - 2 - 2 - 3	
S.K. 224	輪門付土坑	A区	E - F - 8 - 8		S.K. 694	輪門付土坑	C区	K - 2 - 2 - 3	16世紀後半
S.K. 225	20世紀	A区	D - E - 9 - 9		S.D. 600	輪門付土坑	C区	C - D - O - 2 - 0	中世後期
S.K. 226	輪門付土坑	A区	M - 6 - 8		S.K. 601	輪門付土坑	C区	N - 1 - 0	中世後期
S.K. 227	輪門付土坑	A区	C - 4 - 5		S.K. 611	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0	中世後期
S.K. 228	輪門付土坑	A区	F - 6 - 7		S.K. 612	輪門付土坑	C区	N - 1 - R	中世後期
S.K. 229	輪門付土坑	A区	F - 8		S.K. 616	輪門付土坑	C区	N - O - 1 - S - 1 - 0	15世紀
S.K. 230	輪門付土坑	A区	E - F - 8		S.K. 617	輪門付土坑	C区	O - 1 - S	中世後期
S.K. 231	輪門付土坑	A区	E - F - 7 - 8		S.K. 619	輪門付土坑	C区	N - O - 1 - S	中世後期
S.K. 232	輪門付土坑	A区	D - E - 9 - 9		S.K. 620	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 233	輪門付土坑	A区	D - E - 9 - 9		S.K. 621	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 234	輪門付土坑	A区	E - F - 6 - 3		S.K. 622	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 235	方形土桶	A区	C - C - 10	16世紀	S.K. 623	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 236	輪門付土坑	B区	C - D - 10 - 1 - 11	中世	S.K. 624	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 237	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 625	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 238	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 626	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 239	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 627	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 240	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 628	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 241	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 629	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 242	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 630	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 243	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 631	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 244	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 632	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 245	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 633	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 246	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 634	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 247	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 635	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 248	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 636	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 249	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 637	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 250	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 638	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 251	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 639	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 252	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 640	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 253	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 641	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 254	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 642	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 255	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 643	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 256	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 644	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 257	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 645	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 258	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 646	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 259	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 647	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 260	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 648	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 261	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 649	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 262	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 650	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 263	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 651	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 264	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 652	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 265	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 653	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 266	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 654	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 267	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 655	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 268	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 656	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 269	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 657	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 270	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 658	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 271	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 659	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 272	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 660	輪門付土坑	C区	M - 1 - 0 - 1 - 2 - 3	中世後期
S.K. 273	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 661	輪門付土坑	C区	N - O - 1 - 5	中世後期
S.K. 274	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 662	輪門付土坑	C区	N - O - 1 - 5	中世後期
S.K. 275	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 663	輪門付土坑	C区	N - O - 1 - 5	中世後期
S.K. 276	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 664	輪門付土坑	C区	N - O - 1 - 5	中世後期
S.K. 277	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 665	輪門付土坑	C区	N - O - 1 - 5	中世後期
S.K. 278	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 666	輪門付土坑	C区	N - O - 1 - 5	中世後期
S.K. 279	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 667	輪門付土坑	C区	N - O - 1 - 5	中世後期
S.K. 280	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 668	輪門付土坑	C区	N - O - 1 - 5	中世後期
S.K. 281	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 669	輪門付土坑	C区	O - 1 - 5 - 1 - 0	15世紀?
S.K. 282	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 701	輪門付土坑	C区	K - 1 - 0 - 2 - 0	15世紀
S.K. 283	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 702	輪門付土坑	C区	K - 1 - 0 - 2 - 0	15世紀
S.K. 284	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 703	輪門付土坑	C区	K - 1 - 0 - 2 - 0	15世紀
S.K. 285	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 704	輪門付土坑	C区	K - 1 - 0 - 2 - 0	15世紀
S.K. 286	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 705	輪門付土坑	C区	K - 1 - 0 - 2 - 0	15世紀
S.K. 287	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 706	輪門付土坑	C区	K - 1 - 0 - 2 - 0	15世紀
S.K. 288	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 707	輪門付土坑	C区	K - 1 - 0 - 2 - 0	15世紀
S.K. 289	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 708	輪門付土坑	C区	K - 1 - 0 - 2 - 0	15世紀
S.K. 290	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 709	輪門付土坑	C区	K - 1 - 0 - 2 - 0	15世紀
S.K. 291	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 710	輪門付土坑	C区	K - 1 - 0 - 2 - 0	15世紀
S.K. 292	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 711	輪門付土坑	C区	K - 1 - 0 - 2 - 0	15世紀
S.K. 293	輪門付土坑	B区	D - E - 11 - 1 - 2	中世	S.K. 712	輪門付土坑	C区	K - 1 - 0 - 2 - 0	15世紀
S.K. 294	輪門付土坑	B区							

#### SD171・SA234・SA235・埋立 (Fig.42~44, Ph.79~82)

SD171は調査区の北端部を東西方向にのびる溝である。両端は発掘区外にのびる。10m分調査した。断面はU字形で確認面から溝底までの深さは80cmである。

土師器の壺・皿、白磁E群の皿、龍泉窯系青磁壺、景德鎮窯系輪花皿、青花碗・皿、瓦質土器の擂鉢・風炉、備前焼擂鉢・壺、ざるなどが出土している。364は土師器の小皿、365・366は土師器の壺である。367は龍泉窯系青磁の壺か。底部は蛇の目凹形高台となり墨痕がみられる。368・369は景德鎮窯系青磁輪花皿である。淡青緑色の透明釉がかかり、高台内は透明釉をかけ「裏白」とする。368は10弁、369は11弁の輪花である。370は白磁皿E-2。わずかに黄色味がかった白色の透明釉がかかることで付を釉剥ぎする。371は青花碗E群。鳳凰と雲竜文が描かれる。高台内に「宣徳年造」の銘がある。372は青花碗D群。高台内に「長命富貴」の銘がある。373~375は青花皿E群。見込みに山水人物図、外面に花鳥折枝文を描く。高台内に373・374は「洪武年造」、375は「大明年造」の銘がある。376は見込みに玉取獅子を描く青花皿B1群。377は瓦質の風炉である。

SD171は出土遺物より16世紀後半に埋没したと考えられる。

SD171の北側は造構はみられず、土質が南側と異なり、暗灰色を呈し粘土質であった。F-3付近では土留めと思われる横板や杭があり、その北側には礫が多数みられたため、埋立の痕跡かと思われた。全体を掘り下げていくと、SD171のやや南側に杭列がみられ、F-3付近の杭列や横板とつながる状況が認められ、SA234とした。また、E・F-3に竹の杭を密に打ち込んだSA234と直交方向の杭列があり、SA235とした。

SA234・SA235付近とその北側から出土した遺物をFig.44に示す。378は龍泉窯系青磁の盤である。見込みに陽印花文を施す。高台内の釉を輪状に搔き取る。墨書がある。379は白磁D群の皿である。抉り高台である。380も白磁D群の皿。高台内に「田」の墨書がある。381はベトナム産の白磁碗である。高台脇までやや淡緑がかかった透明釉がかかる。見込みに目跡が残る。内面に陽印刻文。破片の割れ口に漆縫の痕跡が認められる。382は白磁菊皿E-4である。高台内に「天下太平」の銘がある。383は白磁の小杯。391や392などと同じ器形である。高台内に「大明年造」の銘がある。384は藍釉の杯である。外面に深いブルーを呈する藍釉をかけ、内面は透明釉をかけ白色とする。景德鎮窯系であろう。385は青花碗D群である。SD171、SK213の破片と接合した。386・387は青花碗E群。高台内に「長命富貴」の銘。388は青花皿C群である。壽の字の中に仙人を描く。389・390は青花皿B1群である。見込みに樹石欄杆図、外面に牡丹唐草文を描く。391・392は青花



Ph.79 SA234 (西から)



Ph.80 SA235 (北西から)



Fig.42 SD171・SA234・SA235・埋立実測図・土層図 (1/50)

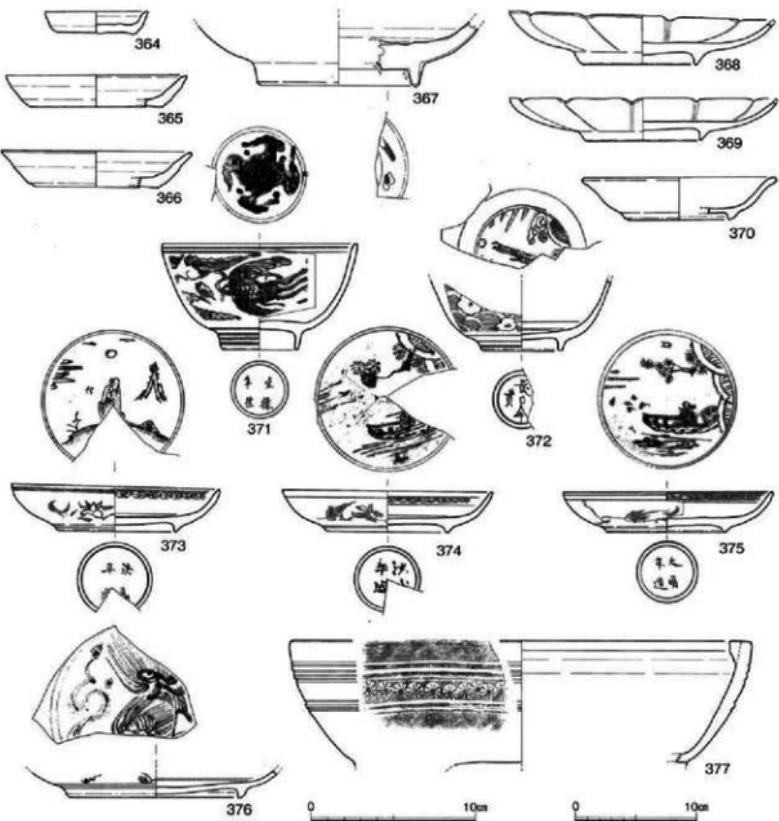


Fig.43 SD171出土遺物実測図 (377:1/4, 他:1/3)



Ph.81 SD171出土遺物 (約1/3)

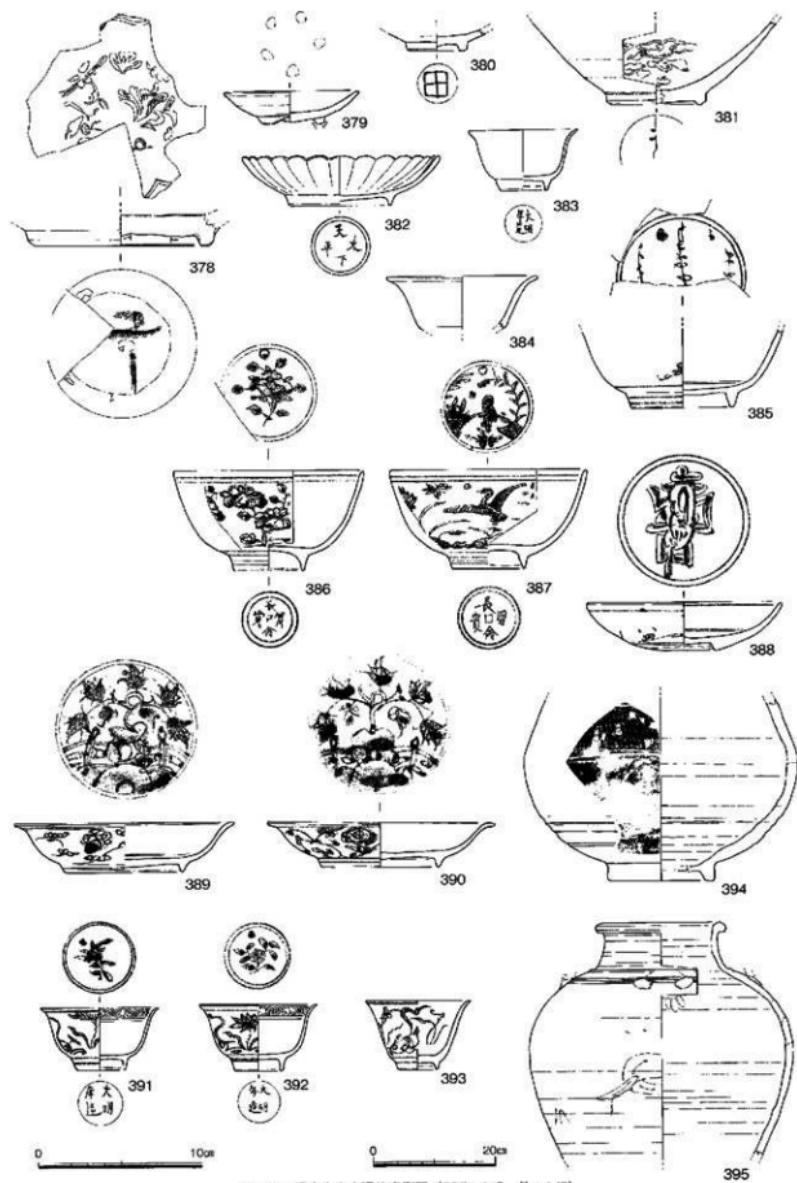


Fig.44 墓出土遺物測量圖 (395:1/8, 他:1/3)



382



386



387



382



386



387



385



386



387



388



389



390



388



389



390

Ph.82 墓出土遺物 (約1/3)

の小杯である。外面に蓮花、見込みに果実を描く。高台内には「大明年造」の銘がある。393も青花の小杯。391・392に比べ腰部の張りがない。394は象嵌の粉青沙器瓶である。395はタイ産の四耳壺である。

埋立上から出土するのは16世紀中頃の遺物が中心である。

### S K 182 (Fig.45・46)

J・K-8に位置する円形土坑である。A区で確認されたが、B区でははっきりしなかった。径2.0m、深さ40cm。砾や瓦が多く投棄されている。

土師器の壺・皿、白磁E群の皿・小杯、龍泉窯系青磁碗・香炉、同安窯系青磁皿、朝鮮王朝の白磁碗、薬器瓶・小壺、瓦質土器の擂鉢・土鍋、備前焼擂鉢・壺、瓦、土鍤などが出土した。396・397は土師器の小皿、398~402は土師器の壺である。397を除いて大内系の土師器か。403は龍泉窯系青磁香炉である。足は接地しない。404は朝鮮王朝の白磁碗である。高台内はアーチ状になる。405は綠褐釉陶器の小壺である。朝鮮干筋産か。

出土遺物から16世紀代の遺構と考えられる。

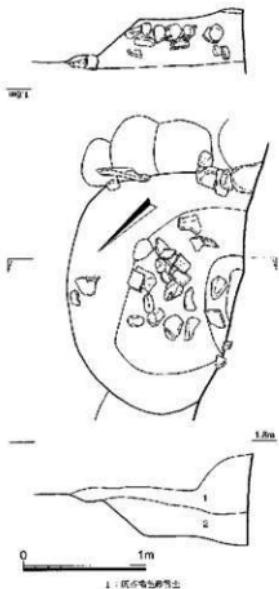


Fig.45 SK182実測図 (1/40)

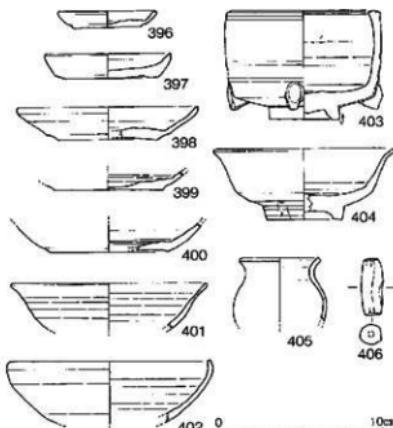


Fig.46 SK182出土遺物実測図 (1/3)

**S K 188 (Fig.47・48、Ph.83)**

H・I-6に位置する梢円形土坑である。長軸1.3m、短軸0.9m、確認面から床面までの深さ30cmである。

Fig. 48に出土遺物を示す。407~414は土師器の小皿である。411は油煙が付着する。415~419は土師器坏である。419は胎土が白っぽく、きわめて細かい。大内系。420は龍泉窯系青磁碗D類である。淡青灰色の不透明釉が厚くかかる。大きな氷裂が入っている。高台内の釉を掻き取る。421は龍泉窯系青磁の盤である。淡青灰色の不透明釉が厚くかかり、氷裂が入る。高台内の釉は掻き取っている。見込みに印花文がある。422は備前焼鉢である。間壁編年IV B期。

出土遺物から15世紀後半の遺構と考えられる。

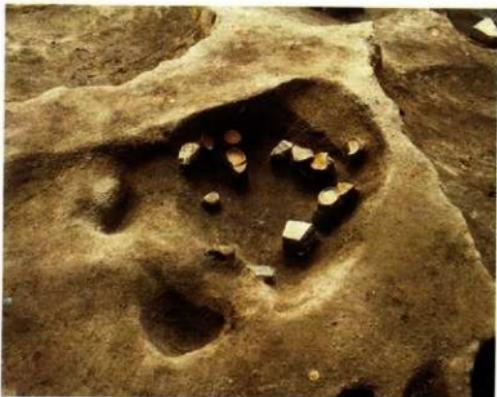
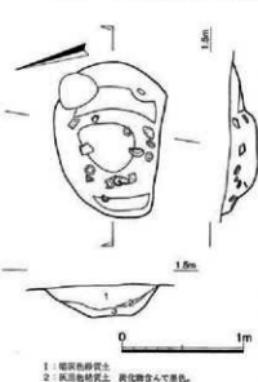


Fig.47 SK 188剖面図 (1/40)

Ph.83 SK 188 (東から)

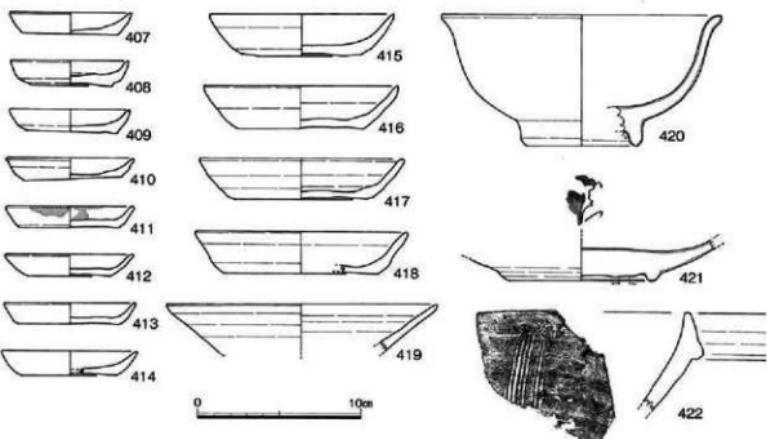


Fig.48 SK 188出土遺物実測図 (1/3)

**S K 189 (Fig.49・50, Pl.84)**

H-7・8で検出された土坑。四隅に礎石を据え、柱を立て、横棧を通している。長辺11m、短辺20.9m。北側の辺では壁にしていたと考えられる木質が残る。

Fig.50に出上遺物を示す。423～427は土師器の小皿、428～429は土師器の壺。430～432は大内系の土師器壺である。433は高台付の大鉢。内面にスヌ付着。434は龍泉窯系青磁碗。博多分類I～5類。高台内に墨書きがみられる。12世紀中～後半の遺物。435・436は青磁の皿。436は見込みの釉を円形に搔き取る。437は白磁D群の皿。438は白磁C群の碗。見込みに印花が施される。439は白磁碗か。焼成不良の青磁碗の可能性もある。440は朝鮮王朝の白磁碗。441は瓦質の蓋である。

出土遺物から16世紀後半の造構と考えられる。

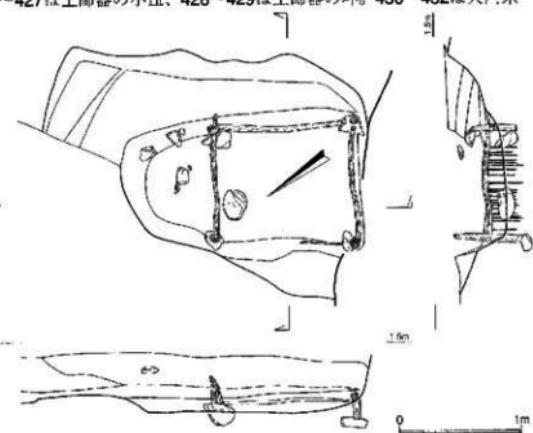


Fig.49 SK 189実測図 (1/40)

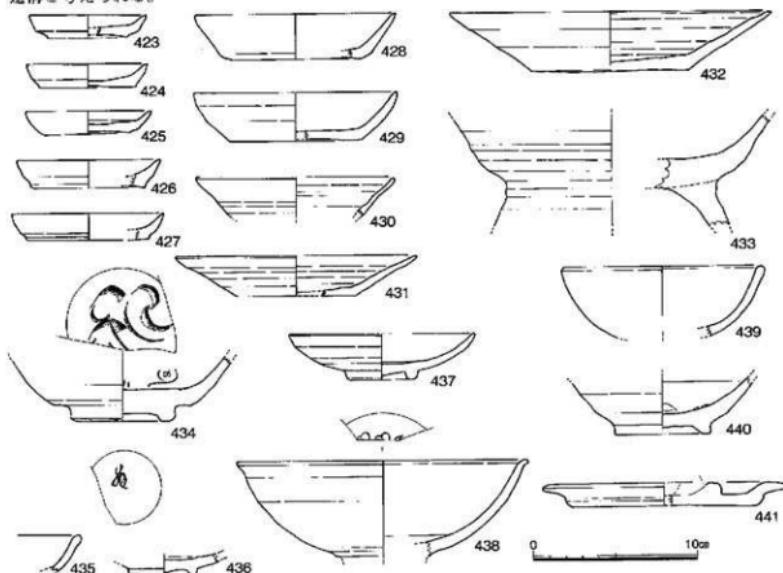


Fig.50 SK 189出土遺物実測図 (1/3)



Ph.84 SK 189 (北東から)



Ph.85 SK 190 (南西から)

### SK 190 (Fig.51・52・Ph.85)

G・H-7・8で検出された方形土坑で、SK 189と同様四隅に礎石を持つが、木材の痕跡は確認できなかった。礎石間は一辺1.2mである。

Fig.52に出土遺物を示す。442・443は土器小皿、444は土器器の壊である。445は龍泉窯系青磁碗B類。見込みに印花文が施されるが不明瞭。高台内面途中まで施釉される。446は青磁の皿。口縁は外反する。器壁は厚い。447は白磁D群の皿。抉り高台である。448は青花皿C群。449は瓦質の火鉢。450は管状土錘。451は瓦玉である。表面に布目と思われる痕跡がある。

出土遺物から16世紀前半の造構と考えられる。

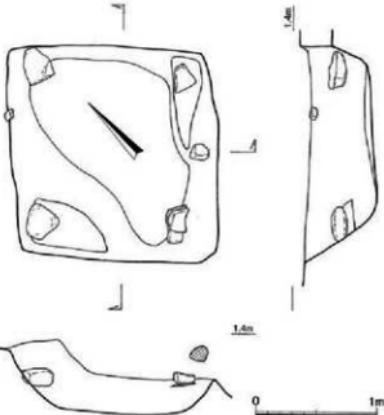


Fig.51 SK 190実測図 (1/40)

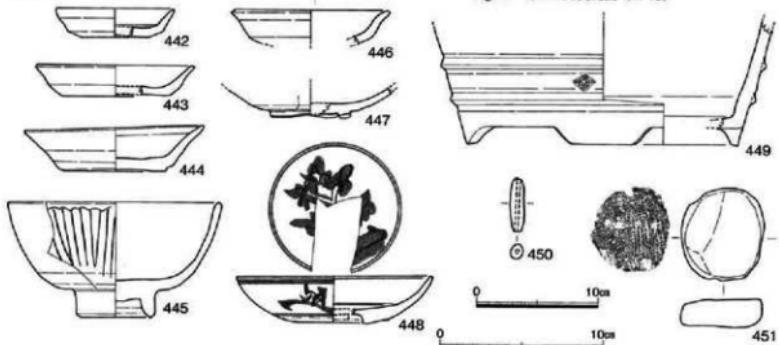


Fig.52 SK 190出土遺物実測図 (449:1/4, 他:1/3)

**SK 197 (Fig.53・54, Ph.86・87)**

H・I-3・4で検出したややいびつな橢円形土坑である。長軸23m、短軸1.9m、確認面から底面までの深さ50cmである。土師器の壊、皿、白磁碗、青磁碗・皿・壺、青花壺、瓦質の擂鉢・火鉢、風炉、土鍋、瓦、木製部材などが出土している。

452～454は土師器の小皿、455～462は土師器の壊である。458の底部には「章」の字が墨書きされている。463は土師器高台付壊である。464は瓦質の風炉である。

出土遺物から15世紀代の遺構と考えられる。

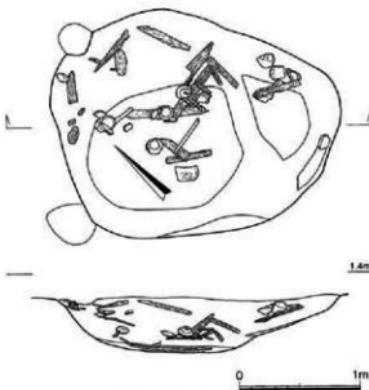


Fig.53 SK 197実測図 (1/40)



Fig.86 SK 197遺物出土状況1 (南西から)



Fig.87 SK 197遺物出土状況2 (北西から)

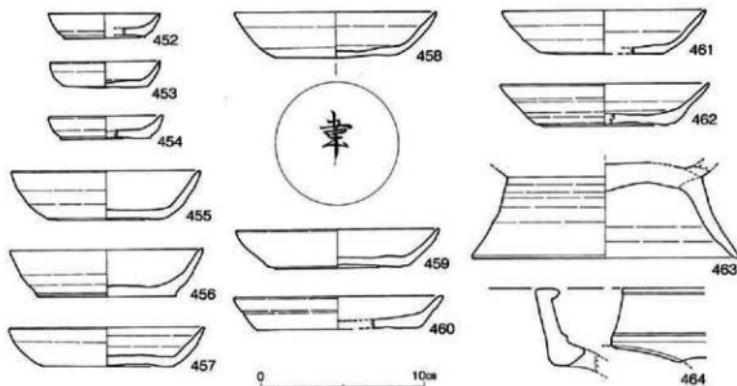
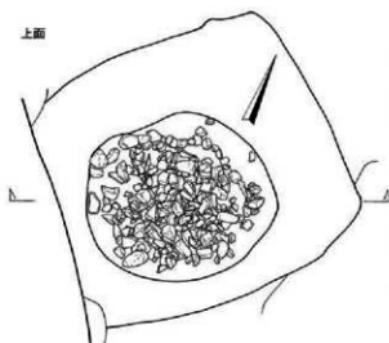


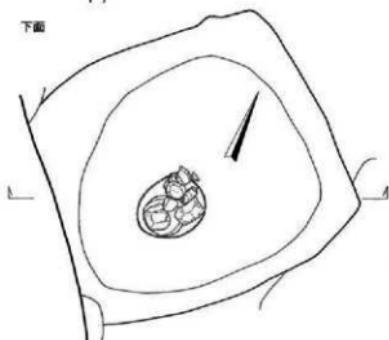
Fig.54 SK 197出土遺物実測図 (1/3)

**S E 321 (Fig.55・56, Ph.88~90)**

E～G-1 3・1 4で検出した桶組井戸である。当初礫が多量に廃棄された土坑が井戸を切っているように思えたが、井戸を廃棄する際、木桶を抜いた後に多量の礫を投げ込んだものであった。最下段の木桶は残されていた。木桶抜き取りの土坑は長軸1.6m、短軸1.3m、深さ50cmである。井戸の堀方は一辺2.3m程度の方形を呈する。木桶の径は55cm、高さは78cmである。タガは3ヶ所巻かれている。土師器の壺・皿、白磁碗・D群皿・E群皿、龍泉窯系青磁碗・皿・盤、同安窯系青磁碗・皿、景德鎮窯系青磁皿・青花皿、朝鮮王朝の象嵌盞・綠褐釉陶器の瓶、瓦質時の擂鉢・火鉢、備前焼擂鉢・甕、



Ph.88 S E321検出状況（南から）



Ph.89 S E321 (北東から)

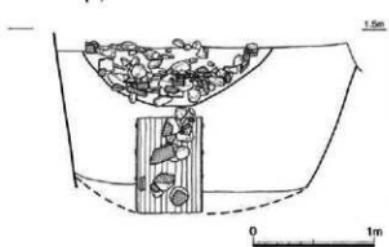
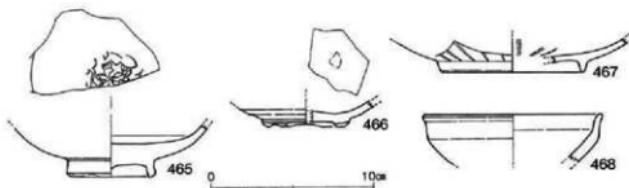


Fig.55 S E321実測図 (1/40)

Ph.90 S E321井筒 (北東から)



瀬戸・美濃窯の天目碗、瓦などが出土している。

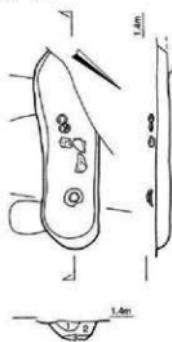
465は龍泉窯系青磁碗である。見込みに印花文がある。高台外側まで釉がかかる。466は白磁D群の皿。抉り高台で、見込みに目跡がある。467は白磁菊皿E-4。468は瀬戸・美濃窯の天目碗である。淡黄色の胎土に暗茶色の不透明釉がかかる。このほか石臼(1160)が出土している。

出土遺物から16世紀後半に廃絶された井戸と考えられる。

#### SD324 (Fig.57・58, Ph.91)

G-12で確認された小規模な溝もしくは細長い土坑である。西側は擾乱で破壊されている。残存長1.6m、幅45cm。確認面から底までの深さ10cm。

Fig.58に出土遺物を示す。469・470は土師器の小皿。471は龍泉窯系青磁皿である。高台は高く、口縁は外反する。見込みの印花文は碗にもみられるモチーフである。高台外面まで釉がかかる。明代前半の製品か。



Ph.91 SD324遺物出土状況 (北西から)

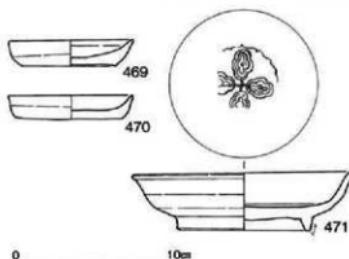


Fig.58 SD324出土遺物実測図 (1/3)

**S E 343** (Fig.59・60、Ph.92・93)

K・L-11・12で確認された桶組井戸である。SK 410を切る。木桶の径は70cm。木桶の中に大ぶりの石が投棄されていた。

土師器の壊・皿、白磁壺・D群皿・E群皿、龍泉窯系青磁碗・皿、青花碗、瓦質土器の鉢、土鍋、備前焼壺、瓦、鶴の羽口などが出土している。472は土師器の壊。473は白磁D群の壺。口縁は外反する。474は備前焼壺である。

出土遺物から16世紀代に廃棄された井戸と考えられる。



Ph.92 S E343 (北西から)



Ph.93 S E343井筒 (北西から)

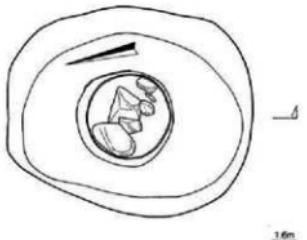


Fig.59 S E343実測図 (1/40)

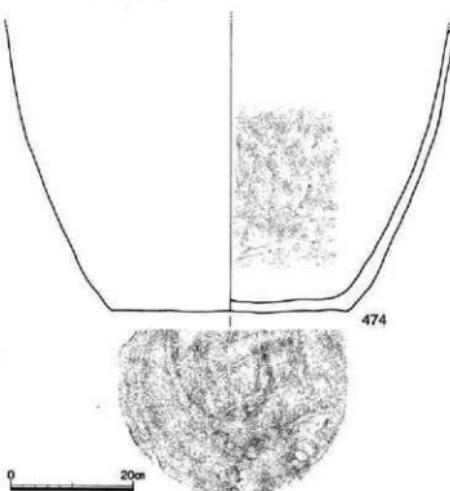
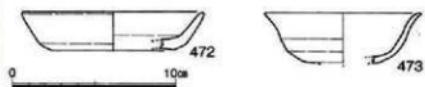


Fig.60 S E343出土遺物実測図 (474: 1/8、他、1/3)

**S E 3 4 5 (Fig.61・62, Ph.94・95)**

1～K-12・13で検出した方形横板組の井戸である。長軸3.5m、短軸3.0mの大きな堀方の東寄りに井側を据える。井側は横板を方形に組み合わせて積み上げている。

土師器の壺・皿、白磁碗・D群角杯・皿、青花碗B群、中国産陶器捏鉢・盤・壺、朝鮮王朝の象嵌碗・皿・梅瓶、瓦質土器の鉢鉢・火鉢・片口鉢、土鍋、佛前焼掘鉢、甕、瓦、青銅鏡(1168)などが出土している。475・476は土師器の小皿、477・478は土師器の壺である。479～481は高麗末～朝鮮王朝にかけての象嵌粉青沙器である。479は碗で見込みに二重圓線と如意頭文の印花を施す。480は小碗。481は梅瓶である。SK271の破片と接合した。482は褐釉陶器の鉢。朝鮮王朝產か。483は瓦質土器で、片口の捏鉢。

出土遺物から16世紀代に廃絶した井戸と考えられる。

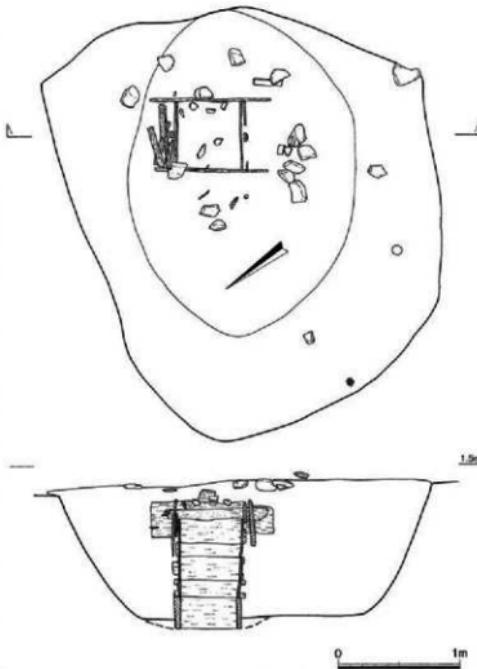


Fig.61 S E 345実測図 (1/40)



Ph.94 S E 345検出状況 (北西から)



Ph.95 S E 345井側 (西から)

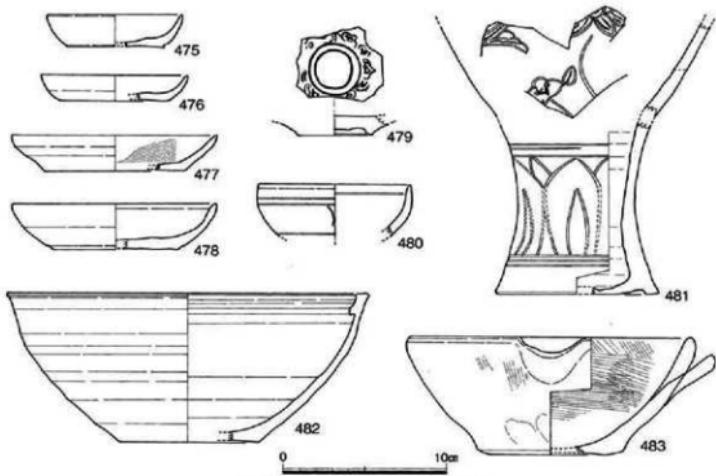


Fig. 62 S E 345出土遺物実測図 (1/3)

**S E 373** (Fig. 63 · 64, Ph. 96 · 97)

I · J - 1 1 · 1 2 で確認された桶組の井戸。堀方は梢円形で、確認面での規模は短軸1.2mである。木桶は径40cmで、遺存状況は良好なが、下方にタガが残っていた。S E 345に切られる。

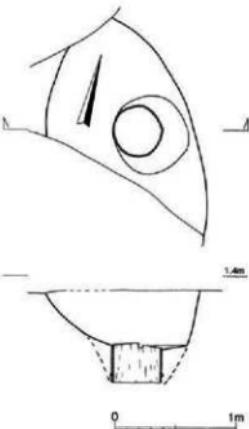


Fig. 63 S E 373実測図 (1/40)



Ph. 96 S E 373 (東から)



Ph. 97 S E 373井筒 (南から)

上部器の杯・皿、白磁枢府磁・E群皿、龍泉窯系青磁碗・斂、天目碗・朝鮮王朝の象嵌碗・緑褐釉陶器瓶、瓦質土器の鉢・火鉢、備前焼壺・壺、瓦などが出土している。484は土器器の小皿である。485は大内系の土器器皿。486は白磁端反皿で、外底の割りがE-2とは異なり、露胎となる。487は無釉陶器の壺で底部に墨書きがある。488~491は備前焼で間接編年V期の製品。488は壺である。SE 3 4 3 井筒出土片と接合している。489~491は壺。489はSE 3 4 5、490はSE 3 4 3、491はSE 3 4 3 壺方、SE 3 4 5 井筒内、SE 2 4 0 の破片と接合している。

出土遺物から16世紀代に廃絶した井戸と考えられる。

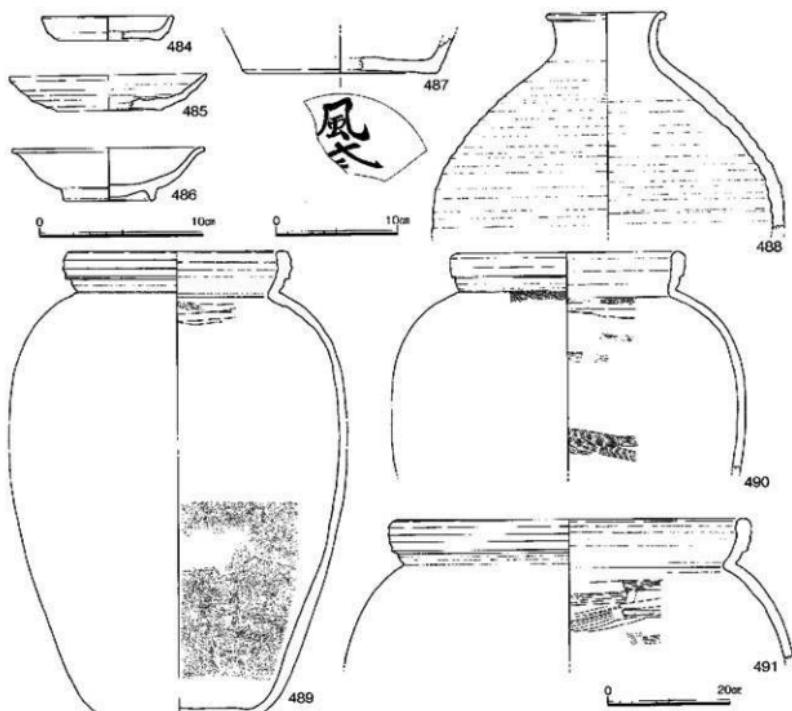


Fig.64 SE373出土遺物実測図 (488:1/4, 489~491:1/8, 他:1/3)

**S K 4 1 0** (Fig.65・66, Ph.98)

K・L-11～13で確認された不整形の大型土坑。長軸4.5m、短軸3.3m、確認面から底部までの深さは95cm。南側がやや深くなっている。井戸の可能性もある。SE343に切られる。SE424・SK425・SD429を切る。

土師器の壺・皿、白磁碗・壺・D群皿、龍泉窯系青磁碗・壺・稜花皿、青花碗D群、中国産陶器盤・鉢、天目碗、茶入れ、朝鮮王朝の白磁碗、刷毛目碗、灰青陶器、瓦質土器の擂鉢・片口鉢・火鉢、土鍋、瀬戸の皿、備前焼擂鉢、瓦などが出土した。492～504は土師器の小皿、505～509は土師器の壺である。510は龍泉窯系青磁の小杯。511は青花碗D群。見込みに蓮花、外面にアラベスク文を描く。SE343の破片と接合した。512は瓦質の擂鉢。内面に刷毛目調整の後、4条の櫛描で擂り目を入れる。513は瓦質の捏鉢。内面下半は使用のため摩耗している。

出土遺物から16世紀代の遺構と考えられる。

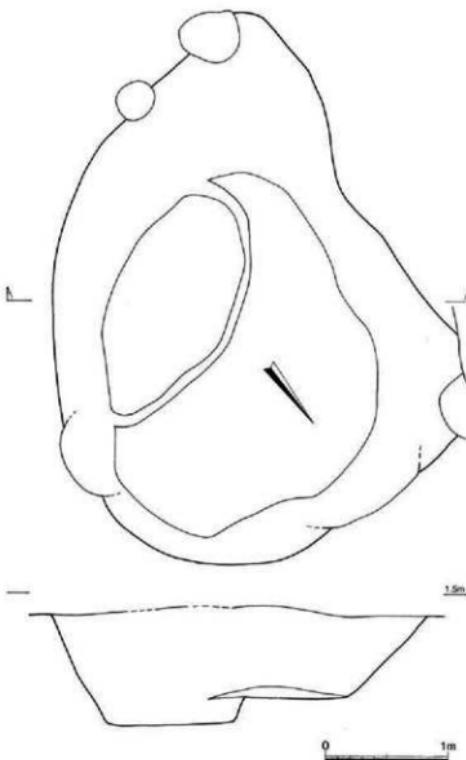


Fig.65 SK 410実測図 (1/40)



511

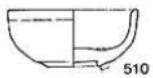
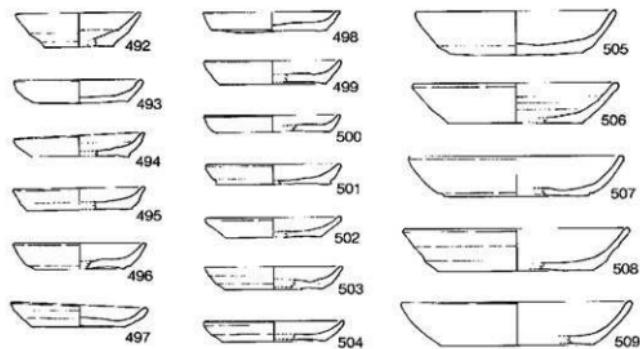


511



511

Ph.98 SK 410出土遺物 (約1/3)



510

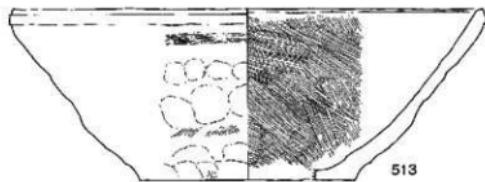


511

0 10cm



512



513

Fig.66 SK410出土遺物実測図 (1/3)

**S E 424 (Fig.67・68, Ph.99)**

K・L-10・11で検出された桶組とみられる井戸。径60cmの桶の痕跡がかすかに残っていた。Fig. 68に出土遺物を示す。514・515は土師器の小皿。514には油煙が付着する。516・517は土師器の壊。518～525は白磁皿E-2である。521はSK 343出土の破片と接合した。526は白磁の壺。SK 410出土片と接合する。内面は露胎。527は瓦質の周防型の擂鉢。7条の摺り目を入れる。このほか龍泉窯系青磁碗・壊・盤・朝鮮王朝の象嵌粉青沙器、備前焼擂鉢、瓦などが出土した。

出土遺物から16世紀中頃に廃絶した井戸と考えられる。



Ph.99 S E 424 (北西から)

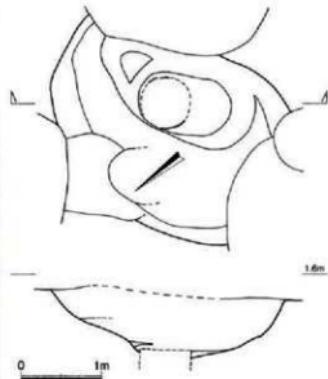


Fig.67 S E 424実測図 (1/60)

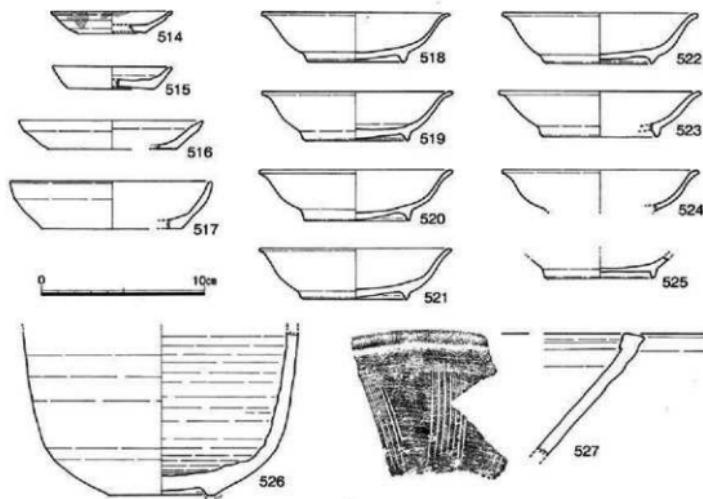


Fig.68 S E 424出土遺物実測図 (1/3)

**SK432・SK439 (Fig.69・70, Ph.100・101)**

SK432はI・J-8-10で検出された土坑。東側のプランは第2面の遺構SK240に切られるなどしてはっきりしなかった。確認面から底面までの深さは80cm。西寄りに砾と間壁編年V期の備前焼甕が集中して出土した。

土師器の壺・皿、白磁碗・壺・E群皿、龍泉窯系青磁碗・皿・盤・香炉、青白磁合子、青花碗E群・皿C群、朝鮮王朝の白磁碗・灰青陶器皿、綠褐釉陶器瓶、タイ産の陶器壺、瓦質土器の鉢・擂鉢、備前焼壺・壺、瓦などが出土した。528は土師器の小皿、529～531は土師器の壺である。532・533は龍泉窯系青磁碗である。博多分類I類。12世紀中～後半の製品。高台内に墨書がある。534は龍泉窯系青磁碗B類である。535は龍泉窯系青磁碗B類で高台内の釉を輪状に掻き取る。見込みは中心に印花、周囲に刻花文を施す。536は龍泉窯系青磁の小鉢である。高台内の釉を輪状に掻き取る。14世紀後半の製品。537は青磁の皿である。口縁は内

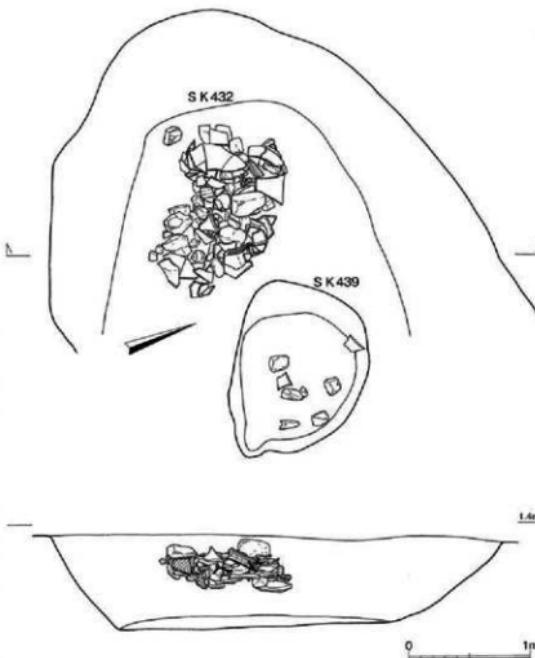


Fig.69 SK432・SK439実測図 (1/40)



Ph.100 SK432・SK439遺物出土状況（北から）



Ph.101 SK432遺物出土状況（東から）

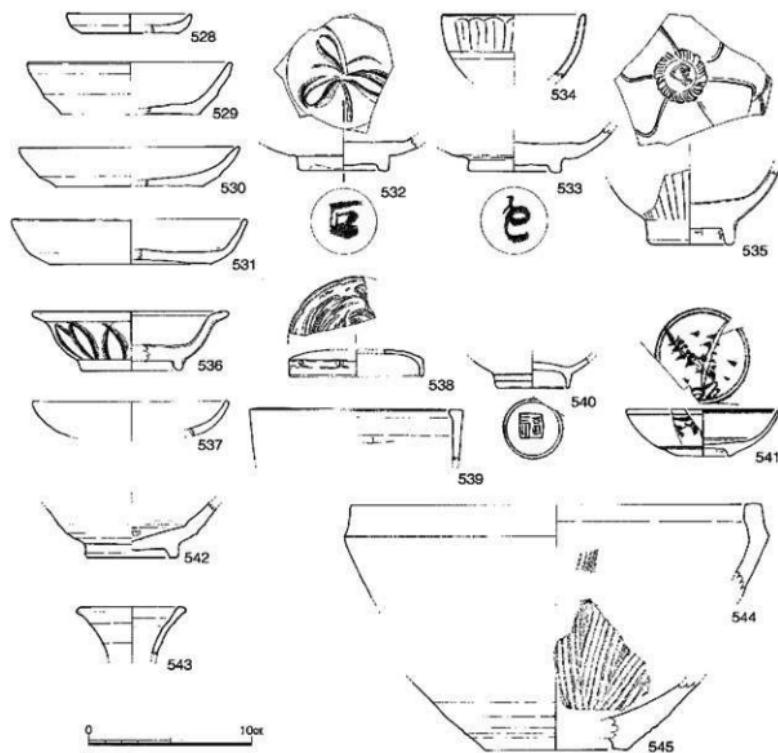


Fig.70 S K 432出土遺物実測図 (1/3)

湾する。538は青白磁の合子蓋である。539は白磁の香炉。540は青花碗E群である。見込みに圓盤、高台内には「福」の銘が描かれる。541は青花皿C群。542は朝鮮王朝の白磁碗である。内面に目跡がみられる。543は朝鮮王朝の綠褐釉陶器の瓶の口縁部である。544・545は無釉陶器の擂鉢である。口縁は内側に屈曲する。同一個体と考えられる。

出土遺物より16世紀代の遺構と考えられる。

S K 439はS K 439床面の東寄りで確認された土坑。長軸15m、短軸1.1m、深さはS K 432床面より約25cm。土師器、白磁D群、青磁、タイ産の陶器壺、瓦質土器の火鉢などの小片が出土した。

S K 432・S K 439とも井戸の可能性もある。

### SP557・SP562 (Fig.71、Ph.102・103)

N-25で確認した柱穴である。どちらにも扁平の礫が据えられ、中央に銭が付着していた。礫と礫の間は90cmである。SP557は南東側の柱穴で細長い掘方である。2つの柱穴の切り合いの可能性が高い。東側と西側に別の礫があり、銭が付着していた礫はその間にあった。SP562は北西側の柱穴で梢円形の掘方である。中央に銭が付着していた礫があり、北西寄りにもう一つ礫がある。

銭は礫に付着しており、重量のある柱を受けていたと考えられる。同じ建物を支えていたと考えられるが、同様の礫はほかに発見されなかった。失われたものか、はじめから存在しないのかは不明である。付図3にSP557とSP562を礎石とする建物復元案を示しておく。

同様な例として42次調査で検出された1139号遺構がある。隅丸長方形の地下室状土坑で、四隅のうち、3ヶ所に据えられた扁平礫の上に銭が置かれていた。

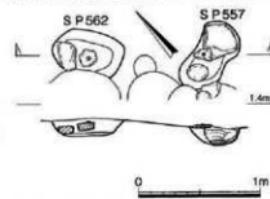
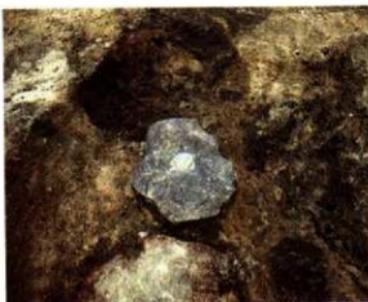


Fig.71 SP557・SP562実測図 (1/40)



Ph.102 SP557 (北西から)



Ph.103 SP562 (北西から)

### SK668 (Fig.72・73)

M・N-14・15で確認された梢円形土坑であり、北東側は発掘区外にのびる。短軸は1.1m、確認面から底面までの深さは45cmである。

出土遺物をFig.73に示す。546～553は土師器の小皿。548の内面屈曲部には指押さえが一周する。554～565は土師器の壊である。563は大内系の土師器。566は白磁皿E-2。567は白磁皿。朝鮮王朝産か。568は瓦質の火鉢である。3条の突帯があり、底部は3つの足が付く。口縁部から下18cmまでの破片で2段目の突帯がないものと、脚部から上20cmまでの2段目の突帯がある破片の2つの接合しない破片の復元であり、実測図は一番器高の低い場合の復元案である。このほか龍泉窯系青磁碗B類、瓦が出土している。

出土遺物から16世紀代の遺構と考えられる。

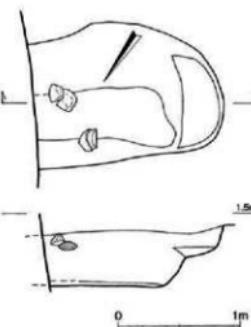


Fig.72 SK668実測図 (1/40)

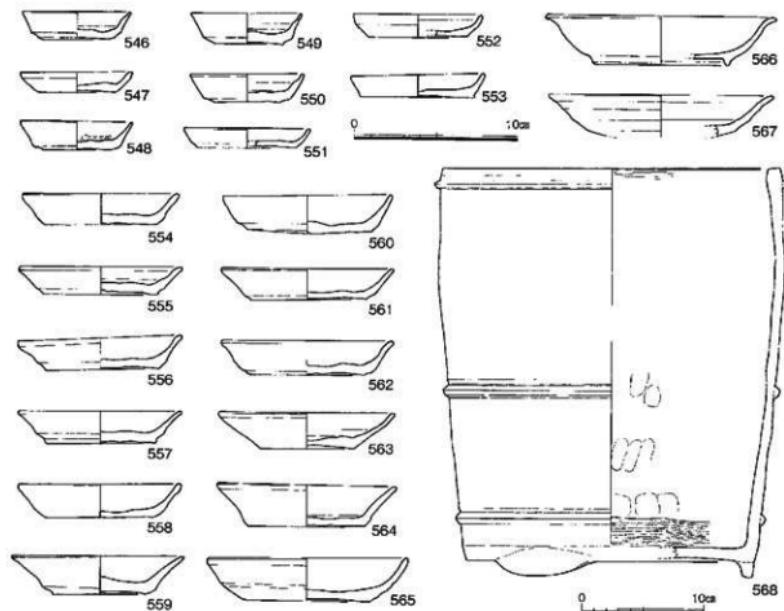


Fig.73 SK66B出土遺物実測図 (568:1/4、他:1/3)

#### SX691・SX751 (Fig.74)

~76、Ph.104・105)

S X 6 9 1 は L - 1 4 · 1 5  
で確認されたかわらけ溜まりである。

Fig.75に出土遺物の一部を示す。569~580は土器器の小皿、581~594は土器器の坏である。図示したものを含めて、「口徑、底径が計測可能な個体は小皿が56点、坏が69点あり、平均値は小皿の口徑8.1cm、器高14cm、坏の口徑12.6cm、器高2.6cmであった。595は束縛系の須志質の搾鉢。内面にススが付着している。596は瓦質の搾鉢である。このほか龍泉窯系青磁碗、白磁E唇の皿、青花

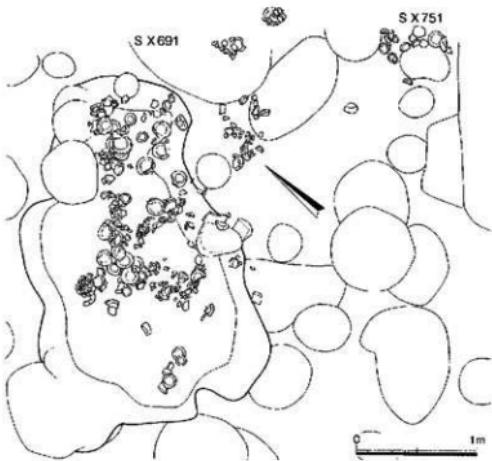


Fig.74 SX691・SX751実測図 (1/40)



Ph.104 S X691遺物出土状況1（北から）



Ph.105 S X691遺物出土状況2（南西から）

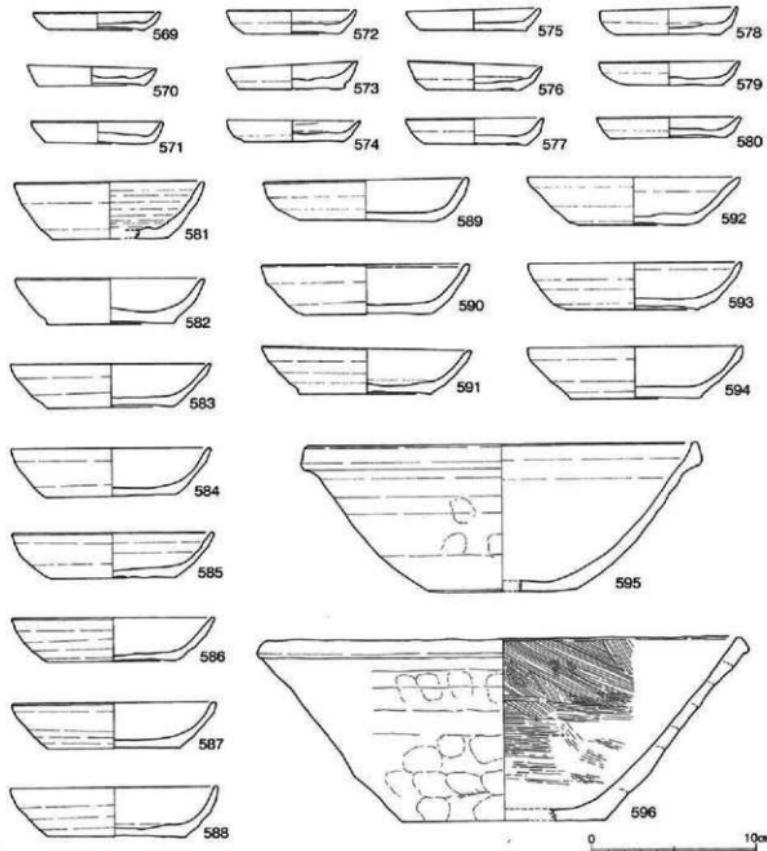


Fig.75 S X691出土遺物実測図 (1/3)

ⅢC群などが出土している。16世紀代の遺構か。

S X 751 は SX 691 の東側 M - 1 4 で確認されたかわらけ溜まりである。東側は発掘区外にのびる可能性がある。597~611は土師器の小皿、612~618は土師器の坏である。図示したものを含めて、口径、底径が計測可能な個体は小皿が21点、坏が7点あり、平均値は小皿の口径8.3cm、器高1.4cm、坏の口径12.5cm、器高2.7cmであった。

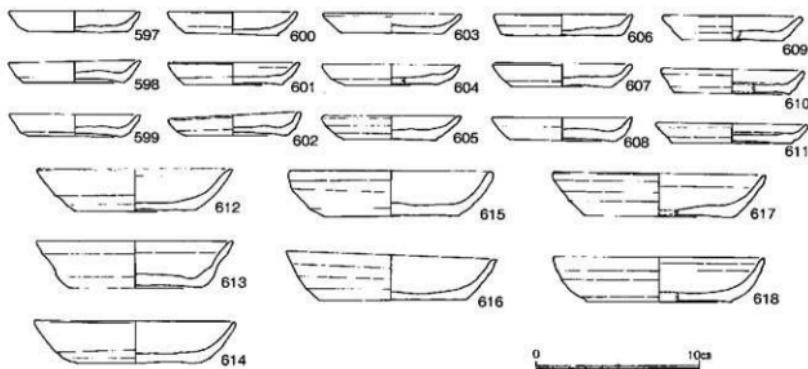


Fig.76 S X751出土遺物実測図 (1/3)

#### S D 741 (Fig.77~79, Pl.106)

C 区中央で確認された溝であり、南北とも調査区外にのびる。幅は南側で8.5m、北側で6.0mである。北側の西岸のプランがはっきりせず、不自然な形になった。深さ20~30cmと浅い。溝底で確認されたSD 742の上層としていいかもしれない。東寄りに礫の出上が多かった。

出土遺物をFig.78・79に示す。619~637は土師器の小皿である。638は土師器の脚付小皿。639・640は土師器の小坏。大内系。641~651は土師器の坏である。652は龍泉窯系青磁の小碗である。外面は邊介、口縁内外面に4条の沈線を入れる。653は龍泉窯系青磁統B類。見込みに印文花がある。高台内の釉を円形に搔き取る。654は龍泉窯系青磁B類。見込みは凸形に釉剥ぎし、印花を施す。外面は墨付まで施釉される。高台内に墨書がある。655は龍泉窯系青磁の皿。見込みに印文花、対面内部に片切彫による割花文を施す。656は龍泉窯系青磁の盤。内面にヘラ彫りが施される。657・658は白磁D群の皿。高台に抉り込みを入れる。657には「一」、658には「二」の墨書が高台内にある。659は白磁の碗。内面に陽印刻文がある。660は白磁D群の八角坏。抉り高台である。661は象嵌粉青沙器の壺。662・663は青花碗B類。664は五彩の碗。665は磁州窑白地鐵絵皿。666は象嵌粉青沙器の小碗。667・668は朝鮮王朝灰青陶器の皿。667には6ヶ所の砂目、668には5ヶ所の砂目が見込みにある。669は天日碗。淡灰色の胎土に暗茶色不透明釉がかかる。670は蒸入れ。黒褐色の胎土にやや白濁した暗茶色不透明釉がかかる。671は褐釉の壺。博多分類A群の陶器か。672は無釉陶器の長胴四耳壺。磁灶窯か。S E 4 8 2 の井筒内出土片と接合した。673は朝鮮王朝産の綠褐釉陶器の壺。肩部に小さな突起を一条巡らせる。674は瓦質の香炉。675は備前焼擂鉢。間焼編年IV B期。676は瓦



Fig.77 SD741実測図 (1/60)

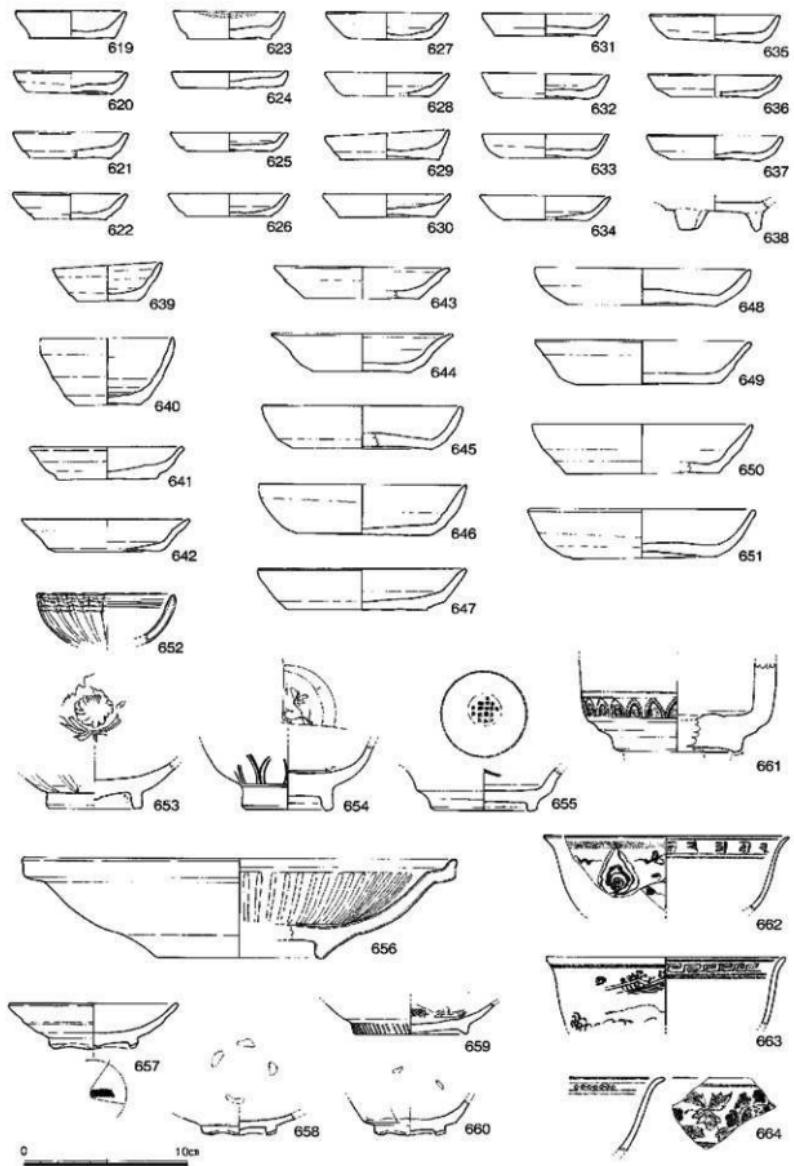


Fig.78 SD741出土遺物実測図1 (1/3)

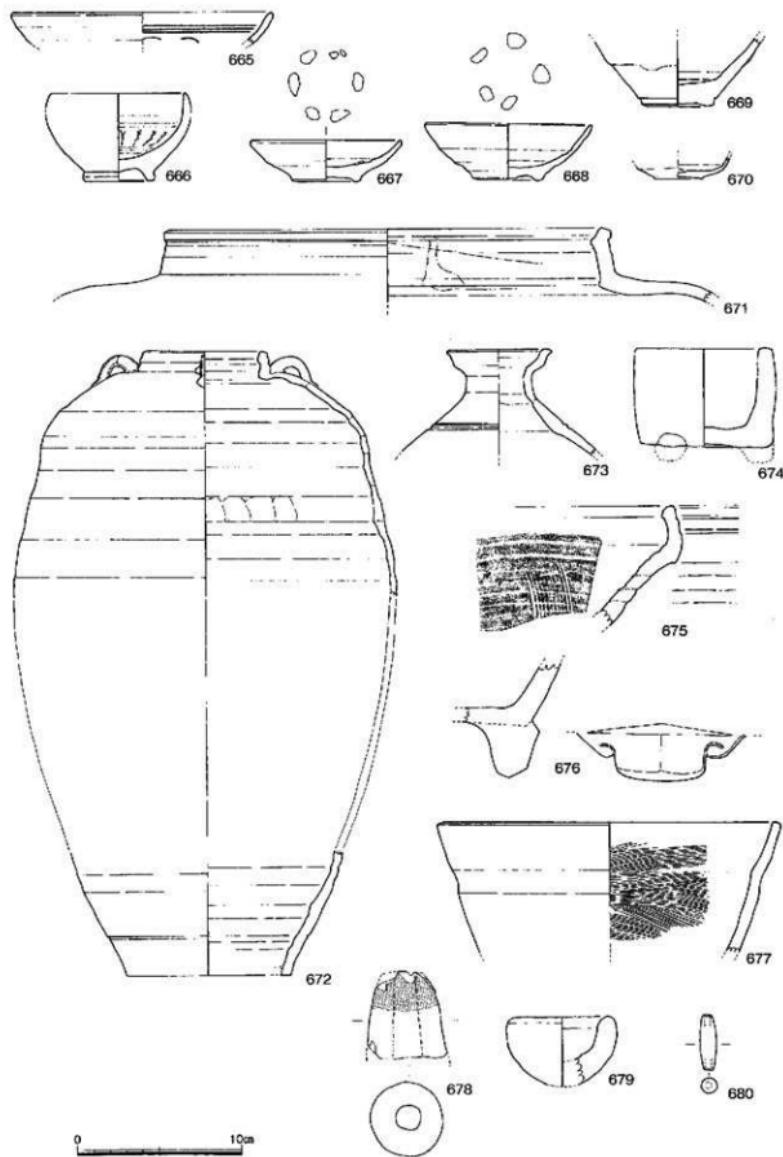


Fig.79 SD741出土遺物実測図2 (1/3)

質の火鉢の脚部。677は土鍋。内面はハケメ調整。外面はススが厚く付着する。678は輪の羽口。679は取瓶。内面に銅が付着している。680は管状土錘である。

出土遺物から15世紀中頃の遺構と考えられる。



Ph.106 SD741出土遺物 (約1/3)

**SD742 (Fig.80~82, Ph.107~109)**

C区中央付近で検出された溝である。SD741の底で確認された。前述のようにSD741の下層部とも考えられる。南北とも発掘区外にのびる。幅は5.1~5.7mである。深さは西側が深く90cm、東側が50cmでテラス状になる。中央のテラス部への立ち上がり部分に杭や横板などの護岸がみられる。また、東岸には石による護岸がなされている。

出土遺物をFig.81・82に示す。681~702は土師器の小皿である。682・687・696・700には油煙がみられる。695の底部には墨書きがある。703は土師器の高台付小皿である。704~727は土師器の杯である。715・724には油煙が付着する。722・726・727は大内系の土師器。728は大内系土師器の大杯である。729~733は龍泉窯系青磁碗である。729はB類。見込みに花文を印花する。高台内の袖を



Ph.107 SD742 (南東から)



Ph.108 SD742北側 (西から)



Ph.109 SD742北側東岸 (西から)



Fig.80 SD742実測図 (1/50)

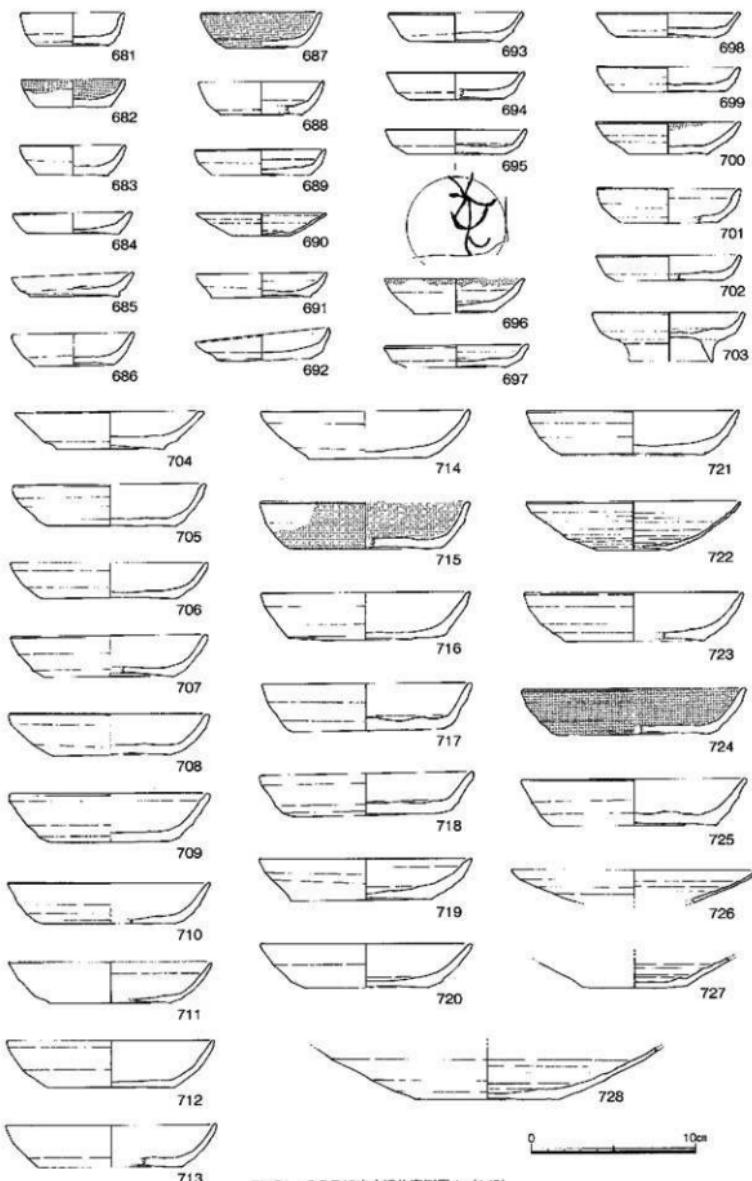


Fig.81 S D742出土遺物実測図 1 (1/3)

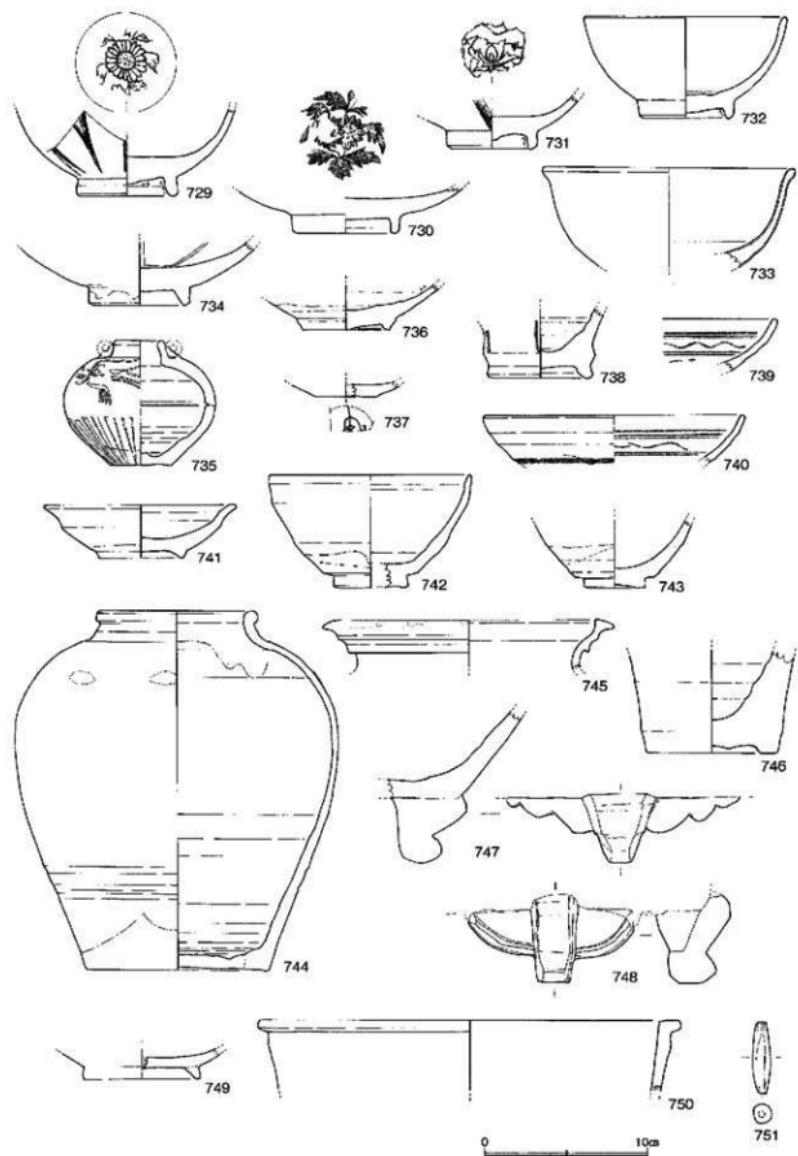


Fig.82 SD742出土遺物実測図2 (1/3)

輪状に搔き取る。730・731は内面に花文の印花がある。外面は高台の脚の内側途中まで釉がかかる。732はE類。外面の釉は高台脚の内側までかかる。733はD類。734は青磁の碗。内面に6本放射状に割線を入れる。外面の釉は高台途中までかかる。735は青磁の双耳小壺。精良な軟陶質の素地に黄味がかった半透明釉がかかる。体部中位で型打ち成形した上下2片を接合する。上半部に陽印刻を施し、下半はヘラ彫を施す。SE482出土の破片と接合した。736は白磁の碗。見込みと外面下半は露胎である。737は白磁平底皿である。底部に墨書がある。738は白磁の壺。外面に片切形による割線が入る。内面と底部露胎。739・740は磁州窯の白磁鉄絵皿。釉下に化粧掛けする。体外面下半は黒釉を施す。741は灰青陶器の皿。朝鮮王朝産か。742・743は天日碗。742は粗い灰色の胎上に黒色不透明釉がかかり、茶色が禾目状に入る。SD741、SE482の破片と接合した。743は灰褐色のやや粗い胎上に暗茶色の不透明釉がかかる。744は褐釉陶器の壺。肩部に目跡が付く。磁灶窯か。745は褐釉陶器甕。朝鮮王朝産か。746は褐釉陶器瓶。朝鮮王朝産か。747・748は瓦質の火鉢の脚部。749は須惠質の碗。750は土鍋。751は管状土錐。

出土遺物から15世紀前半頃の遺構と考えられる。



729



730



731



735



741



741



739



739



742



740



740

Ph.110 SD742出土遺物 (約1/3)

### 3面下の遺物 (Fig.83, Ph.111)

A・B区の北側では、第3面の遺構面より下からも遺物が出土する。特にB区北側からは土器・陶器・木製品・石製品などが多数出土した。木製品は箸や下駄、折敷、部材などが出土しており、湿地に不要品を投げ込んで埋め立てたものである。SA 2 3 4 北側の埋立より一段階古いと考えられる。

Fig.83に出土した土器・陶磁器を示す。752は京都系の土師器小皿。753は大内系の土師器壺。754は龍泉窯系青磁碗B類。外面の細蓮弁文はヘラ状工具で細い籠蓮弁にする。高台内は円形に釉を掛け取り、墨書きされる。755は白磁皿D群。高台を4ヶ所抉り込む。見込みに4ヶ所の目跡。高台内に墨書き「一」がみられる。756はベトナム産の白磁碗。内面には陰陽刻文、外面にはヘラ彫りによる蓮弁文を施す。深い黄緑がかった透明釉をかける。見込みに目跡がある。757は象嵌粉青沙器の小壺。758は青花碗E群。759はベトナム産の白磁鉢。口縁下に2条の沈線を巡らせ、その下にヘラで蓮弁を作る。やや黄色味がかった透明釉をかける。内底には目跡がある。外底には鉄泥を塗っている。破面には漆巻の痕跡がある。760は朝鮮王朝の掲釉陶器壺である。752・758と759の破片の一部がA区3面下の遺物。

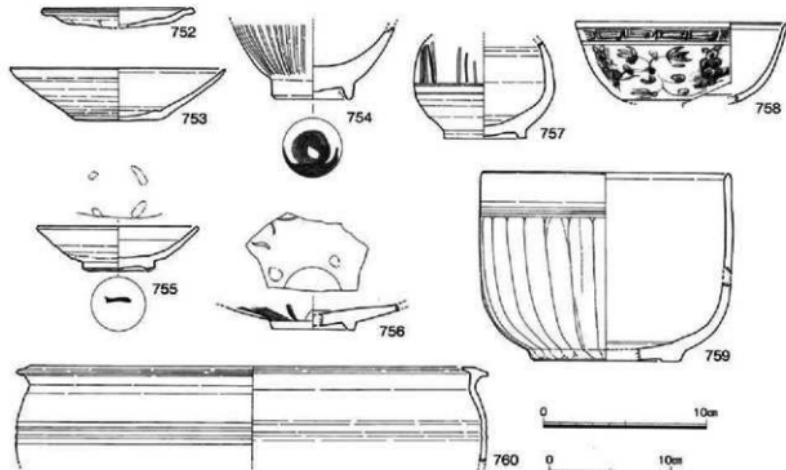
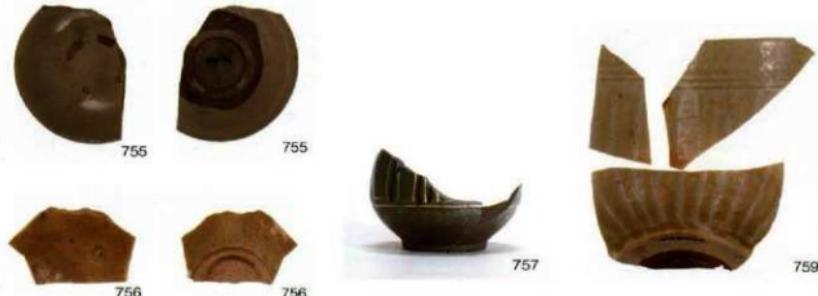


Fig.83 3面下の遺物実測図 (760:1/4, 他:1/3)



Ph.111 3面下の出土遺物 (約1/3)

## 5. その他の出土遺物

最後にこれまでに触れた遺構以外の出土遺物と木製品、石製品、金属製品、ガラス製品などを説明する。出土遺構、出土位置は図中に示した。

### (1) 挿入土器 (Fig.84)

761～775は挿入土器である。761～773は精良な胎土で、ロクロ水挽きにより器壁が薄く作られた。大内系といわれている上師器。761～764が小皿、765～767が小壺、768～773が壺である。小皿には体部から口縁まで直線的なもの（761～763）と口縁部が外反するもの（764）がみられた。小壺には口縁をやや内湾させるもの（765）、体部が底部から垂直に立ち上がるもの（766）、底縁を高台状につくり、口縁を内側に折り曲げるもの（767）がみられる。壺には底部が大きく口縁がやや内湾するもの（768～770）と体部が小さい底部から外側上方に直線にのびるもの（771～773）がある。SK 594・SK 326と大内系の土師器がまとまって出土する遺構がある。774は京都系土師器か。白っぽい淡褐色の胎土。口唇部を内側に折り曲げる。口縁部横なで、体部下半は指押さえ。775は楠葉型の瓦器碗である。内面のミガキは非常に丁寧に施している。

### (2) 龍泉窯系青磁 (Fig.85, Pl.112)

776～798は龍泉窯系青磁である。776～781は碗B類。776は見込みに割花文を施す。高台内の釉は輪状に搔き取る。777は見込みに陽印刻文が施される。高台内側まで釉がかかる。778は見込み中央に円の陽印刻文、周囲はヘラ状工具による割花文が施される。高台内面途中まで施釉される。779は見込みに印花文が施される。高台内の釉は輪状に搔き取られる。780は見込みに沈墨紙を造らせる。外底は露胎だが、一部、高台内まで釉がかかる。781は見込みの釉を円形に搔き取り印花を施す。782は碗C類。見込みに印花が施される。高台内の釉は凸形に剥ぎ取られ、墨書きがなされる。783は見込みに印花を施す。高台外周まで施釉される。784・785はE類。784は高台外側まで施釉されている。785は見込みに梵字の印花がなされる。高台内側途中まで施釉され、豈付の釉は雑に搔き取られる。底面に漆緋の痕跡がある。786は口縁外反のD類。高台内の釉を輪状に搔き取る。787は高台内側まで施釉されている。788は高台内の釉を輪状に雑に拭き取る。789は高台外周まで施釉し見込みの釉を凸形に搔き取る。790・791は壺。790は見込みに印花文が施される。高台外周まで釉がかかる。

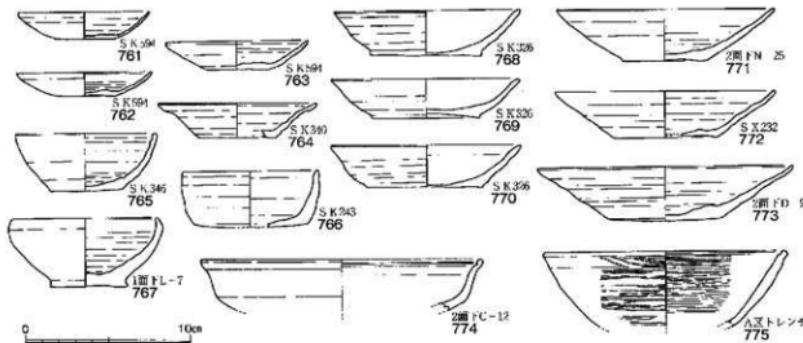


Fig.84 挿入土器実測図 (1/3)

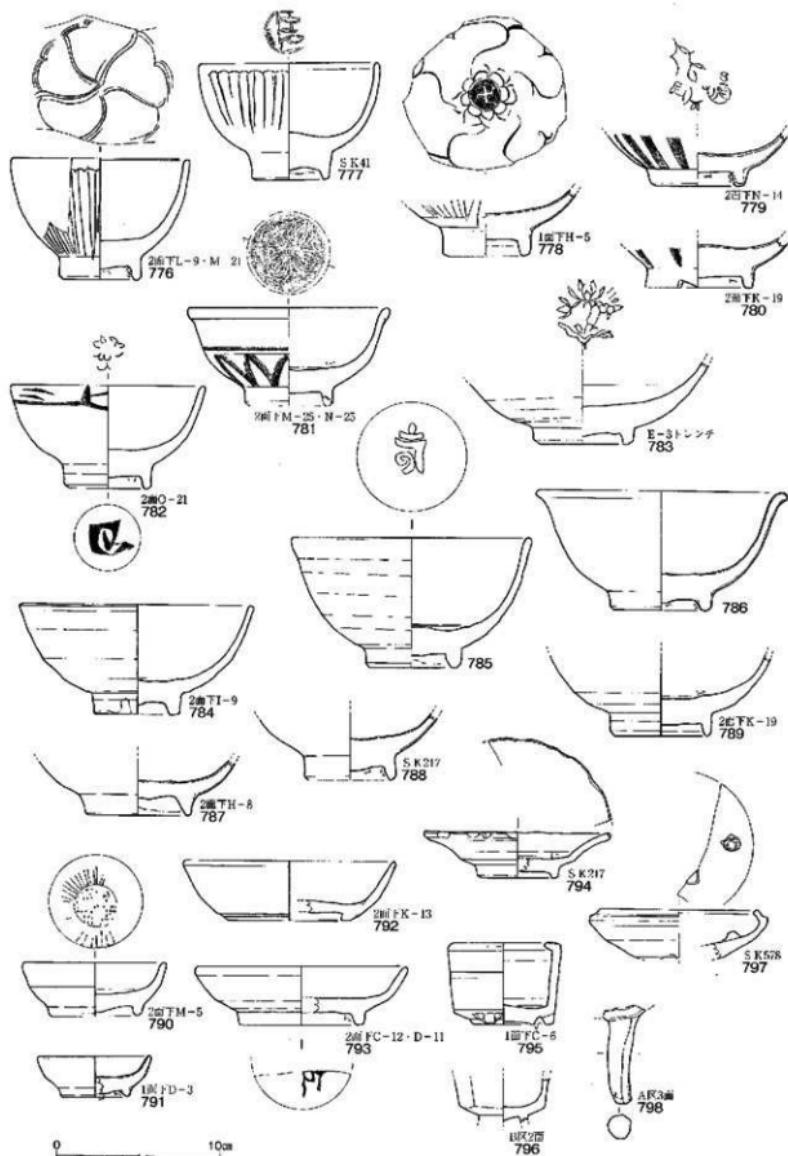


Fig.85 離泉窯系青磁実測図 (1/3)



776



777



781



776



777



781



782



785



784



782



785



786



782



789



790



794



795



797



798

图112 龙泉窑青瓷 (约1/3)

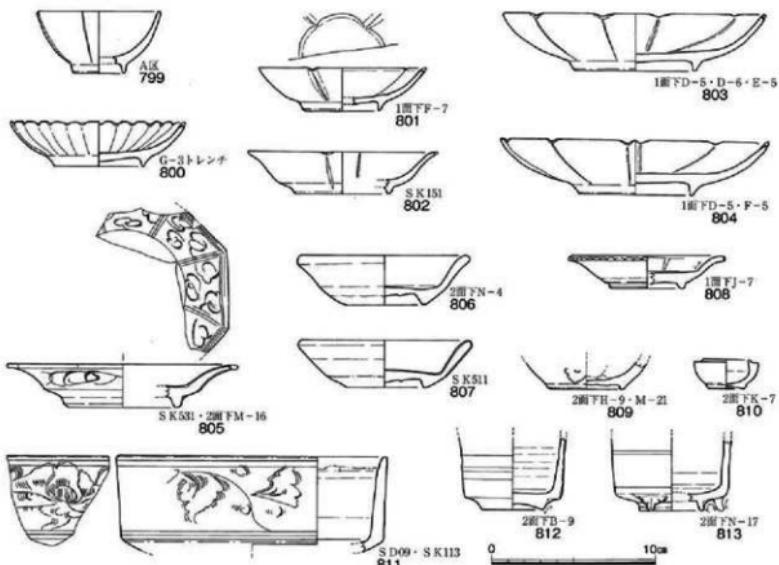


Fig.86 景德鎮窯系青磁・その他の中国産青磁実測図 (1/3)



Ph.113 景德鎮窯系青磁・その他の中国産青磁 (約1/3)

791は高台内の釉を輪状に搔き取る。792・793は直口皿。釉は高台内側までかかる。793の高台内には墨書がある。794は稜花皿。見込みの釉を円形に搔き取る。795・796は香炉。796は体部を八角形にする。797は合子の身。798は香炉の脚部か。胸部先端露胎。

(3) 景徳鎮窯系青磁・その他の中国産青磁 (Fig.86, Ph.113)

799～813は龍泉窯系以外の中国産青磁。799～805は景德鎮窯系青磁。799は小碗。体部外向からヘラを押して輪花とする。高台内は透明釉で「裏白」とする。800は菊皿。801～804は輪花皿。801は口縁が内渦し、802は外反する。802～804の高台内は透明釉で「裏白」とする。805は八角皿。806・807は基筒底の皿。下半部は露胎。やや軟陶質の胎土に黄色味の強い緑黄色透明釉を厚くかける。808は輪花皿。内面に線刻文がある。見込みと体部下半露胎。809は小皿。型作りで内面に指痕がある。

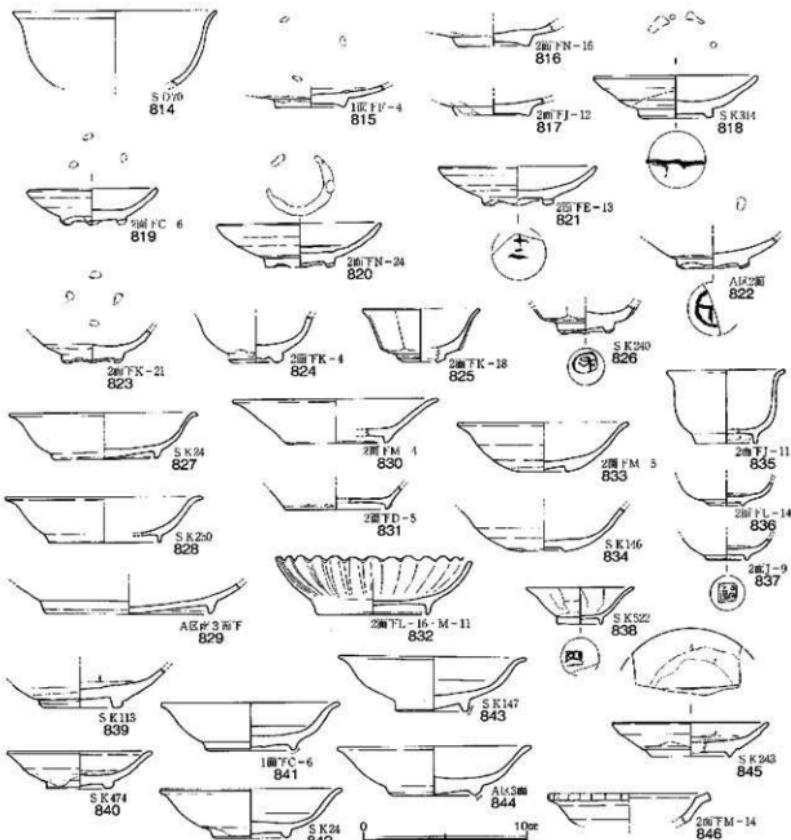


Fig.87 中国産白磁実測図 (1/3)



Ph.114 中国産白磁（約1/3）

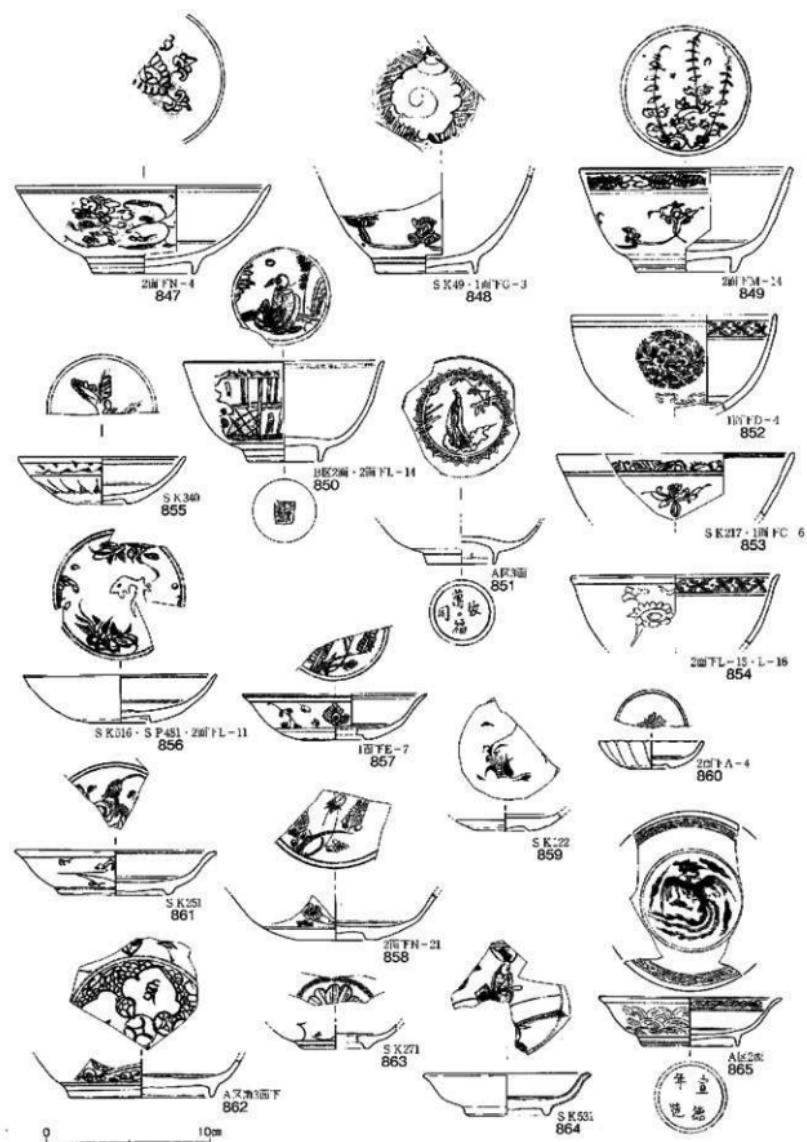


Fig.88 景德鎮窯系青花瓷測圖 1 (1/3)

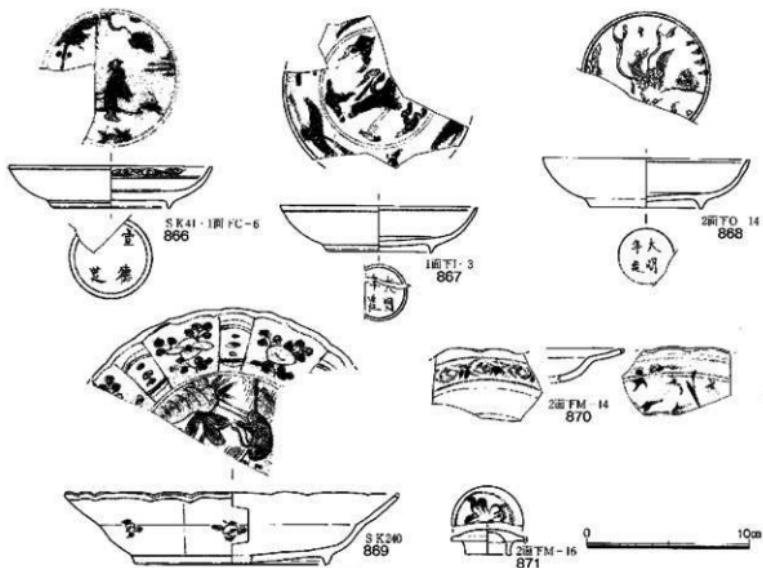


Fig.89 景德鎮窯系青花実測図 2 (1/3)

残る。外面に陽印刻文がある。810は合子身である。811は鉢、もしくは香炉か。外面に割花文を施す。腰折部まで淡青緑色の透明釉がかかる。口縁部は釉剥ぎする。812・813は香炉。

#### (4) 中国産白磁 (Fig.87, Ph.114)

814~846は中国産白磁。814~826はD群。814は口縁が外反する碗で型打ちによる成形と思われる。815~817は型打ち成形の皿。818~823は皿で、819~823は挟り高台である。818・821・822の高台内には墨書がある。824は小杯。825・826は八角杯。826は挟り高台で、内側には墨書がある。827~837はE群。827~829はE-2、832はE-4の菊皿である。833・834はE-3の葵筋底皿であるが口縁は外反する。830・831は杯。835~837は小杯。笠付の釉を搔き取る。836・837は見込みの釉を輪状に搔き取る。837の高台内には「福」の銘。838は型打ち成形の小杯。外面に指押さえの痕跡が残る。高台内に墨書がある。839は碗。見込みと体部下部は露胎。840は皿。胎土・釉調等はD群と類似する。見込みの釉を輪状に搔き取る。841~844は外反口縁の皿。高台内は露胎。841~843は同タイプ。845は皿で、見込みと体部下半は露胎。釉下に白化粧する。見込みに焼成前のヘラ記号がある。846は輪花皿。

#### (5) 景德鎮窯系青花 (Fig.88・89, Ph.115)

847~871は景德鎮窯系の青花である。847~854は碗である。847は碗C群。848・849は碗D群。外面はアラベスク文で見込みはそれぞれ法螺貝と梅月文を描く。850・851は碗E群。851の高台内に「萬福攸同」の銘がある。852は外面に花丸文、口縁内部に四方棒文を描く。854は外面に花卉文を線刻する。855~870は皿である。855~860は皿C群。856は見込みに魚文を貼り付け、周囲に水草を描く。魚文は磁上に鉄釉を塗っている。外面は無文。857・858は口縁が外反する。内間に花鳥文を描く。



849



850



851



860



849



850



851



864



865



865



866



866



867



867



869



868



868



869

Ph.115 景德鎮窯系青花 (約1/3)

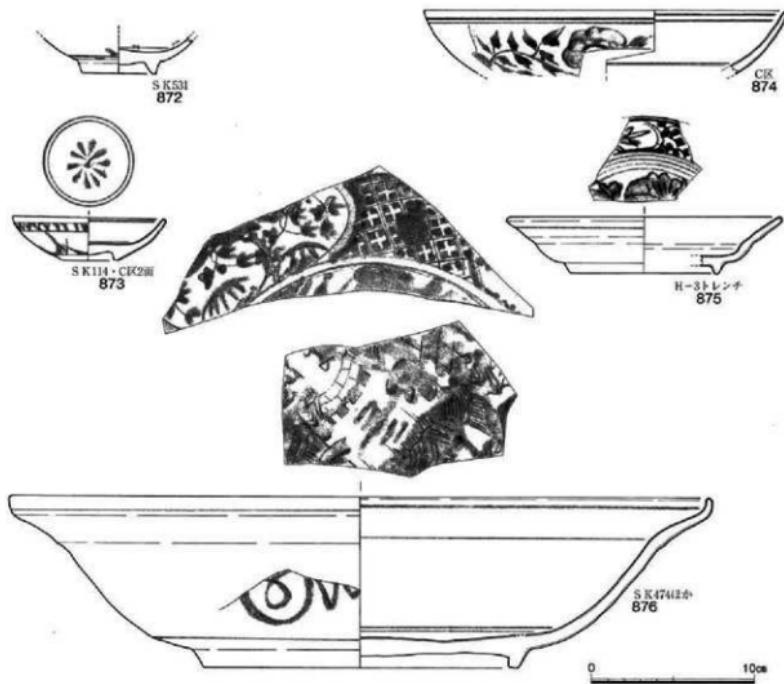


Fig.90 津州窯系青花変測図 (1/3)



Ph.116 津州窯系青花 (約1/3)

860は基筒底の輪花小皿で外面は口縁の輪花に合わせて縱に線刻する。861・862は皿B 1群である。861は内面に玉取獅子を描く。862は見込みに梵字とアラベスク文、外面に唐草文を描く。864・865は皿B 2群である。865の外面には波濤文を線刻する。866～868は皿E群。866は高台内に「宣徳年造」の銘がある。867は高台内に「大明年造」の銘がある。868の外面体部は青磁釉がかかる。高台内に「大明年造」の銘。869は芙蓉手の棱花皿である。870は折縁の棱花皿。871は小壺蓋である。

#### (6) 漳州窯系青花 (Fig.90, Ph.116)

872～876は漳州窯系の青花である。872は碗。高台は露胎で見込みの釉は輪状に搔き取る。873は皿C群。見込みに菊花文、外面には波濤文と芭蕉葉文を描く。底部に砂粒が若干付着している。874は口縁が内溝する大皿。875は皿F群。疊付に砂粒が若干付着。876は盤。口縁は真上につまみ上げられている。疊付の釉は搔き取り、高台内側に砂粒が付着する。

#### (7) 青白磁・青釉・綠釉 (Fig.91, Ph.117)

877～880は青白磁である。877は皿。内面に陽印刻文を施す。878は木瓜形の小皿である。879は輪花皿。内外面ヘラ彫りにより施文する。880は香炉である。881は綠釉の盤である。淡緑色不透明釉がかかる。磁州窯系か。882は青釉陶器の小皿である。高台内に墨書がある。883は磁灶窯系の綠釉陶器盤である。884は三彩の蓋である。口縁部に線刻文を施す。内面は黄・茶・緑に発色する。外面は綠釉。華南彩か。

#### (8) 朝鮮王朝陶磁 (Fig.92・93, Ph.118)

885～903は朝鮮王朝の陶磁器である。885～887は白磁の皿。885は高台が低い。見込みに4ヶ

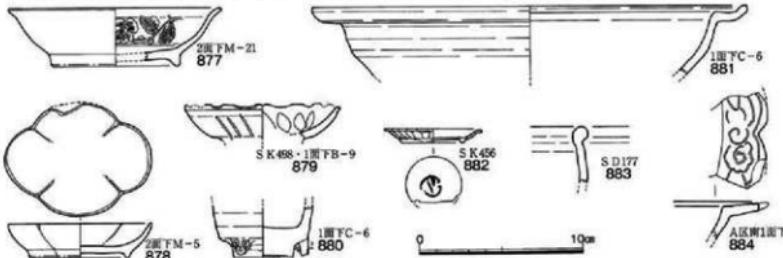


Fig.91 青白磁・青釉・綠釉実測図 (1/3)



Ph.117 青白磁・青釉・綠釉 (約1/3)

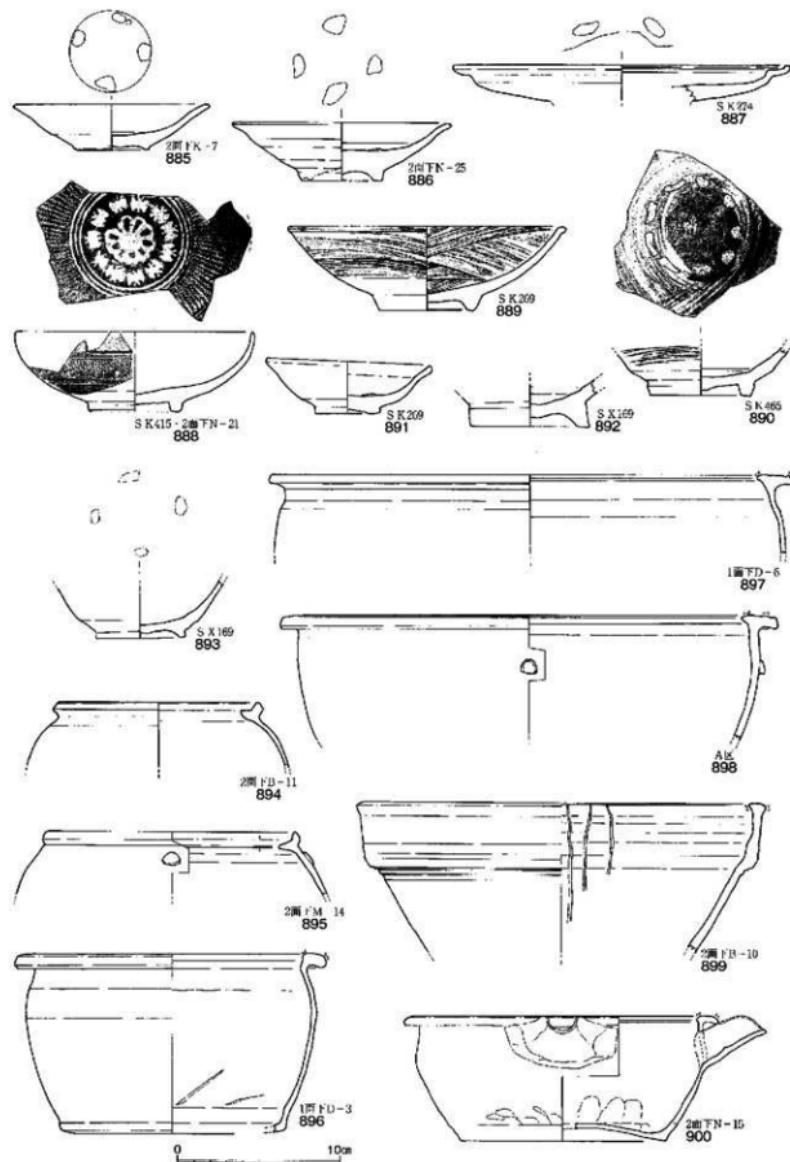


Fig.92 朝鮮王朝陶磁測量圖 1 (1/3)

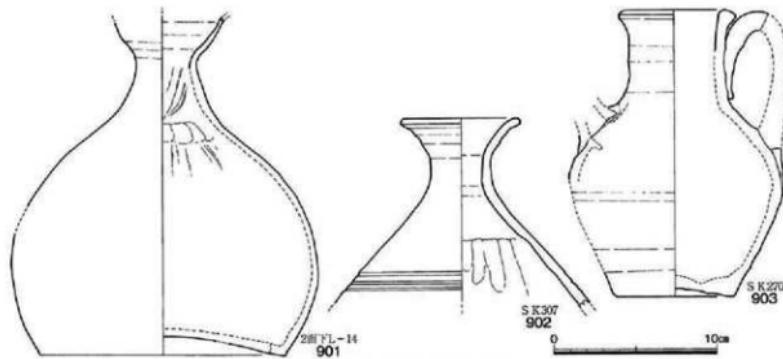


Fig.93 朝鮮王朝陶磁実測圖 2 (1/3)



887



889



888



900



901



903

Ph.118 朝鮮王朝陶磁 (901・903: 約1/4、他: 約1/3)

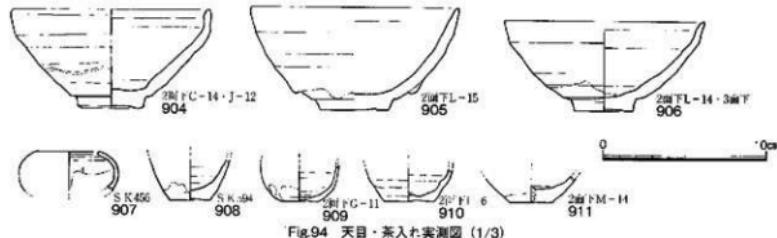


Fig.94 天目・茶入れ実測図 (1/3)

所の砂目がある。886は底部が厚く、高台内はアーチ状に削る。見込みには4ヶ所の胎上日がある。887は先端をつまみあげた折縁口縁である。内面には砂目の跡がある。888～890は粉青沙器。881は印花象嵌の碗。889は刷毛日の碗。890も刷毛日の碗。見込みに9ヶ所の日跡。891～893は灰青陶器の碗。891は見込みに4ヶ所の砂目がある。892の疊付は砂が付着。893は見込みに4ヶ所の胎上日がある。894・895は緑褐釉陶器の壺。口縁部断面「Y」字となり、受部を瘤刺さる。895の頸部下にはボタン状の貼り付けがある。896は緑褐釉陶器の鉢。内面に青海波のあて具痕が若干残る。897は緑褐釉陶器の壺。内面に青海波のあて具痕が残る。898は褐釉陶器の鉢。口縁下にボタン状の貼り付けがある。内面に青海波のあて具痕が若干残る。899は褐釉陶器の壺。内面に1本ずつへらで描り目を入れる。900は緑褐釉陶器の片口鉢。901は緑褐釉の壺。902は褐釉陶器の壺。肩部に沈線が3条巡る。903は緑褐釉陶器の水注である。

#### (9) 天目・茶入れ (Fig.91)

904～906は天目碗。904は口縁部を屈曲させ、上に引き上げる。胎土は灰色でかなり細かな砂粒を含む。黒茶褐色の不透明釉がかかる。釉下に鉄化粧する。内面下半分は使用のためか傷が多く入っている。905は口縁部が繊やかに内湾している。やや粗い淡灰白色の胎土に黒色不透明釉がかかる。906の口縁は屈折して、弱く外反する。淡褐色の胎土に黒色不透明釉がかかる。釉上に細かな茶色の斑点がうかぶ。907～911は茶入れ。907はやや軽い暗灰色の胎土に暗黒茶色の不透明釉がかかる。瀬戸・美濃

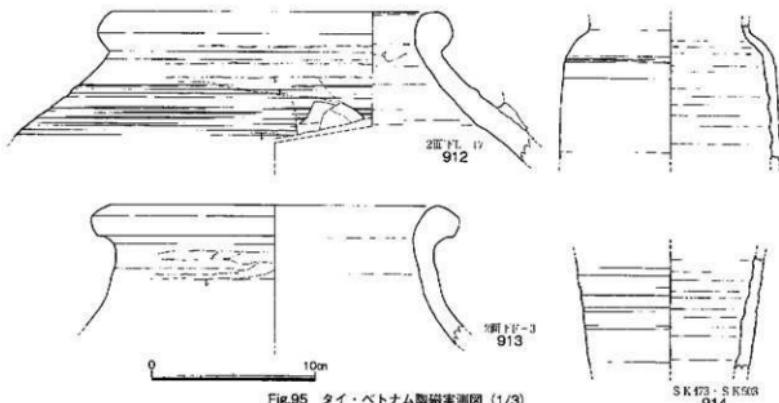


Fig.95 タイ・ベトナム陶磁実測図 (1/3)

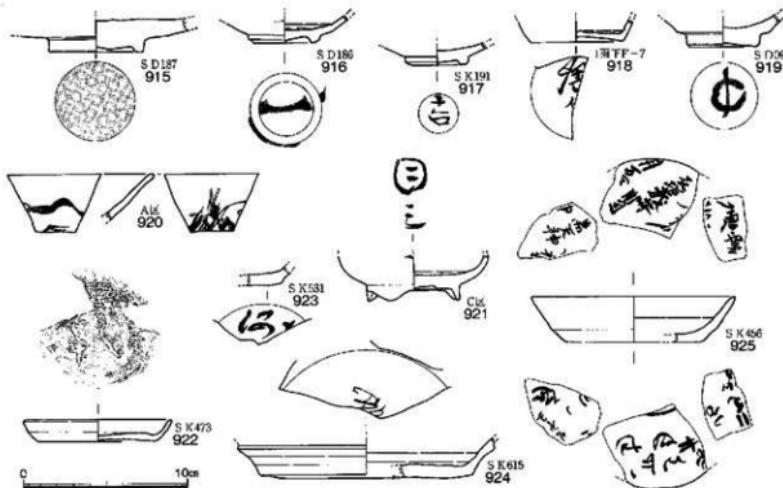


Fig.96 墨書き土器実測図 (1/3)

窯産か。908は精良な灰褐色の胎土に黒色不透明釉をかける。底部に糸切り痕が残る。909は精良な暗赤褐色の胎土に黒色不透明釉がかかる。底部に糸切り痕残る。910はきめの細かい灰色の胎土に黒色不透明釉がかかる。底部に糸切り痕が残る。国産品か。911はやや粗い淡灰褐色の胎土に黒褐色不透明釉がかかる。底部に糸切り痕が残る。瀬戸・美濃窯産と思われる。

#### (10) タイ・ベトナム陶磁 (Fig.95)

912はタイ産の黄褐色陶器の四耳壺。913はタイ産の黄褐色陶器の壺。914はベトナム産の無釉焼結陶器の長胴壺である。

#### (11) 墨書き土器 (Fig.96)

915～921は墨書き陶磁器。915は龍泉窯系青磁の皿。高台内墨塗り。硯として使用されたものか。916は白磁皿。博多分類で高台付皿II類。見込みの釉を輪渦に描き取る。917は白磁D群の皿。918は褐釉陶器の壺か。919・920は陶器の碗。921染付の香炉。922はヘラ書きのある土師器である。923～925は墨書きのある土師器。

#### (12) 土製品 (Fig.97)

926～957は上製品である。926～939は土錠。940はミニチュアの容器か。941は支脚か。942～951は土錠。大小と3タイプある。952は陶製の般若面。953は素焼きの狐面である。954は面型。955～957は素焼き人形である。957の底には墨書きがある。

#### (13) 木製品 (Fig.98～105, Pl.120)

958～985は漆椀である。内面赤漆、外面黒漆塗りのもの (958～961・965・966・972・973・975・962～964・967・969・974・976・979～983・985)、全面赤漆のもの (968・970・971)、体部赤漆、高台黒漆のもの (977・978・984) がある。文様は黒漆の上に赤漆でなされるが、961は金色でなされる。971は暗赤色の漆の上に朱色の漆で文様を描いている。958の家紋は4ヶ所、961は3ヶ

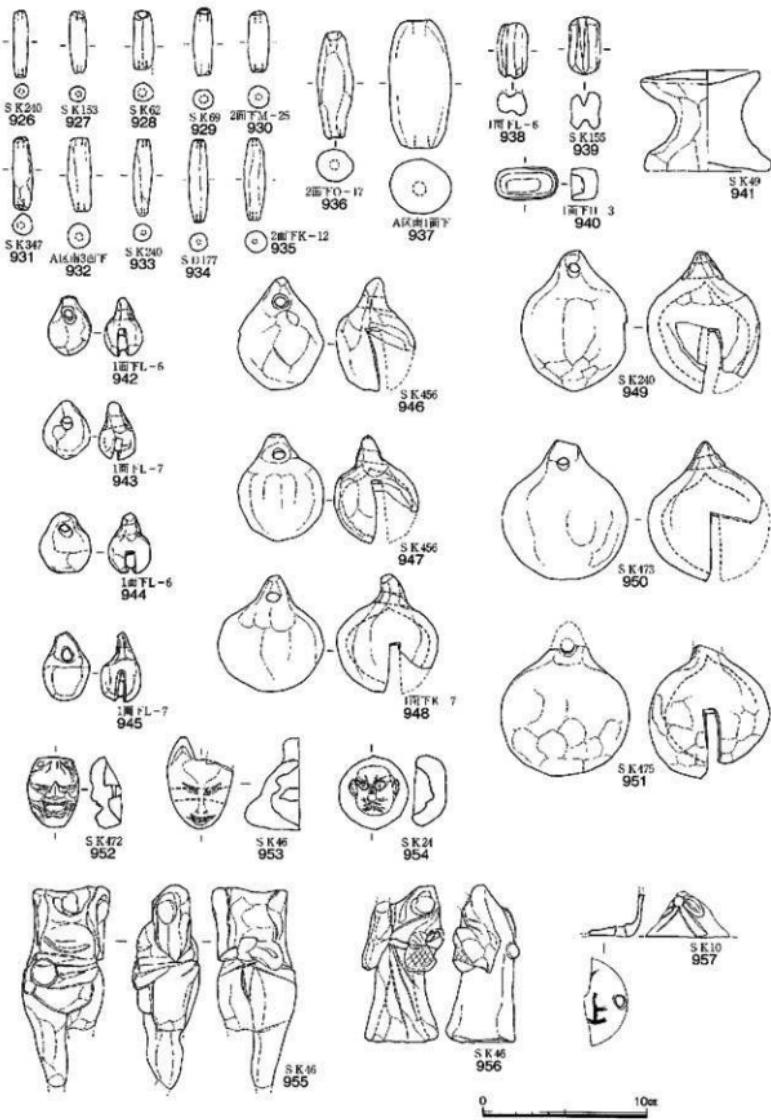


Fig.97 土製品実測図 (1/3)

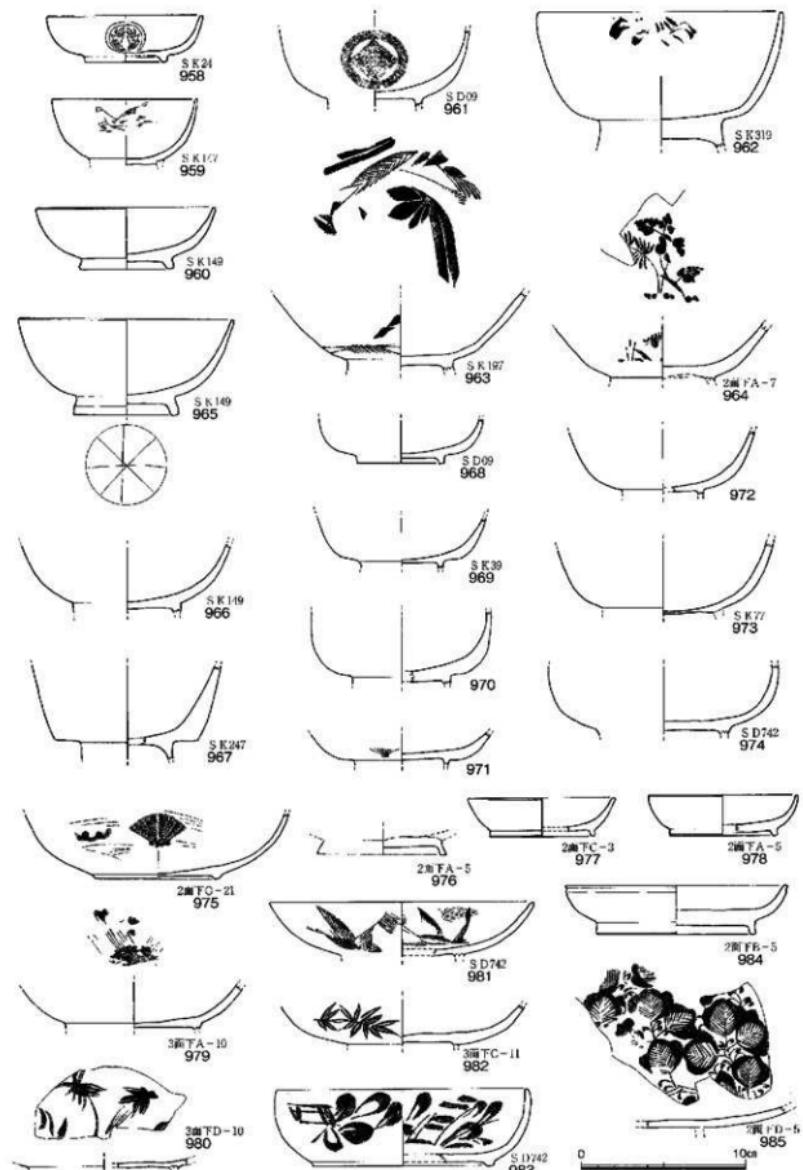


Fig.98 木製品実測図 1 (1/3)



958



959



963



961



962



964



965



975



971



981



981



978



982



980



985

Pl.119 木製品1 (約1/3)

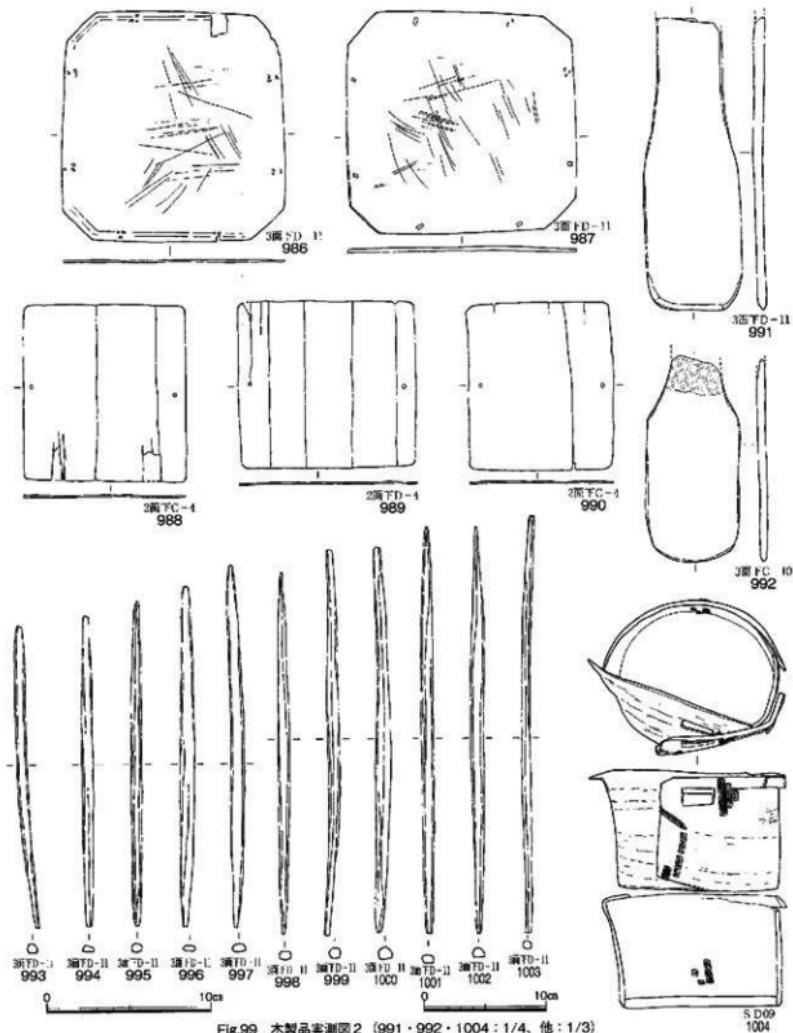


Fig.99 木製品実測図2 (991・992・1004:1/4、他:1/3)

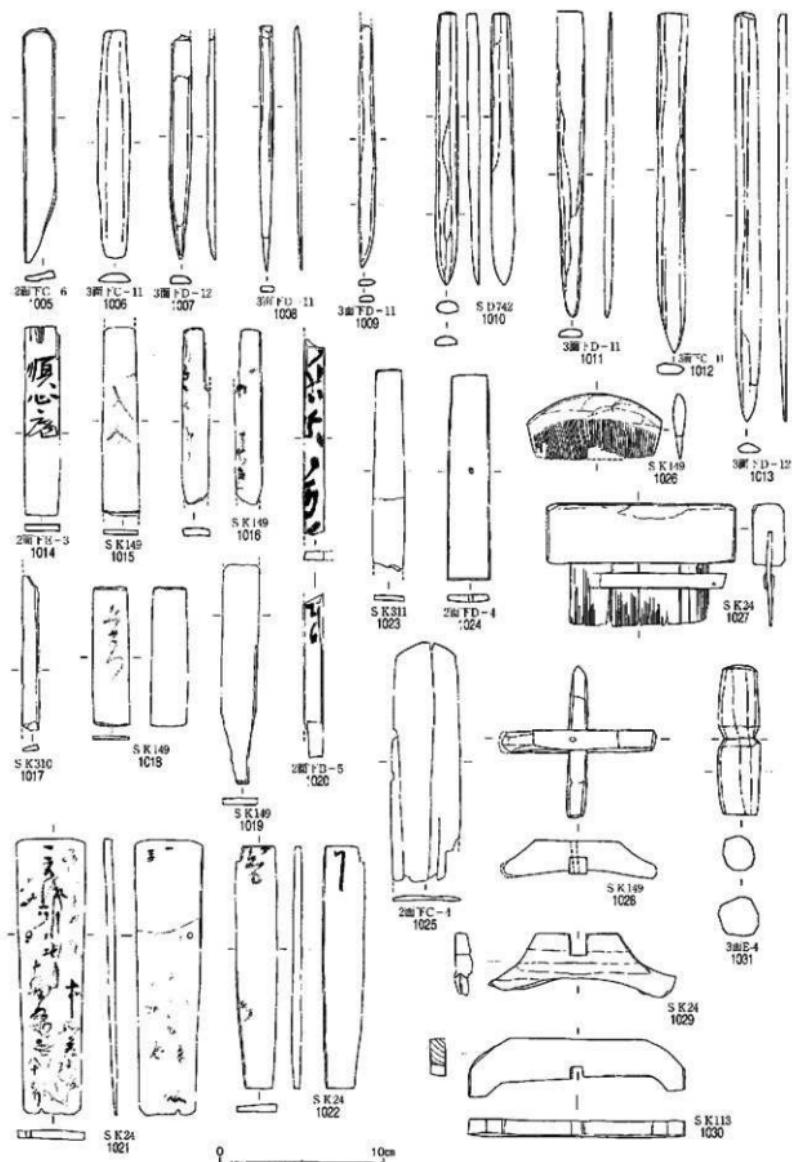


Fig.100 木製品実測図3 (1/3)

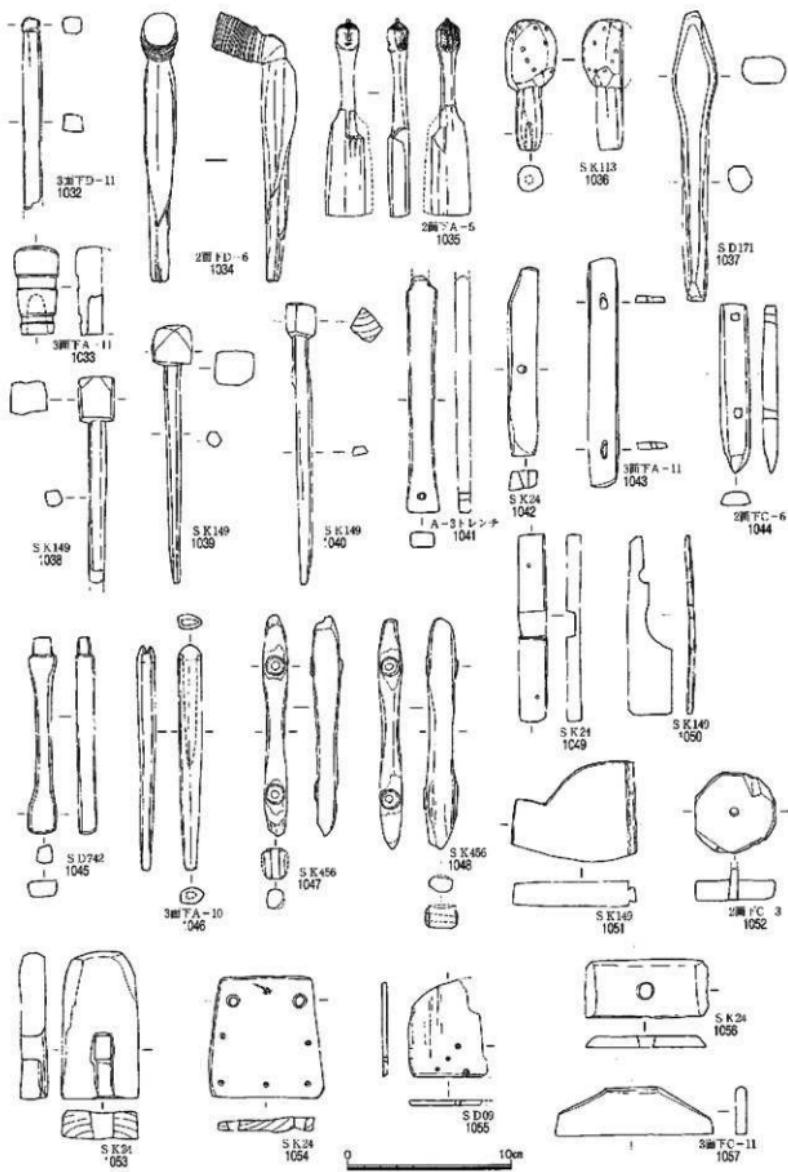


Fig.101 木製品実測図 4 (1/3)

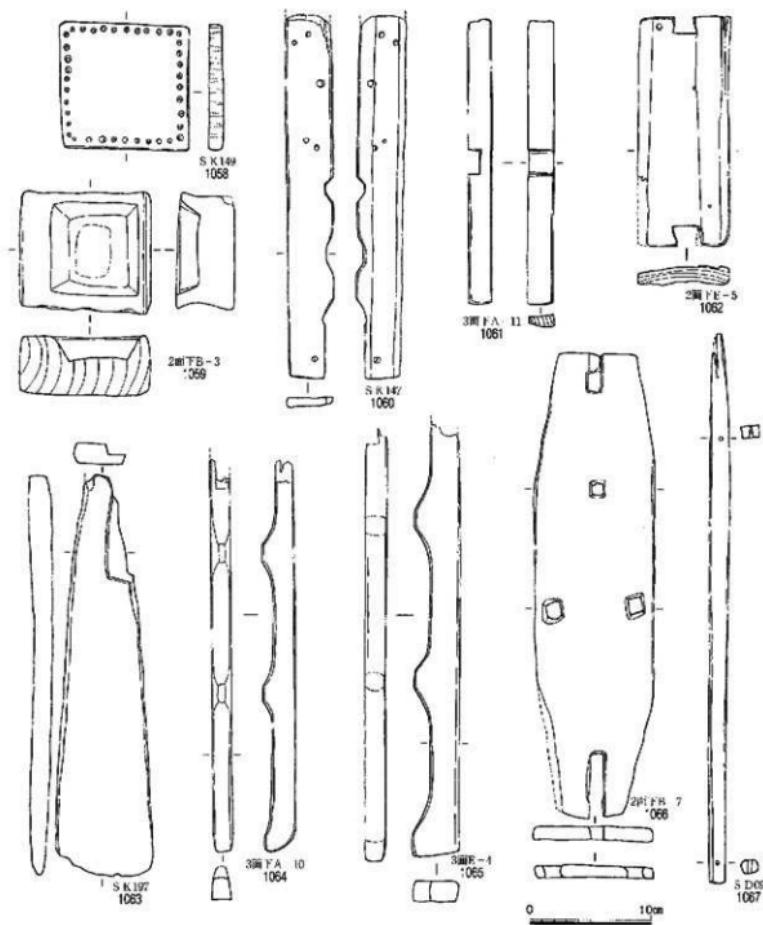


Fig.102 木製品実測図 5 (1/4)

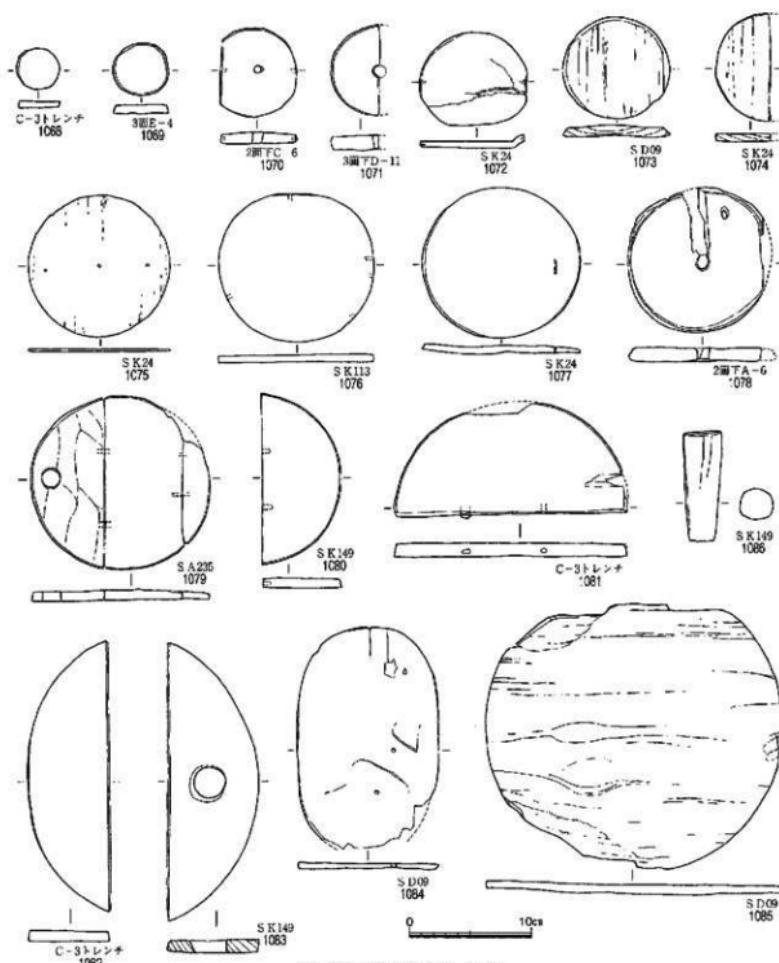


Fig.103 木製品実測図 6 (1/4)

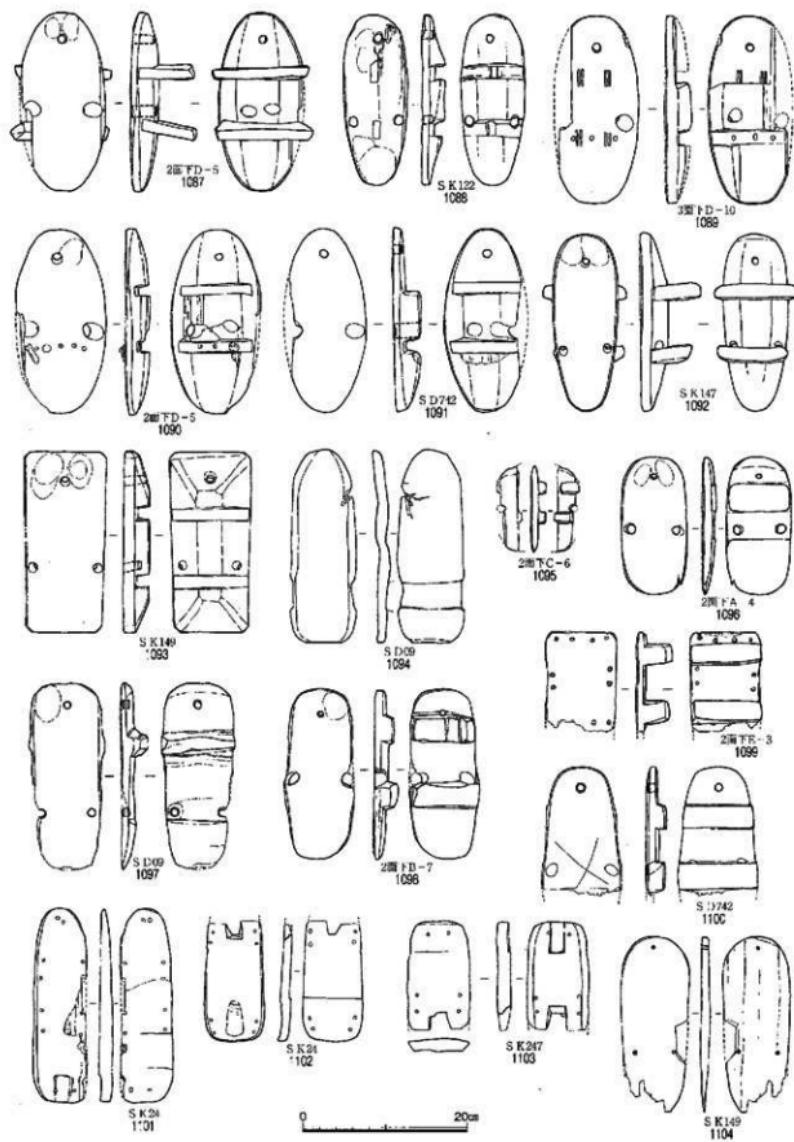


Fig.104 木製品実測図7 (1/6)

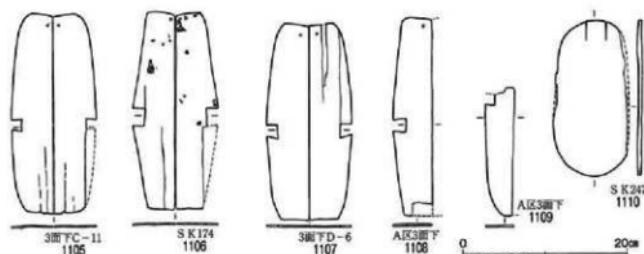


Fig.105 木製品実測図 8 (1/6)



Ph.120 木製品 2 (約1/4)

所に施される。965の高台内には漆を塗布した後、線刻が入れられている。985には外面にも内面と同様な文様がある。

986~990は折敷である。991・992は杓文字。992の柄の部分は焦げている。993~1003は箸である。B区の3面下から図示した以外に大量に出土している。1004は曲物。金属で留めてある。

1005~1013は細長い板の先端を加工し、ヘラ状にした木製品。1014~1022は墨書のある木札。赤外線調査により墨痕が確認されなかったものもある。1014には「順心庵」と書かれる。順心庵は聖福寺の塔頭の一つで、聖福寺の南東に接し、順心寺として現在に至っている。順心寺納骨堂改築に伴う94次調査では「順心」と書かれた備前焼の壺あるいは壺の底部片が出土している。1023~1025は木札。1026は櫛。1027は刷毛。1028~1030は燭台（灯台）などの脚部。1031は幅物の鍔か。

1032~1067は加工された木製品で部材の一部であろうが、用途不明品である。1034は先端をねじ状に切ってある。1035は人形の芯か。顔が描かれ髪を墨塗りする。1036も人形の顔か。1047・1048は上下2ヶ所に穿孔があり、青銅金具を黒漆で留めている。

1068~1085は曲物や桶・樽の蓋や底板などである。1075は直線に3ヶ所小孔がある。取っ手をつけていたものとすると鍋の蓋であろう。1079~1081は木釘でつなぎ合わせて円形としている。1086は栓で1083と同一遺構から出土しており、組み合うものか。

1087~1104は下駄である。1087~1094は台部と齒部を組み合わせる差歎下駄である。1095~1100は一本で作る連歎下駄である。1101~1104は歎がない。1101~1103は鼻緒を通す孔がなく、片側を抉っている。1104は鼻緒を通す孔が小さい。

1105~1109は板草履の芯である。2枚の薄板を組み合わせ、藁などの繊維を編んで草履とする。1110も1枚であるが板草履の芯であろう。

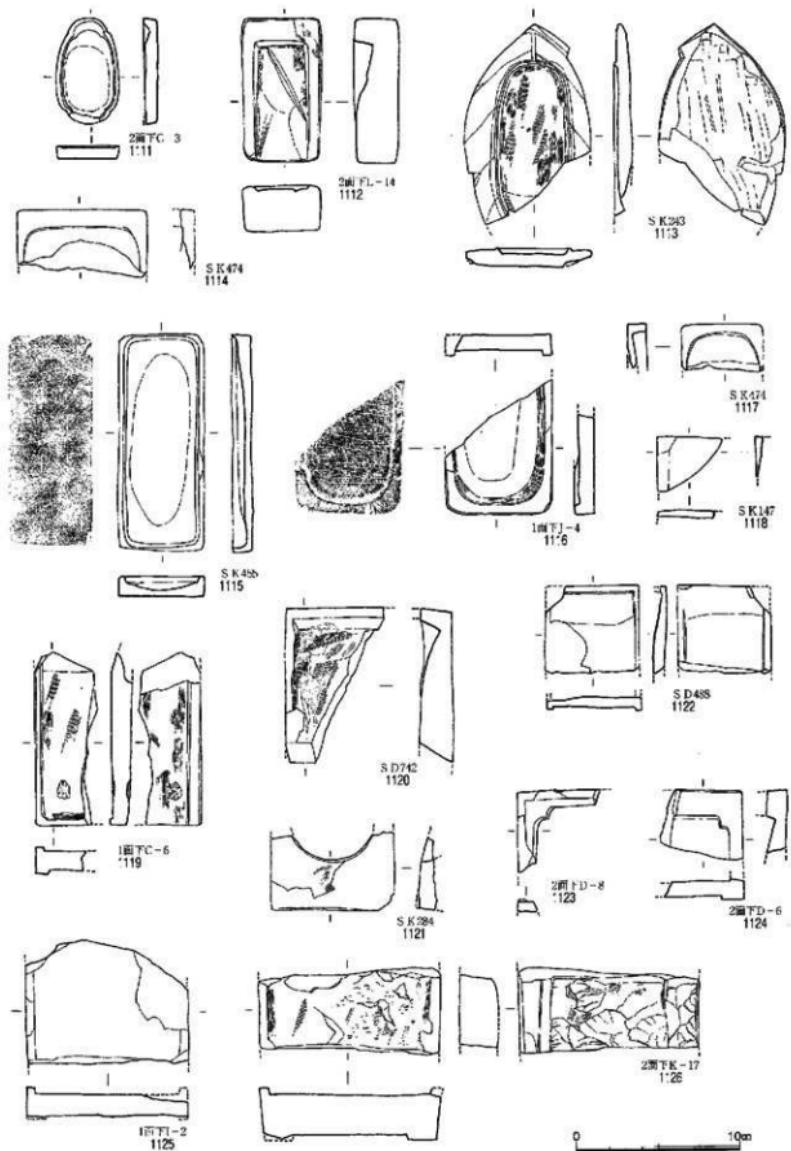


Fig.106 石製品実測図1 (1/3)

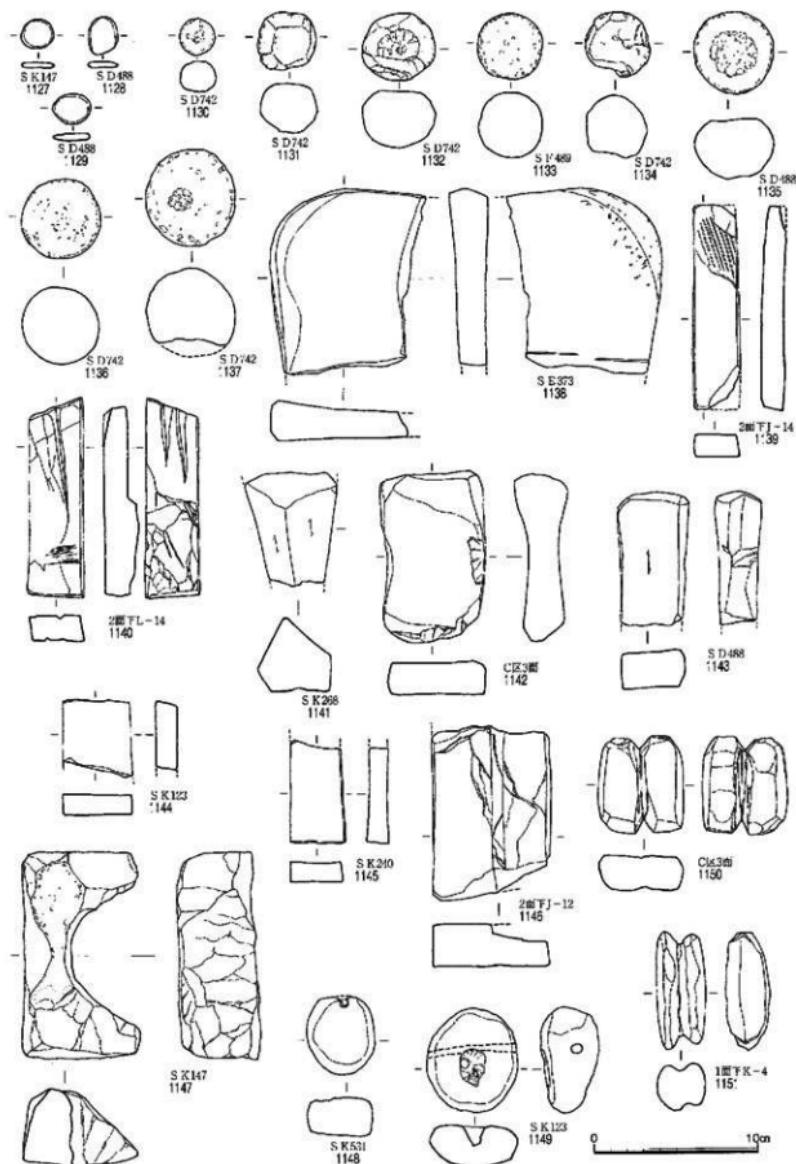


Fig.107 石製品実測図2 (1/3)

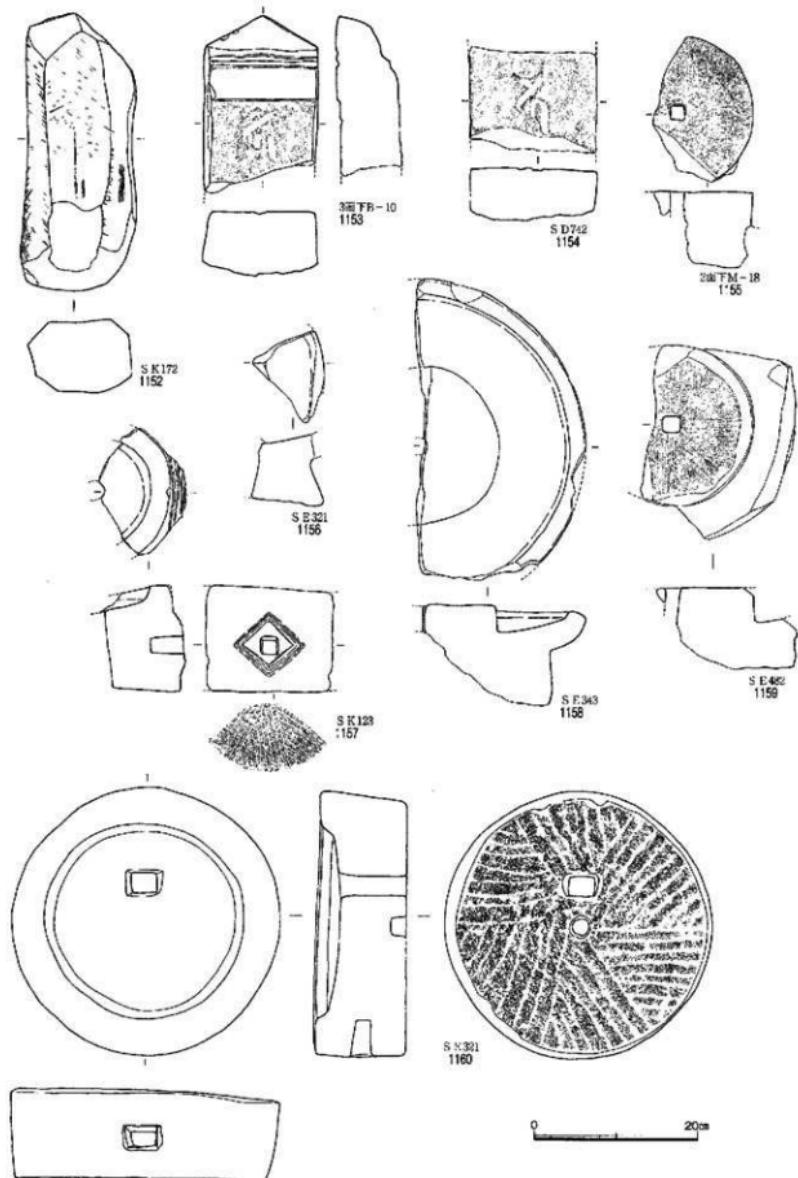


Fig.108 石製品実測図3 (1/6)

#### (14) 石製品 (Fig.106~108)

1111~1126は規である。1115の裏面には「石山秋月」と刻まれている。1116は表面に横方向の線刻が入る。

1127~1129はおはじきか。1130~1137は毬杖の玉。1138~1146・1152は砾石。1147は四角に加工した砾の一边を半円形に抉っている。1148は椭円形に加工した砾石の上方に穿孔する。1149は円形に加工した砾石に側面から穿孔し、貫通させている。1150・1151は滑石製の右鍤である。

1153・1154は板鍤。1153は下半を欠損する。頂部は山形で頭部に2条の横縫がある。額部との境には段があり、塔身には地蔵菩薩の種子「カ」が彫られている。1154は塔身の一部のみ残存する。これも地蔵菩薩の種子「カ」を刻む。1155~1160は石臼。1155・1156・1158・1159は下臼である。1157は上臼で、挽手孔に菱形の飾りをつける。1160は上臼で、目は6分割で7~10の溝を持つ。方形の供給口がある。側面には挽手孔が1ヶ所ある。

#### (15) 鋳造関連遺物 (Fig.109)

1161は銅鉢の鉢型である。1162~1165は取瓶。口縁部に銅が付着している。1166・1167は輪の羽口である。

#### (16) 金属製品・ガラス製品 (Fig.110)

鉄製品や銅製品も多数出土した。今回はそのうちの一部を示す。

Tab.5に出土銭を一覧で示す。S P 5 9 1から20枚程度が縦の状態で発見されている。

1168は小さな鉢を持つ小型の円形青銅鏡。縁は正面三三角形。内区に蓮花、外区に珠文を配す。やや反っている。S E 3 4 5 出土。1169は豆板金。長さ13.2mm、幅7.0mm、重量0.62g。S K 1 1 9 出土。1170は銅製の圓形分釧。長さ9.4mm、幅5.6mm、厚さ2.0~2.5mm、重量0.63gである。S D 4 8 8 出土。1171は銅製の仏像。高さ33.5mm。2面下N-19出土。

1172~1189はガラス玉。1172はS K 2 4 出土。緑色透明。1173はS K 4 9 出土。深緑色不透明。ガラスではないか。1174は1面下A-6出土。明るい不透明のブルー。表面白色の粉をふく。1175は1面下D-4出土。明るい不透明のブルー。白い粉をふく。1176は不透明のブルーを呈する。表面に白い粉をふく。1177はS K 1 2 7 出土。透明のやや緑がかったブルー。1178は2面K-5出土。不透明な黄色を呈する。ガラスではないか。1179はS K 4 7 4 出土。透明なブルー。1180はS K 5 1 2 出土。明るい半透明なブルー。1181は2面下M-1-6出土。明るい不透明なブルー。表面に白い粉をふく。孔がない。1182~1189は明るい半透明のブルー。1182は2面下M-1-8、1183は2面下M-2-4、1184~1189は2面下N-2-4出土。ブルーのガラス玉はらせん状のガラス管を切断し、作られている。

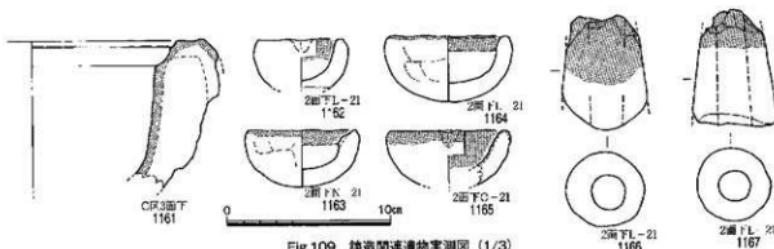


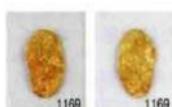
Fig.109 鋳造関連遺物実測図 (1/3)

Tab. 5 出土錢貨一覽

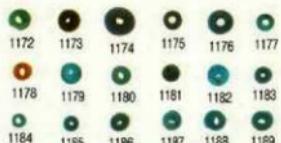
錢貨名	国名	初鑄年	枚数
開元通寶	唐	621	5
太平通寶	北宋	976	2
淳化元寶	夕	990	2
至道元寶	夕	995	2
咸平元寶	夕	998	1
景德元寶	夕	1004	1
祥符元寶	夕	1009	7
祥符通寶	夕	1009	3
天聖元寶	夕	1023	2
景祐元寶	夕	1034	3
皇宋通寶	夕	1038	7
嘉祐通寶	夕	1056	1
治平元寶	夕	1064	2
熙寧元寶	夕	1068	2
元豐通寶	夕	1078	8
元祐通寶	夕	1086	4
紹聖通寶	北宋	1094	2
元符通寶	夕	1098	2
聖宋元寶	夕	1101	1
政和通寶	夕	1111	9
嘉定通寶	南宋	1208	1
大宋元寶	夕	1225	1
洪武通寶	明	1368	4
永樂通寶	夕	1408	3
寛永通寶	江戸	1636	60
鐵錢			1
雁首錢			2
不明			101
合計			239



Fig.110 金属製品実測図 (1/2)



Ph.121 金属製品・ガラス製品 (1168: 約1/2、他: 約1/1)



（出土地點別）

### III まとめ

#### 調査地点の立地と埋立について

今回の調査地点は博多浜と息の浜の接合部西側、博多浜間に位置する。周囲の調査から、博多浜と息の浜の間の湿地が徐々に埋め立てられ、都市「博多」が拡大していく様子が明らかになっている。地下鉄呉服町工区と築港線3次調査の所見によると博多浜と息の浜の間は11世紀後半で埋め立てられ、つながった。その後、16世紀まで徐々に両側から埋め立てられており、29次調査地点の成果から、17世紀には完全に埋め立てられ、博多浜と息の浜は一体となったことがわかっている。

124次調査の遺構の初現は15世紀であり調査区の南側に分布する。これらの遺構がるのは砂層であるが、風成砂ではない。北側は遺構がみられず、16世紀後半に湿地となり埋まっていたようである。調査区の北端では杭列がみられ、周囲からは陶磁器、木製品が多量に出土しており、人為的に埋められている。とはいっても、杭列は貧弱で、埋立土は黒色粘質土であり、積極的に埋め立て、即、土地を利用しようとした感じではない。近辺になると全域で遺構がみられるようになり、これまでの調査結果と同じく、このころ博多浜と息の浜がつながったことが確認された。

#### 陶磁器埋納遺構について

今回の調査で陶磁器136点、金属製品6点を一括埋納した土坑を発見した。博多遺跡群ではこれまで第10次調査で陶磁器の大量・括埋納遺構が発見されており、2例目となる。

40次調査では長径1.0m、短径0.75mの梢円形を呈する4号土坑より陶磁器93点、金属製品2点の一括埋納が出土している。その内容を比較するとTab.6のようになる。どちらも土器類、瓦質土器の類を含まない、皿を主体としているといった特徴が共通している。また、同一の型式が複数存在するものについてはほぼ10枚が1セットになっているという特徴がある。販売の単位を示すものであろうか。また、青磁の香炉が1点ずつ含まれているのも当時の陶磁器のセット関係を考える上で興味深い。

つぎにこの遺構の時期について考えてみたい。

16世紀の一括遺物としてあと2例をあげておく。まず、築港線第1次調査51号土坑である。四隅に柱を据えた方形の土坑から、陶磁器と焼壁等が出土しており、最後に焼け跡整理のゴミ穴として利用されたと考えられている。青花碗C群、小壺の蓋、漳州窯系と考えられる皿C群・直口の高台皿、白磁皿E-2・E-3、龍泉窯系青磁碗B類、景德鎮窯系とみられる「裏白」の青磁皿、方形の青磁小鉢、青釉陶器皿、赤絵の口縁端反皿、朝鮮王朝の白磁皿・粉青沙器壺・無釉陶器等が出土している。

つぎに佐賀銀行立会調査出土一括遺物である。1.2m程の円形土坑から白磁13枚が重なった状態で発見されている。重ねられていたのは白磁環E-1で同一型式のものを埋納したものと考えられる。共伴した遺物は白磁環E-2、白磁A群の皿（口禿げ）、白磁D群の皿、白磁D群と同じような釉土のII線内湾の碗、龍泉窯系青磁碗・腰折の环・稜花皿・盤、青花碗E群・皿B1群・皿C群である。

これらの遺構の青花について分類の構成をまとめるとTab.7のようになる。

築港線1次51号土坑は碗E群、皿E群を含まない。40次調査4号土坑は碗D群、皿E・F群を含んでいる。これらの内容から124次調査のSK236は両者の中間で、やや築港線1次51号土坑に近い時期に位置するものと考えられる。

調査者によると築港線1次51号土坑は永禄2(1559)年、筑紫惟門勢による戦火で炭素されたもの、40次調査4号土坑は天正8(1580)年の龍造寺氏による焼き討ちか同14(1686)年の島津氏による戦火の火事場処理の焼土を含んでいるとされる(池崎2001・大庭2001a)。

したがって124次調査SK236の時期は16世紀第三四半期に位置づけておくが、出土した青花の編年観から考るともう少しさかのばらせててもよいかもしれません。また、佐賀銀行立会調査地点の一括遺物とは青花の内容が似ているが、碗B群の文様の比較から、124次調査SK236の方がやや古いのではないかと考えている。

陶磁器大量埋納遺構は戦国期にみられるところから、これらの性格は埴輪等といった祭祀ではなく、戦乱による火災や強奪をさけるために地面に埋めたと考えるのが自然であろう。これらの陶磁器を埋めた人々は戦乱が収まれば再び元の場所に戻り、掘り返すつもりであったに違いないが、残念なことに元の場所がわからないほどに博多の街が荒廃してしまったのか、あるいは戻ってこられない事態になってしまったのか、これらの陶磁器は今日まで発見されることがなかったのである。

### 道路遺構について

今回の調査では16世紀代の道路遺構が発見された。博多遺跡群の道路は13世紀末~14世紀初頭に整備されており、鎮西探題の手によるものと想定されている(大庭2001b)。これまでの調査で博多湾に向かう縱筋の背路とそれに直交する横筋の街路が発見されている。

縱筋は1次・26次・35次・62次・64次で発見されたものと38次・40次・95次で発見された2条がある。14世紀から16世紀に機能したと考えられている。

Tab.6 陶磁器一括埋納土坑の出土遺物の組成比較

	博多40次 4号土坑		博多124次 SK236	
	種類	点数	種類	点数
白磁壺	6白磁小壺	2		
染付壺	1青花陶器小皿	21		
青花小皿a	4縁付陶器小皿	12		
青花小皿b	1青花小皿	6		
白磁皿I	7青花小杯	14		
白磁皿I a	9青花碗	2		
染付皿I c	11白磁皿3~2	8		
染付皿I b	10青花皿3~1群(12cm)	9		
染付皿I d	10青花皿3~1群(14cm)	10		
染付皿I e	10青花皿3群(澤州窯系)	9		
染付皿I f	3青花皿C群	20		
染付大皿I	2青磁輪花皿	10		
染付大皿II	11青白磁菊皿	4		
染付碗	2青磁菊皿	4		
青磁香炉	1青磁皿(鹿児島窯系)	1		
焼締門附壺	1青磁香炉	1		
黒焼締門附壺	1朝鮮王朝灰青陶器碗	1		
染付壺	1明鮮上野燒釉陶器瓶	1		
国産陶磁器	1備前焼壺	1		
備前徳利				
備前壺		1		
陶磁器合計		93		136
金属製品	2鉄錫	1		
	1鉄製鍋	1		
	1鉄製包利	2		
	1鉄製ひき手	1		
金属製品合計		2		6

Tab.7 16世紀代の陶磁器一括出土遺構との比較

	築港線1次 51号土坑	博多124次 SK236	佐賀銀行立会	博多40次 4号土坑
青花碗C群	○			
青花碗E群		○	○	
青花碗D群				○
青花皿B1群		○	○	
青花皿C群	○	○	○	
青花皿B2群				
青花皿B3群			○	
青花皿F群			○	
	1559年			1580年代

今回発見された道路は3例目の縱筋の街路であるが、整備された時期は16世紀になってからで、周辺部まで次第に道路が整備されていった様子が分かる。この道路を北西に延ばすと息の浜へ向かうが、29次調査の結果から、この間はまだ陸地化されていないことが分かっている。また、佐賀銀行立会調査で息の浜の南側の落ち際が発見されている。つまり、100~150m程は湿地あるいは入り江となっていたはずである。はたしてこの間に道路が結ばれていたかは今後の調査を待たなければならぬが、埋立や橋でつながっていてもおかしくないであろう。

路床は砂質土で細かく整地されており、硬化している。路面上に埴みはあまりみられず、かなりしっかりとした立派な道路であったと思われる。第2面の調査面では東側に土留めの板をはめた側溝（S D 4 8 8）があり、西側はとぎれとぎれに溝がある。断面をみると側溝は幾度も位置を変え存在しており、当初2m程度の道幅が徐々に拡大し、最終的に4mになっている様子がわかる。道路の方向はN - 52° - Wで、他の縱筋と同様西に大きく振れている。

121次調査地点より南60mに位置する87次調査地点では16世紀代の横筋道路が発見されている。調査区の隅で発見されたため正確な方向は不明であるが、今回発見された道路と直交するものと思われる。断面の写真を見る限り整地の状況が似ており、同時期に作られたと考えて良かろう。

これらの道路は果たして誰が整備したのであろうか。15世紀後半~16世紀前半は息の浜の知行が大友氏と内内氏の間でめまぐるしく変わっている。また、その争奪で戦火を交えている。筑前守護の大内氏が息の浜を手にした時に道路を通したのか、菊田神社とつながりの深い大友氏が息の浜から權田神社へ通じる道を通したのか、あるいは博多町人の手によるものか。

今後、これらの道路の延長部の発見や、博多浜と息の浜の間にかかっていたかもしれない橋の発見が期待されるとともに、道路の造営者が誰であったのかという課題を解き明かしていかなければならぬ。

## 参考文献

- 池崎謙： 2001 「博多駅・築港線1次調査51号土坑・4号石組－青花・青磁」『季刊考古学』第75号  
大庭康時 1998 「中世都市博多の成立」「福岡平野の古環境と遺跡立地」九州大学出版会  
大庭康時 2001a 「博多遺跡群第40次調査4号上坑－青花・白磁」『季刊考古学』第75号  
大庭康時 2001b 「福岡市内検出の古代・中世道路遺構について」『博多研究会誌』第9号  
常松幹雄 1998 「博多遺跡群にみる埋立について」「福岡平野の古環境と遺跡立地」九州大学出版会

## 報告書抄録

ふりがな 書名	はかた はちじゅうなな 博多 87						
副書名	博多遺跡群第124次調査の報告						
巻次							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリ・ズ番号	758						
編著者名	田上勇一郎						
編集機関	福岡市教育委員会						
発行機関	福岡市教育委員会						
発行年月日	20040331						
作成機関ID							
郵便番号	810-8621		電話番号	092-711-4667			
住所	福岡県福岡市中央区天神1-8-1						
所取遺跡名	所在地	コード		北緯 東經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号	(日本測地系)			
はかたいせきぐん 博多遺跡群	ふくおかさんみくさかし 福岡県福岡市 はかたぐでんやまち108 博多区店舗町169	40°32'	0121	33° 130° 35' 24' 33° 39"	20000403 ~ 20010310	1,260	社屋ビル建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺物		特記事項		
			集落	中世	枕列 建物 溝 井戸 道路 土坑	2 2 43 8 1 326	中国産青磁・白磁・青花・陶器 朝鮮王朝产粉青沙器・白磁・青器 タイ産陶器 ペトナム産白磁・陶磁器 土師器 瓦質土器 備前焼陶器
博多遺跡群	遺物集中部	12	ピット	多數	肥前焼磁器 本製品 石製品 金属製品 ガラス製品		

## 博 多 87

-博多遺跡群第124次調査の報告-  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第758集

2004年3月31日  
 発 行 福岡市教育委員会  
 福岡市中央区天神一丁目8-1  
 ☎092-711-4667  
 印 刷 株式会社 西日本新聞印刷  
 福岡市博多区吉塚8-2-15  
 ☎092-611-4431



## HAKATA 87

—Results of the 124th excavation of the Hakata sites—

Report of Archaeological Investigations of Fukuoka city, Vol.758



2004

THE BOARDS OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY